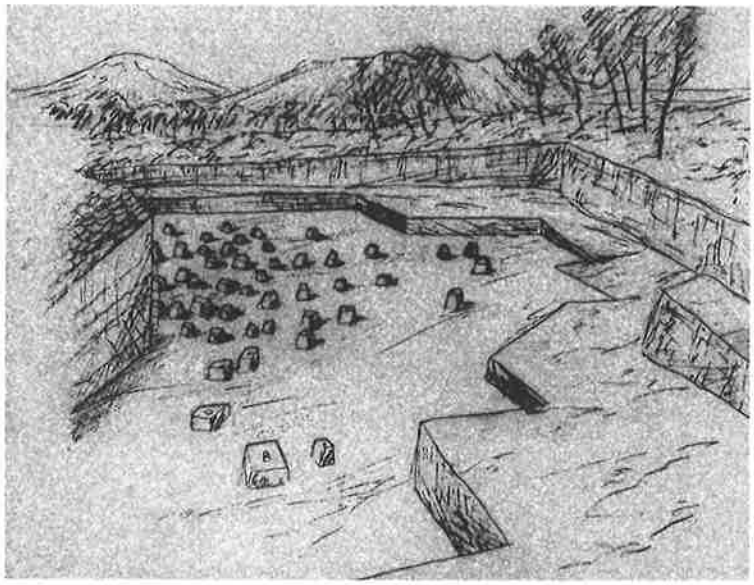
内堀遺跡群Ⅷ



Ｅ区Ａ地点の旧石器調査のようす

1996.3

前橋市教育委員会

巻首図版

Ｂ区Ｈ－５号住居址の竈

Ｂ区Ｘ－１号地割れ

はじめに

関東平野の最奥部に位置する前橋市は、人口28万余人を有する群馬県の県都です。市では、福祉・教育・文化・環境等の整備、拡充を推進し、教育文化・商工業の調和のある「豊かで素晴らしい社会を築くまちづくり」を進めています。

その事業の一つとして、大室公園の造成があります。大室公園は、本市の東部、赤城南麓の中央に広がる豊かな自然、素晴らしい景観、さらに貴重な史跡を活かした公園で、すでに一部については利用を開始し、訪れる市民の憩いの場となっています。

現在、この公園整備にあたり史跡の保存と活用面から大室古墳群（前二子古墳、中二子古墳、後二子古墳と小二子古墳）の調査と内堀遺跡群の調査を実施しています。

第９年次を迎えた内堀遺跡群の調査は、大室公園整備工事により消滅しようとする遺跡を継続して調査しているもので、これまで多くの貴重な資料を得ています。本年度は、民家園造成地より、たくさん旧石器を検出し、前橋の歴史を一気に28,000年前まで溯らせ、文化交流の一端を解明することができました。

この旧石器時代の石器については、本年度、市民文化会館で実施した前橋市文化財展でも展示し、たいへん好評を博したのも印象的な出来事でありました。進む大室公園造成の中で大室古墳群および内堀遺跡群の調査成果が大室地区、ひいては本市の歴史解明に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、多大なるご協力をいただきました関係機関、各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成８年３月31日

前橋市教育委員会

教育長　　岡　本　信　正

例　　言

1　本報告書は、前橋市が整備する大室公園に係る内堀遺跡群内堀遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡は、群馬県前橋市西大室町2510番地ほかに所在する。

3　調査は、前橋市教育委員会が実施した。調査担当および調査期間は以下のとおりである。

調査・整理担当者　　前原　豊・新井真典（文化財保護課埋蔵文化財係）

発掘調査期間／Ａ区（民家園予定地）　発掘調査面積3,000㎡

平成７年４月25日～７月20日

平成７年９月１日～10月30日

／Ｂ区（幹線ケーブル埋設地）発掘調査面積400㎡

平成７年10月23日～10月27日

整理・報告書作成期間　平成７年12日１日～平成８年２月29日

4　本書の原稿執筆・編集は前原・新井が行った。

5　整理作業をはじめ報告書の作成には、伊藤孝子・佐藤佳子・高畑八栄子・竹内るり子・角田正次郎・内藤貴美子・峰岸あや子・吉田真理子の協力があった。

6　発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫に保管されている。

凡　　例

1　挿図中に使用した北は、座標北である。

2　挿図に、建設省国土地理院発行の１／20万地形図（長野・宇都宮）と1／5万地形図（前橋）を使用した。

3　本遺跡の略称は、７Ｅ11である。

4　各遺構・住居址の施設名の略称は次のとおりである。

Ｊ…縄文時代の住居址、JT…縄文時代竪穴状遺構、JD…縄文時代土坑、

H…古墳時代の住居址、Ｄ…土坑、Ｘ…地割れ、Ｏ…落ち込み

5　遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　住居址・土坑・溝…１/60、全体図１/500

遺物　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/2

6　スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　焼土…淡点、炭化物…粗い斑、粘土…細かい斑

遺構断面図　火山降下物…濃点、焼土…淡点、粘土…細かい斑、構築面…斜線

遺物実測図　石器使用痕…網

目　　次

はじめに

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の立地……2
　2　歴史的環境……3

Ⅲ　調査の経過
　1　調査方針……4
　2　調査経過……5

Ⅳ　層　　序……7

Ⅴ　A区の調査（民家園予定地）……9
　1　旧石器時代……9
　2　縄文時代……10
　3　その他……15

Ⅵ　B区の調査（幹線ケーブル埋設地）……16
　1　古墳時代……16
　2　その他……19

Ⅶ　成果と問題点……20
　1　A区の調査……20
　2　B区の調査……21

巻首図版

1　Ｂ区Ｈ－５号住居址の竈　　2　Ｂ区Ｘ－１号地割れ

付　表

頁

Tab. 1 報告書抄録…… 24
2 Ａ区包含層縄文土器一覧表…… 25
3 Ａ区縄文石器集計表…… 26
4 Ａ区遺構別縄文石器一覧表…… 26
5 縄文土器観察表…… 27
6 石器観察表…… 30
7 古墳時代遺物観察表…… 33
8 内堀遺跡群の発掘調査一覧…… 37

挿　図

頁

Fig. 1 内堀遺跡群の位置…… 35
2 内堀遺跡群位置図…… 36
3 内堀遺跡群の遺跡一覧図…… 37
4 内堀遺跡群周辺図(1)…… 38
5 内堀遺跡群周辺図(2)…… 39
6 平成7年度調査経過図…… 40
7 内堀遺跡群標準土層図…… 40
8 平成7年度調査区設定図…… 41
9 Ａ区旧石器試掘トレンチ図…… 42
10 Ａ区縄文時代遺構全体図…… 43
11 Ａ区包含層遺物分布図(1)…… 44
12 Ａ区包含層遺物分布図(2)…… 45
13 Ａ区包含層遺物分布図(3)…… 46
14 Ｂ区遺構全体図…… 47
15 Ａ区旧石器文化層の推定範囲…… 48
16 Ａ区Ｊ－1～3号住居址…… 49
17 Ａ区J-4、ＪＴ-1・2・縄文土坑…… 50
18 Ａ区縄文土坑・土坑・地割れ…… 51
19 Ｂ区H-1～3号住居址…… 52
20 Ｂ区H-4・6号住居址…… 53
21 Ｂ区H-5号住居址…… 54
22 Ｂ区H-5・7号住居址…… 55
23 Ｂ区H-8・Ｘ-1号地割れ…… 56
24 Ａ区縄文時代の土器(1)…… 57
25 Ａ区縄文時代の土器(2)…… 58
26 Ａ区縄文時代の土器(3)…… 59
27 Ａ区縄文時代の石器(1)…… 60
28 Ａ区縄文時代の石器(2)…… 61
29 Ａ区縄文時代の石器(3)…… 62
30 Ａ区縄文時代の石器(4)…… 63
31 Ａ区縄文時代の石器(5)…… 64
32 Ａ区縄文時代の石器(6)…… 65
33 Ａ区縄文時代の石器(7)…… 66
34 Ｂ区古墳時代の土器(1)…… 67
35 Ｂ区古墳時代の土器(2)…… 68
36 Ｂ区古墳時代の土器(3)…… 69
37 Ｂ区古墳時代の遺物(4)…… 70

写真図版

PL. 1 Ａ区縄文時代の調査
2 Ａ区縄文時代の遺構
3 Ａ区縄文時代の遺構・包含層
4 Ａ区縄文時代包含層の調査
5 Ｂ区古墳時代の住居址
6 Ｂ区古墳時代の住居址
7 Ｂ区古墳時代の住居址
8 Ｂ区古墳時代の住居址・地割れ
9 Ａ区縄文時代の土器
10 Ａ区縄文時代の土器
11 Ａ区縄文時代の石器
12 Ａ区縄文時代の石器
13 Ａ区縄文時代の石器
14 Ａ区縄文時代の石器
15 Ｂ区古墳時代の土器
16 Ｂ区古墳時代の土器

Ⅰ　調査に至る経緯

本調査は、前橋市の大室公園整備事業に先立って行われたものである。この調査は昭和62年度に始まり今年度で９年目になる。そもそもの出発は、公園建設予定地の埋蔵文化財を調査し公園設計の基礎資料にすることが目的であったが、ほぼ公園の実施設計が出来上がってからは記録保存を主体にした調査となっている。

第１年次（昭和62年度） 公園予定地約369,000㎡のうち国指定史跡である前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳・小二子古墳や山林、沼などを除く約200,000㎡について東西に10m間隔でトレンチを入れる方法で確認調査を行い、予定地全域についての埋蔵文化財の分布状況を把握した。また、５世紀末葉から６世紀初頭の豪族居館跡である梅木遺跡についても範囲確認調査を実施した。その結果、前二子古墳の方向である西側に張り出しを持ち、２間×３間の柱穴列で構成された門と思われる施設が発見された。『内堀遺跡群（1988）』に所収。

第２年次（昭和63年度） 駐車場予定地の北西部約10,000㎡についての発掘調査を実施した。その結果、多数の形象埴輪を出土した６世紀後半の前方後円墳である内堀１号墳（M－１）と古墳時代前期を中心とした住居址19軒や、弘仁9（818）年の大地震によって形成された地割れを検出された。『内堀遺跡群Ⅱ（1989）』に所収。

第３年次（平成元年度） 昭和63年度調査区の西側を中心に約12,600㎡について発掘調査を実施した。この調査では、円墳である内堀５号墳（M－５）のほかに石槨墓１基、古墳時代前期を中心とした住居址が16軒が検出された。『内堀遺跡群Ⅲ（1990）』に所収。

第４年次（平成２年度） 昭和63年度と平成元年度の調査区を取り囲む範囲の発掘調査と確認調査を実施した。発掘調査の面積は約9,000㎡で確認調査の面積は約2,500㎡で合計11,500㎡である。調査によって古墳時代前期を中心とした住居址37軒や弘仁９（818）年の大地震による地割れや液状化現象を検出した。『内堀遺跡群Ⅳ（1991）』に所収。

第５年次（平成３年度） 平成元年度第Ⅰ調査区の南および西側に隣接したＬ字形の区域約4,000㎡について、後二子古墳・小二子古墳範囲確認調査とともに発掘調査を実施した『後二子古墳・小二子古墳（1992）』。この調査では、古墳時代前期の前方後方形周溝墓１基と円形周溝墓１基や炭窯を検出した。『内堀遺跡群Ⅴ（1993）』に所収。

第６年次（平成４年度） 公園予定地の北西部にある自然丘陵の東側と西側の部分約9,400㎡について、前二子古墳の範囲確認調査と並行して発掘調査を実施した『前二子古墳（1993）』。この調査では、竪穴式石室を持つ内堀２号墳（M-２）や石槨墓、内堀６号墳（M－６）の範囲確認調査や一部試掘調査も行った。『内堀遺跡群Ⅴ（1993）』に所収。

第7年次（平成５年度） 五料沼の北側の部分3,130㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査の前に発掘調査を実施した。調査によって住居址44軒が調査され、内訳は、古墳時代

前期の住居址が35軒、古墳時代後期の住居址が７軒、平安時代の住居址が２軒であった。『内堀遺跡群Ⅵ（1994）』に所収。

第８年次（平成６年度） 前年度の調査区（Ａ区）の水路をはさんだ東側の部分1,200㎡について、２カ年計画の２年次の中二子古墳範囲確認調査と一部並行して発掘調査を実施した『中二子古墳（1995）』。調査によって縄文時代前期の住居址１軒、古墳時代前期の住居址５、中期の住居址２、後期の住居址３軒が検出できた。『内堀遺跡群Ⅶ（1995）』に所収。

第９年次（平成７年度） 前橋市指定文化財の「関根家住宅（赤城型民家）」移築予定地（Ａ区）とその周囲道路部分と後二子古墳の西側に設置されるケーブル埋設予定地の3,400㎡（Ｂ区）についてと２カ年計画の１年次の小二子古墳範囲確認調査と併行しながら調査を実施した。調査によってＡ区からは縄文時代の竪穴住居址４軒をはじめ旧石器時代の石器群などを調査でき、Ｂ区からは古墳時代前期の住居址６軒、後期の住居址２軒を調査できた。本報告書である『内堀遺跡群Ⅷ（1996）』に所収。

なお、初年度以前の経緯については『内堀遺跡群Ⅰ（1988）』に詳しく述べられているので本書では省略する。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺 跡 の 立 地

内堀遺跡群が所在する前橋市西大室町は、前橋市の中心市街地から東へ約15㎞の所にある。遺跡は国道50号線東大室十字路より北へ２㎞で、県道前橋・今井線と県道伊勢崎・深津線の交差点から北東１㎞に位置している。またＪＲ両毛線伊勢崎駅から遺跡へは北約７㎞にあり、上毛電鉄粕川駅からは南南西に約３㎞にある。東側は多田山と呼ばれる火山泥流による丘陵地形があり、赤堀町との境となっている。また、北に接する粕川村とは、七ツ石とよばれる信仰の対象となっている巨石のある丘陵とそれに連なる丘陵地形を行政上の境界としている。

平成７年度の調査区は後二子古墳の南西、中二子古墳の北西にあり、大室公園造成区域である内堀遺跡群の中では西に位置し、標高129ｍ～133ｍである。

本遺跡群の東端には五料山とよばれる自然丘陵があり、また、後二子古墳の南側、さらには前二子古墳が造られた所も丘陵地形となっている。この地区の丘陵地形の基盤は、すべて粗粒安山岩よりなる火山泥流によって形成されており、それらが露出しているのが、七ツ石や石山観音、産泰神社裏の巨石などである。また、平成３年度調査区内から小さな谷地が入り、かつては湧水による小河川があったものと推定される。現在五料山の西側には小河川が流れているが、近世頃にこの谷地

の南側に堤を造り、堰止めてできたものが五料沼である。本遺跡のある丘陵の北側には現在水田地帯が広がっているが、下縄引Ⅰ遺跡や粕川村五反田遺跡の存在からこの地域を当時の生産基盤と考えることが難しいため、上記の谷地を含めた南側に生産基盤を求めたい。

2　歴史的環境

内堀遺跡群のある城南地区は四季の恵みに抱かれた風光明媚な所であるとともに、大室三二子古墳を始めとした周知の遺跡が存在する考古学上にも重要な地域である。そこで、本遺跡群を理解するために周辺の歴史的環境をみてみたい。

旧石器時代　まず、今年度の調査中心のひとつである旧石器時代の周辺遺跡として、荒砥川流域の洪積台地先端部を中心に尖頭器がまとまって出土した№.４の荒砥北三木堂遺跡、ＡＴ下の国内最大の「環状ブロック群」が検出された№.26の下触牛伏遺跡、また、神沢川の東部にあたる№.27の横俵遺跡群では「流れ山」の頂上部から、さらには、宮川の沖積地に臨む№.３の柳久保遺跡群柳久保遺跡や頭無遺跡において台形様石器、ナイフ形石器、細石刃等の旧石器文化の遺物が出土している。

縄文時代　続く縄文時代には、草創期の遺跡として爪形文土器が検出された№.26の下触牛伏遺跡がある。№.25の二本松遺跡や柳久保遺跡群からは、田戸下層、上層期の土器が出土している。前期の遺跡は、№.24の荒砥二之堰遺跡、№.６の荒砥上ノ坊遺跡、№.19の荒砥上諏訪遺跡など検出例は多い。中期後半の遺跡も多く確認されているが、いずれも５～10軒の中・小規模の集落にとどまっており、赤城村三原田遺跡、赤堀町曲沢遺跡のような大規模遺跡の存在は知られていない。

弥生時代　弥生時代の遺跡は水田耕作に適した沖積地を臨む台地や微高地に立地しており、中期後半から後期の小規模集落が№.５の荒砥島原遺跡、№.20の荒砥上川久保遺跡、№.16の西原遺跡、№.17の西迎遺跡などで見られる。

古墳時代前期　古墳時代前期は、本遺跡の北西に隣接する№.18の上縄引遺跡をはじめ、№.13の北山遺跡、№.14の七ツ石遺跡、№.22の久保皆戸遺跡、№.21の梅木遺跡などがある。この時期の遺跡は、住居出土の土器を見る限り複雑な様相を呈しており、弥生時代後期の樽式・赤井戸式土器はこの時期まで残存し、土師器と共伴する。そのうち、浅間Ｃ軽石降下後およびFA降下前の各遺跡の住居は、内堀遺跡群下縄引Ⅱ遺跡の集落に対応するものであると考えられる。また、下縄引Ⅱ遺跡の集落の墓域として上縄引遺跡の周溝墓群を考えている。

古墳時代中～後期　５世紀後半から６世紀代に入ると、№.23の赤堀茶臼山古墳をはじめ強大な支配者の存在を暗示する大室三二子古墳が築造され、この地区が当時の中心的様相を呈するようになる。梅木遺跡で検出された首長層の居宅は大室三二子古墳のうち、前二子古墳と何らかの関係があると推定される。このほかに居館址として、№.７の荒砥荒子遺跡、№.１の丸山遺跡などがある。また、荒砥荒子遺跡の豪族居宅遺構と関連し、№.８の舞台遺跡１号古墳および９№.の西大室丸山遺跡があり、豪族の勢力格差により居宅・古墳の規模、祭祀行為に相違があったことが窺える。６世紀

後半から７世紀代に入ると小円墳の群集化が進み、１～３基程度の散在する小円墳も出現するようになり、支配階層の多層化と系列化が進んだことを意味している。粕川村深津の№15の三ケ尻西遺跡では、７世紀後半の製鉄遺構３基と住居跡が確認された。古墳群が密集した地域であることから、有力な豪族が招いた技術者の集落址で製鉄品造りの拠点になっていたと推定される。また、西大室では赤城南麓の古墳時代終末期を代表する截石切組積石室をもつ№10の荒砥富士山古墳が築造され、高度な石材加工技術を習得していたことが窺える。

奈良・平安時代　居住域が台地全体に広がり、水田開発が進み、№２の荒砥諏訪西遺跡では微高地まで水田化している、一方、№28の上増田町中原遺跡群には９世紀前半の大規模な条里制水田が検出された。また、12世紀の中頃、開削されたとされる女堀の遺構も残存している。さらに、奈良～平安時代の炭窯址が横俵遺跡群や粕川村の西原古墳群、大胡町の上大屋・樋越地区遺跡群等の近隣市町村から検出されており、当時赤城南麓の近隣で盛んに木炭生産が行われていたことがうかがえる。

中世以降　城郭としては、№11の大室城、№12の元大室城、今井城、赤石城などがあり、荒砥北三木堂遺跡などでは多数の墓坑が調査されている。また、井戸や溝など近世の遺構も、多くの遺跡で確認されている。

Ⅲ　調　査　の　経　過

１　調 査 方 針

1)　内堀遺跡群の調査区設定

調査の実施にあたっては、国家座標に基づいた基線で調査区を設定した。平成２年度の調査から、本遺跡群全域にわたる４ｍ×４ｍグリッドを設定した。調査グリッドの北西隅を基点とし、図面の北を上にした場合、右から左、すなわち西から東に０～X250グリッドを設定した。上から下、すなわち北から南へは、Y0～Y200Gを設定した。

ちなみに南北ラインである

X0ライン	－57,300m	Y0ライン	＋43,400m、
X100ライン	－56,900m	Y100ライン	＋43,000m
X200ライン	－56,500m	Y200ライン	＋42,600mとなる。

2)　Ａ区の調査（民家園予定地）

民家園敷地は、ほぼ正方形であるが、北に対して45°に近い傾斜を持つため、菱形となり、４ｍ方眼を掛けた場合、非効率的な面が予想された。しかし、区域が四角形であるため、図面編纂等を

考慮して全体グリッドを採用した。

調査の対象は、民家園と民家園を取り囲む北・東・南の道路部分を合わせた面積3,000㎡の区域である。グリッドの設定にあたっては、公園内の既設多角点T.22およびT.21を基準として杭打ちを行った。ベンチマークの設置は、同じく公園内の既設多角点T.22を基準として、132.0mの水準杭を設置した。

ちなみに調査区内の

Y125－X30グリッドは、第Ⅸ系　＋42,900.0m・－57,180.0m

北緯36°23′05″.9850　東経139°11′45″.2596　にあたる。

調査は、時間的制約があるため、掘削用重機を用いて表土の除去を行うことにした。並行してグリッド設定、ベンチマーク（水準点）の設置を行った。その後、平板測量で遺構の配置図を作成し、各遺構の調査工程を検討した。具体的には

①遺構の掘り下げ　セクションベルトを設けて土層観察を行いながら進める。

②遺物の取り上げ　10cm四方以上のものは縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドットで表記した平面図を作成する。取り上げに際しては、遺物台帳に諸属性を記録する。

③炉と竈の図化　原則として縮尺1/10にて図化する。

④遺構平面図　原則として縮尺1/20にて実施する。

以上の方針の下に調査を進めた。

3)　B区の調査（幹線ケーブル埋設地）

調査区の設定にあたっては、国家座標に対して斜めであるため、内堀遺跡群全体グリッドとは別に、北東の中心と南西の中心を結んで４m四方のグリッドを設定した。

西から東にアルファベット大文字を用いてＡ～Ｈライン、北から南へ0～40ラインを設定した。杭打ちは遺構図化の必要範囲に適宜行った。調査面積400㎡である。

方眼杭打ち測量は、方眼杭の打設後、座標の位置付けを行った。その際に使用した点は、後二子古墳に設定してある埋設コンクリート杭のター30G、ター39Gである。ベンチマークの設置にあたっては、ター39Gを基準として130.5mの水準杭を設置した。

ちなみに、　F-6グリッド　X=43,049.423m・Y=－56,918.810m、

F-35グリッド　X=42,945.325m・Y=－56,969.991m

であり、グリッドの北に対する振れはN－26°10′54″－Eである。

2　調 査 経 過

1）A区の調査（民家園予定地）

若葉萌え出４月27日、平成７年度内堀遺跡群の調査が始まった。７日間の0.4m3のバックフォーによる表土掘削の後、直ちにジョレンがけを実施したところ、調査範囲の全域から縄文土器と石器

の出土がみられたことから縄文時代包含層の存在が明らかになった。また、平成５年度に実施した試掘調査で縄文時代の遺構が確認されていることや、本調査区が南へと見晴らしのよい台地であることから、旧石器時代文化層の存在も予想されたため、縄文包含層と縄文遺構、旧石器文化層の３面調査が必要となった。

したがって、調査は、①縄文時代包含層の掘り下げ、②縄文時代の遺構検出、③旧石器時代文化層の調査といった３工程が必要と考えられた。

①　縄文時代包含層の掘り下げ　５月～６月中旬にかけて行った。ジョレンがけで出土した遺物について、４ｍグリッドごとに取上を行った。さらに、遺物の多いグリッドから順次、掘り下げを行いながら周辺グリッドへ拡大をしていった。最終的に掘り下げを行ったグリッドは44グリッドであるため、全体190グリッドの２割強の部分を調査したことになる。

出土遺物は縄文時代早期から後期の土器、石器があげられるが、縄文時代初頭の有舌尖頭器も出土した。

②　縄文時代の遺構検出　包含層はⅢ層であるソフトローム状の淡色黒ボク土中に存在するため、遺構の確認が困難を極める状況であった。したがって陥し穴等の遺構はⅣ層であるハードローム層面でないとほとんど確認できないため、６月下旬に、バックフォーでⅢ層下面を除去した。調査は、７月初旬から中旬まで行い、住居址４軒・竪穴状遺構２基・土坑９基を検出した。Ｊ－１号住居址からは300点を超える遺物が出土した。

③　旧石器時代文化層の調査　６月下旬に縄文時代の遺構を避けて10カ所に試掘トレンチを設定した。その結果、約2.2～2.5万年前のAT層の下位から石器が９点出土した。９点の石器は、黒曜石製の剥片７、黒色頁岩製の局部磨製石斧１と黒色頁岩製の斧形石器１であり、石斧２点は近接して出土した。

しかし、当初に積算した予算を50％も削減された調査であるため、旧石器時代文化層の試掘で石器を検出し、拡大して調査を実施する必要が生じたが、予算不足が生じた。そこで、

１案･･･調査を次年度に送り民家園工事も１カ年先に延長する。

２案･･･何らかの方法で予算措置を講じ、調査を完了させ、予定通り工事を行う。

といった二者択一に迫られてきた。

なかなか、結論が出ないため、７～８月は別に計画していた国指定史跡である小二子古墳の発掘調査に精力を切り替え、解決を待つこととした。

８月も後半になると、小二子古墳の掘り下げが大方終了した。作業員の手も余ってきたが、なかなか結論はでない。そんな中の９月にやっと結論がでた。予算措置がなされ発掘調査が開始されることになり、９～10月の２カ月間の調査で135点の石器が出土した。

2）Ｂ区の調査（幹線ケーブル埋設地）

後二子古墳の東側から中二子古墳の西側までの延長約200ｍに幅0.65ｍで深さ１ｍの幹線ケーブル埋設のための掘削が実施され、公園緑地課から立ち会いの要請があった。立ち会い調査を実施した

ところ古墳時代前期と後期の住居址が７～８軒確認できた。その旨を公園緑地課に連絡するとともに、掘削の幅について確認をとった。その結果、さらに２～３ｍの幅で広げる必要があり、マンホール設置カ所は更に広範囲を掘削するとの連絡を受けた。工事も逼迫していることから、10月下旬の５日間で調査を完了することとし、予算的な措置については、文化財保護課と公園緑地課、財政課で協議を行い、後日予算流用の形となった。

調査は当初の約束期間である５日間で済ませた。その結果、住居址10軒、土坑１基、地割れ１条、縄文時代包含層が検出された。

こうして、土師器、縄文土器・石器、旧石器ありと種類に富んだ出土品を伴う平成７年度の内堀遺跡群の現場作業は、晩秋、10月31日、ラジコンヘリコプターによる空撮で終了となった。

3）文化財展開催や整理場整備と報告書作成

11月16日から19日までの4日間にわたって前橋市民文化会館大展示ホールで展示会『大室古墳群の実像にせまる』が開催された。また、会期中の11月19日には、『大室古墳群の実像にせまる』と題した講演会とシンポジウムが開催された。この準備に追われるとともに、『赤城南麓の大豪族の栄華　大室古墳群パンフレット』（Ａ４版カラー16頁）の編集刊行を行った。また緊急発掘調査現場への応援や旧東部共同調理場に新設される整理事務所の改修作業に追われる日々を送った。遺物整理作業は、平成7年12月1日から平成8年2月29日まで行い、本報告書の作成を行った。

Ⅳ　層　　序

Ｘ30－Ｙ120グリッドの土層を基にして本遺跡の標準土層図を作成した。民家園予定地の調査区は、内堀遺跡群の南西部に存在し、幹線ケーブル埋設工事立ち会いの緊急調査は後二子古墳のすぐ東に隣接して存在する。

約20～30万年前に赤城山の山体崩壊によって、引き起こされた梨木泥流によって形成された「流れ山」を中心とした標高129～137mの丘陵性台地である。「流れ山」の頂上には梨木泥流によって運ばれた大形の礫が一部露出し、土層の堆積も薄く、ちなみにⅦ層のＡＴ（姶良丹沢パミス）が表面から50～60cm程度で検出できる。

Ⅰa層　黒褐色粗砂層　耕作土層。1,108年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As－B）を50％以上含む。粘性なく、締まりあり。

Ⅰb層　黒褐色土層　As－B、４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As－C）、６世紀中葉初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳軽石Hr－FP（榛名二ツ岳軽石：６世紀中葉降下）を含む粗砂層。粘性はないが、締まりはある。

Ⅱa層　As－B純層　天仁元（1108）年に浅間山より降下した軽石層。わずかに間層をはさんで上部にA

s－Kk（浅間粕川テフラ）が存在する場合もある。

Ⅱb層　黒色細砂層　As－C、Hr－FP（径20mm）を15％含む細砂層。粘性を有し、締まりあり。

Ⅱc層　暗灰黄色細砂層　粘性は少しあるが、締まりが弱い。

Ⅲ層　黄褐色細砂層　淡色黒ボク土。粘性は少しあるが、締まりが弱い。縄文時代遺物包含層。

Ⅳa層　明黄褐色硬質ローム層　約1.3～1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As－YP)を10％、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石(As－Sr)、または1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第１軽石（As－OP1)を５％含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅳb層　明黄褐色土層　ハードローム層。As－YPを５％、As－SrまたはAs－OP1を10％程度含む微砂層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅴ層　明黄褐色硬質ローム層　約1.8～2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As－BP)をブロックで20～30％程度含む層。粘性があり、硬く締まる。

Ⅵ層　明黄褐色硬質ローム層　As－BPGroupをブロックで15％程度含む層。粘性があり、締まりが弱い。古環境研究所の分析によれば基底付近に約2.2～2.5万年前に南九州の姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰(AT)の降灰層準があると考えられる。また、As－BPGroupの基底の室田軽石(MP)の存在も考えられる。

Ⅶ層　明黄褐色微砂層　風化土壌。粘性を有し締まりは弱い。上部にAT（姶良丹沢パミス:約2.2～2.5万前）の含有が極大値を示す。

Ⅷ層　明黄褐色粘土層　暗色帯。粘性が強く、締まりの弱い粘土層。

色調でａ・ｂの２亜層に分類できる。ｂ層の下部から灰色のチャートの岩片がブロックで検出された。古環境研究所に分析を依頼した所、約3.1～3.2万年前に赤城山から噴出した赤城鹿沼テフラ（Ag－K)の上部に相当する水沼ラピリ（CLP)およびその上位の赤城小沼テフラ（Ag－KLP)と一致する。噴火の規模や分布などから水沼ラピリ（CLP)の可能性が大きいという分析結果を得た。

Ⅸ層　明黄褐色粘土層　粘性が強く、締まりのある粘土層。a～dの４亜層に分類できる。

Ⅹ層　明黄褐色軽石層　比較的風化しており、層相などから約4.1～4.4万年前に榛名火山から噴出した榛名八崎軽石(Hr－HP)に同定される。３亜層に分類でき、Ⅹa層は比較的大粒な軽石層、Ⅹb層は火山灰層、Ⅹc層は軽石層である。

Ⅺ層　褐色粘土層　水性堆積で非常に粘性が強い。

Ⅻ層　青灰色砂礫層　巨礫によって構成される。梨木泥流（約20～30万年前）によって形成されと考えられる「流れ山」である。

Ⅴ　Ａ区の調査（民家園予定地）

１　旧石器時代

旧石器時代についての調査は、来年の平成８年度に継続して実施するため、報告については来年度刊行の『内堀遺跡群Ⅸ』に平成７・８年度調査を合わせて掲載する予定である。ここでは平成７年度調査の概要の記述に留めておく。

１）試掘調査

旧石器時代の文化層が検出された127ｍ～130ｍの丘陵性台地は、北から南南西に緩やかに延びる地形である。地形が急激に落ち込むあたりから台地中央に向かい２×４ｍのトレンチを10カ所ほど設定した。まず、縄文時代の調査によりソフトローム層の除去が終わり、ハードローム層のⅣ層面まで掘削が終わっていたので、人力によりＡＴ層下面（Ⅷ層）まで人力による掘り下げを行った。その結果、試掘坑No６とNo７からそれぞれ暗色帯上面（Ⅷ層）から剥片が１点ずつ出土した。そのため更に試掘坑No７をやや長めに拡張した。そこから斧形石器と局部磨製石斧がまとまって出土したため、さらに西側に試掘坑No12トレンチを追加した。この試掘坑から遺物がまとまって出土したために調査を拡大した。

２）調査

結果、Ａ地点と呼んだ黒曜石を主体にする石器群をからは120点の石器が出土した。さらに東側の試掘坑No６についても１点見つかったことから拡張をしたところ15点の黒色頁岩と黒色安山岩で構成される石器群がみつかったためＢ地点と呼んだ。石器出土の層位は多少の幅を持つものの基本的にはＡＴ下位の暗色帯上部に所属するものといえる。そのほかの層位からは文化層は検出されず単一文化層の遺物として把握される。

①Ａ地点の石器群

調査の結果、Ａ地点の石器は120点を数える。ナイフ形石器、台形様石器、削器、抉入石器、彫刻等形石器、楔形石器、斧形石器、局部磨製石斧、敲石、剥片、砕片、石核など構成される。礫群は確認されず、焼土・炭化物の分布も認められなかった。Ａ地点の石器130点の石材内訳は、黒曜石が主体を占め、黒色頁岩や黒色安山岩、粗粒輝石安山岩、ホルンフェルス、結晶片岩、チャートが認められた。

石器の出土層位はⅦ層（ＡＴ層）下部から検出された。一部Ⅵ層から出土したものもあるが、本来は暗色帯であるⅧａ層に所属するものである。石器の垂直分布は、高低差の大きい所で50cmほどあるが、平均した場合30cm前後の幅が認められた。ちなみにAT（姶良丹沢パミス）は約2.2～2.5万前という年代が算出されている。

②Ｂ地点の石器群

調査の結果からＢ地点の石器は15点を数える。器種でみるとナイフ形石器、斧形石器、台石、敲石、剥片で構成される。礫群は確認されず、焼土・炭化物の分布も認められなかった。

Ｂ地点の石器石材内訳は、黒色安山岩や黒色頁岩、粗粒輝石安山岩であり黒曜石の使用がなく、在地の石材で構成される特徴を有する。

石器の出土層位はＡ区と同様にⅦ層（ＡＴ層）下部から検出された。一部Ⅵ層から出土した石器もあるが、本来は暗色帯であるⅧａ層に所属するものである。石器の垂直分布は、高低差の大きい所で50cmほどあるが、平均した場合30cm前後の幅が認められた。

2　縄文時代

縄文時代の遺構・遺物は調査区の南西に延びる台地の標高129m～133mにまとまって検出された。竪穴住居址４軒、竪穴状遺構２基、土坑９基、包含層によって構成されていた。住居址４軒は前期諸磯ａ式期のものであり、竪穴状遺構や土坑についても遺物が検出されなかったが住居址とほぼ同じ時期と考えられた。

包含層からは縄文式土器2,061点、石器1,036点が検出された。土器は早期の撚糸文土器から後期後半の堀之内式まで断続的に認められた。しかし、量的には早期終末から前期前半にかけての土器が主体を占め、その他の時期の遺物は極めて少なかった。

1)　住居址

Ｊ－１号住居址（Ｆｉｇ．23・42・45、ＰＬ．１・９・11）

（位置）Ｘ27・28、Ｙ127・128G（確認面）全体層序Ⅲ層上面で確認された。（形状）隅円正方形（標高）130.34m（面積）16.77㎡（方位）Ｎ－73°－Ｗ（床面）東から西にやや傾きを持つ。床面は軟らかく地山のⅣ層との識別が困難であった。確認面からの深さ12.1cmを測る。（炉址）楕円形の地床炉。規模は長径0.78m×短径0.48mである。底面は硬く赤化していた。長軸の縁辺に偏平な粗粒輝石安山岩の礫を２石用いている。（柱穴）柱穴は炉址の北側に長径0.78m×短径0.48mの１個が検出された。（遺物）土器238点、石器が260点出土した。土器の内訳は沈線文２、縄文繊維74、無文繊維６、竹管文が97、その他無文54が出土している。石器の内訳は石鏃６、石錐１、楔形石器１、削器４、打製石斧８、磨製石斧１、磨石・凹石４、調整痕のある剥片１、剥片・砕片227、結晶片岩片６である。このうち縄文土器１～20、石器21点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

Ｊ－２号住居址（Ｆｉｇ．23・42・45、ＰＬ．１・９・11）

（位置）Ｘ27・28、Ｙ127・128G（確認面）全体層序Ⅲ層上面で確認された。（形状）長方形（標高）130.50m（面積）9.47㎡（方位）Ｎ－６°－Ｅ（床面）北から南に傾きを持つ。確認面が浅く床面

の検出は困難であった。Ⅳ層面に構築されている。確認面からの深さは１cmと浅かった。（炉址）楕円形の地床炉。規模は長径64m×短径46mである。底面は硬く赤化していた。（遺物）土器135点、石器が46点出土した。土器の内訳は条痕文６、縄文繊維53、無文繊維６、竹管文が43、その他無文17が出土している。石器の内訳は石鏃２、削器２、打製石斧３、磨製石斧１、磨石・凹石３、剥片・砕片35である。このうち縄文土器11点、（21～31）石器10点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

Ｊ－３号住居址（Ｆig. 23・42・47、ＰＬ．１・９・11）

（位置）Ｘ31・32、Ｙ128・129G（確認面）全体層序Ⅲ層上面で確認された。（形状）長方形（標高）130.26m（面積）5.60㎡（方位）Ｎ－41°－Ｗ（床面）北から南に緩やかに傾斜を持つ。確認面が浅く北半分の床面を検出したに過ぎない。Ⅳ層面に構築されている。確認面からの深さは2.7cmを測る。（炉址）円形の地床炉。規模は長径0.53m×短径0.47mである。底面は硬く赤化していた。（遺物）土器17点、石器10点と出土は少なかった。土器の内訳は縄文繊維８、無文繊維１、竹管文が４、その他無文４が出土している。石器の内訳は石錐１、削器４、打製石斧１、剥片・砕片３である。このうち縄文土器２点、（32・33）、石器３点、石製品１点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

Ｊ－４号住居址（Ｆig. 23・42・45、ＰＬ．１・９・12）

（位置）Ｘ32・33、Ｙ128・129G（確認面）全体層序Ⅲ層上面で確認された。（形状）正方形（標高）130.91m（面積）16.65㎡（方位）Ｎ－29°－Ｅ（床面）東から西にやや傾きを持つ。床面は軟らかく地山のⅣ層との識別が困難であった。確認面からの高さは4.25cmを測る。（炉址）地床炉を２個検出。Ｆ１は長径0.80m×短径0.51m×深さ0.08mである。Ｆ２は長径0.25m×短径0.21mである。２個とも底面は硬く赤化していた。（柱穴）柱穴は炉址の北側に長径0.31m×短径0.25mの１個検出された。（遺物）土器15点、石器が10点出土した。土器の内訳は縄文繊維10、無文繊維１、その他４が出土している。石器の内訳は削器１、剥片・砕片９である。このうち縄文土器２点、石器１点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

2)　竪穴状遺構

JT－１号竪穴状遺構（Ｆig. 24・42・45、ＰＬ．２・９）

（位置）Ｘ23、Ｙ121G（重複）JD－６と重複（確認面）全体層序Ⅲ層で確認された。（形状）隅円正方形。長軸2.9m、短軸1.4m。JD－６がほぼ中央部に位置するが層位を検討した結果では同時期存在と考えられる。（底面）立ち上がりは急傾斜あり、底面は東が高く西が緩やかに傾斜を持つ。確認面からの深さは20cmを測る。（遺物）土器５点が10点出土したに過ぎない。土器の内訳は竹管文５が出土している。このうち36・37の２点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時

代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

JT－２号竪穴状遺構（Ｆｉｇ．24・42・45、ＰＬ．２・９・12）

（位置）Ｘ24、Ｙ121・122G（重複）JD－３・７と重複。（確認面）全体層序Ⅲ層で確認された。（形状）隅円正方形。長軸2.95ｍ、短軸2.08ｍJD－３・７がほぼ北西部に位置するが層位を検討した結果では同時期存在と考えられる。（底面）立ち上がりは急傾斜であり、底面は東が高く西が緩やかに傾斜を持つ。確認面からの深さは42cmを深い。（遺物）土器４点、石器が４点出土した。土器の内訳は条痕文１、竹管文１、その他２が出土している。石器の内訳は敲石２、剥片・砕片２である。このうち38・39の２点を図示した。（備考）出土遺物から所産時期は縄文時代前期前半の諸磯ａ式期と考えられる。

3）土　　坑

JD－１号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．２）

（位置）Ｘ28、Ｙ127G。（形状）楕円形。長径77×短径59cm、深さ33cmを測る。平面形・断面形とも整美された形である。底面はほぼ平坦である。（備考）出土遺物がないことから所産時期の決定は困難であるが縄文時代前期前半諸磯式期と推定できる。

JD－２号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．２・12）

（位置）Ｘ32、Ｙ131G。（形状）隅円正方形。長径110×短径99cm、深さ57cmを測る。（遺物）打製石斧が１点検出されたに留まった。（備考）本遺構から石器が１点出土したに過ぎない。他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD－３号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．２）

（位置）Ｘ35、Ｙ126・127G。（形状）隅円正方形。長径125×短径90cm、深さ96cmを測る。（備考）遺構形状から縄文時代早期後半の所謂陥し穴と判断した。

JD－４号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．２・９）

（位置）Ｘ35、Ｙ123G。（形状）隅円正方形。長径62×短径53cm、深さ29cmを測る。（備考）他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD－５号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．７）

（位置）Ｘ29、Ｙ117G。（形状）隅円正方形。長径80×短径67cm、深さ26cmを測る。（遺物）隆帯と刺突を有する条痕文(40)が１点出土した。（備考）出土遺物や他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と考えられる。

JD－６号土坑（Ｆｉｇ．17、ＰＬ．９）

（位置）Ｘ23、Ｙ121G。（形状）隅円正方形。長径170×短径152cm、深さ105cmを測る。JT－１号竪穴状遺構の中心に位置する。（遺物）土器は縄文繊維１、無文繊維１、竹管文２が出土している。図示できたのは２点（41・42）である。石器は敲石１、蜂の巣石１が出土している。（備考）出土

遺物と他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD－７号土坑（Ｆｉｇ．17）

（位置）Ｘ23・24、Ｙ122G。（形状）隅円正方形。長径125×短径103cm、深さ20cmを測る。（備考）他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD－８号土坑（Ｆｉｇ．17、ＰＬ．３）

（位置）Ｘ23・24、Ｙ122G。（形状）隅円正方形。長径115×短径106cm、深さ55cmを測る。（備考）他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

JD－９号土坑（Ｆｉｇ．18、ＰＬ．９）

（位置）Ｘ23、Ｙ122・123G（形状）隅円正方形。長径75×短径72cm、深さ49cmを測る。（遺物）縄文繊維１、竹管文１が出土し、図示できたのはうち１点（43）である。（備考）出土遺物と他の遺構から縄文時代前期前半諸磯期の所産と判断した。

4）　包含層の遺物

包含層からは総数2,061点の縄文土器片が出土した。これらの内訳についてはTab.２に示したとおりである。早期終末から前期初頭の遺物が1,457点と全体の71％を占めていた。次いで前期後半の諸磯a、ｂ式が300点と14.5％を占める。このほかに少量ながら、撚糸文や沈線文、中期から後期の土器も出土している。

ａ．土器（Ｆｉｇ．24～26、ＰＬ．３・４・10・11）

第１群土器は撚糸文系土器群を扱った。44・45の２点である。

第２群土器は沈線文系土器群である。47は田戸下層式に該当する。

第３群土器は条痕文系土器群を扱った。縄文時代早期後葉から前期初頭の土器群である。繊維を混入し内外面に貝殻条痕文を施文するものが主体をなすが、縄文条痕や短軸絡条体を条痕として使用したものが存在する。48～52は沈線を多用するもの、53～61は隆帯が貼付されるものである。62～75は条痕文、76～86が縄文施文される土器である。87～84は外面は無文である。

第４群土器は竹管文系土器群である諸磯ａ・ｂを扱った。この中でも浮線文は数点と少なく、主に円管文や連続爪形文が施文される土器であった。110～115は関西地方に分布する北白川下層であり、116は東関東に分布する浮島式土器である。

第５群土器は縄文中期から後期の土器を一括して扱った。117～122である。

ｂ．石器（Ｆｉｇ．27～33、ＰＬ．３・４・12～14）

合計1,036点が出土した。器種でみると、石鏃33点と打製石斧44点が目立った存在である。打製石斧は早期後半に出現するトランシェ様石器に似た片刃形のものが存在する。40は長身の有舌尖頭器である。41～56は無茎石鏃である。石材はチャートが20点、黒色頁岩が8点、黒曜石製1点である。57～60、62～64が石匙である。61・65～67・69～73が削器である。74～80までが楔形石器、80～94・

96～105までが打製石斧である。裏面に大きく礫面を残したものが多く、片刃である。95は三角錐形石器であり、105は分銅形であることから縄文後期の所産である。106～115については磨、敲き、凹み石である。

c．石器石材

次にTab. 2の付表の石材では関東山地北部産出の緑色片岩が量的にも多く搬入されている点に注目できる。石棒や石皿・砥石・敲石の石製品や石器にも使用されているが、多くは加工の痕跡が認められないことから他の目的が考えられよう。

これらの石材を産地との距離、大きさ、硬さや緻密さ、粘りなどから便宜的に第1から第5群石材に分類した。

第1群石材は黒曜石、チャート、珪質頁岩、硬質頁岩などの緻密な加工に適する石材である。この中で黒曜石は長野県や栃木県に産出地があり、硬質頁岩は中部以北の日本海側から搬入された遠隔地石材である。小形の石器に利用されることは産地との移動の距離、産出形状、粘りの弱さが考慮された結果といえよう。第1群石材の総重量は1548.9gであり、この中でチャートの総重量は1013.5gと65%を占めている。なお、チャートの主要な採集地は9km離れた渡良瀬川流域に求められる。

第2群石材は黒色頁岩・黒色安山岩を代表格とする県内の一般的石器石材である。中形の加工石器に利用されることは、大きい素材が提供され、粘りがあり、産地が近い結果といえる。ただ、有舌尖頭器、石鏃、石匙、石錐などの小形石器にも多用されている。利器に加工される石材である第1群と第2群の中でみた場合には他を抜きん出た利用がみられた。第1群と第2群を合わせた重量が12728gであり黒色頁岩は8438.8gと66%を占めている。それに比べ黒色安山岩は、346gと3%にも満たない。それに比べ渡良瀬川流域に広くみられるホルンフェルスが1381.2gであり11%と高比率を占める。

第3群石材としたものは、再加工には不向きで円礫のまま利用されるものである。目的に適う形状・大きさの素材を最短距離で5km離れた古利根川から採取したと考えられる。石英閃緑岩・ひん岩・輝緑岩などの石材である。

第4群石材とした結晶片岩類は長く利用される石材で、後期以降は石棒などの第2の道具に多用される。産地が三波川帯（多野・秩父地域）に限定できるため、交易研究に優れた石材である。石器としては確認できなかったが緑色片岩が1554.1g、雲母石英片岩が25.9gが出土した。両者を合わせると1.5kgを超える石材が遺跡に搬入されている。

第5群石材とした粗粒輝石安山岩は赤城山の山体を形成している岩石であり、山麓では至るところにみられる。粗い軟らかな石材であり巨大な原材料も入手が可能である。石皿や蜂の巣石に利用されるが極まれに打製石斧にも使用される。

d．遺物分布

表土掘削後に縄文時代遺物包含層についてジョレン掻けを行い遺物集計を行った。その結果、遺物が集中する区域は大きく2カ所であった。1つが遺跡の北東であるX29～X37区、Y115～Y121

区の集中であり、もう１カ所がＸ27～Ｘ34区、Ｙ125～Ｙ130区の集中である。２カ所を中心に掘り下げを行った。また、後者の集中区域は縄文前期の住居址の分布と重複をみせる。従って遺物分布を検討する場合、掘り下げを行っている区域と行っていない区域が存在するため分布図をみる場合注意が必要である。

①土器群の分布（Ｆｉｇ．14～16）土器群の分布は石器と比べた場合、著しい偏在性を読み取れる。量的に多いことも確かであるが第３群の分布が集中をみせている。また、第４群の分布は南側に偏る傾向があるのにくらべ第５群は中央部分に分布をみせている。

第１群土器の分布…撚糸文土器群は南部から１点のみの出土である。

第２群土器の分布…沈線文土器群はやや東寄りに２点が出土しているだけである。

第３群土器の分布…早期終末から前期初頭は全域に分布をみせるが掘り下げを行った北辺に特に集中している。Ｘ29～Ｘ36、Ｙ115～Ｙ120区には著しい集中がみられる。

第４群土器の分布…縄文時代前期後半の土器は第３群の分布域とは異なり南の区域にややまとまりがみられた。しかし、第３群の分布にくらべると量的にも少なく著しい集中はみられない。

第５群土器の分布…縄文中期・後期の土器は有文破片に限って分布をみたが、中央部分に散在する。したがって早期や前期の分布域と異なりをみせている。

②石器群の分布（Ｆｉｇ.13）　石器全体分布…石器の分布は土器とやや異なり北側のＸ29～Ｘ31、Ｙ114～Ｙ116に集中がみられる。土器が南の住居集中区にみられたのに比べるとやや異なりをみせている。

有舌尖頭器・石鏃・石錐・楔形石器の分布…有舌尖頭器はＸ35・Ｙ125から１点出土している。石鏃は北に集中しているが南側からも出土している。北側に分布する石鏃、楔形石器多くは縄文早期末葉から前期初頭にかけての石器であることが考えられよう。

削器・石匙の分布…削器と石匙は北側に集中をみせている。このことは縄文早期末葉～前期初頭にかけての時期のものであることが考えられる。

打製石斧の分布…北側の調査区と南側にまとまりがみられる。片刃の打製石斧は北側にまとまり傾向があることから、早期末葉～前期初頭の時期であり、南側のものは両刃の打製石斧であることからそれ以外の時期である可能性が高い。

３　そ　の　他

1)　土　　坑

Ｄ－１号土坑（Ｆｉｇ．25、ＰＬ．７）

（位置）Ｘ27、Ｙ128G（形状）円形。長径80×短径70㎝、深さ21㎝。平坦な底面を持つ。（備考）覆土の層から所産時期は古墳時代以降と考えられる。

2) 地 割 れ

X－1号地割れ（Fig. 25）

（位置）X32・33、Y117・118G（形状）５条に分かれて検出された。最大幅12cm・深さ29cmである。

（備考）覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

X－2号地割れ（Fig. 25）

（位置）X25、Y119・120G（形状）２条に分かれて検出された。最大幅14cm・深さ47cmである。（備考）覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

X－3号地割れ（Fig. 25）

（位置）X26、Y125・126G（形状）３条に分かれて検出された。最大幅23cm・深さ46cmである。（備考）覆土にAs-Bが認められないことから818年の大地震に伴うものと考えられる。

3) 落ち込み

O－1号落ち込み

（位置）X27・28、Y127G（形状）円形。長径195×短径110cm、深さ49cm。（備考）所産時期は不明。

O－2号落ち込み

（位置）X32、Y123・124G（形状）円形。長径330×短径200cm、深さ37cm。平坦な底面を持つ。（備考）所産時期は不明。

O－3号落ち込み

（位置）X32、Y121・122G（形状）円形。長径260×短径260cm、深さ79cm。（備考）所産時期は不明。

Ⅵ　B区の調査（幹線ケーブル埋設地）

調査の結果、古墳時代の住居址が８軒調査された。このうち前期が６軒、後期のものが２軒であった。この集落は後二子古墳に隣接する東側の丘陵に形成されたものである。風のわたる丘から検出された下縄引遺跡の集落とは谷を挟んだ形で向かいあって立地している。古墳時代後期の集落も５世紀末葉から６世紀初頭にかけての時期であるため６世紀後半である後二子古墳との時間的な関係は本集落の方が古い。なお、古墳時代前期の集落は後二子古墳の調査でも発見されているため広い範囲での広がりがみられる。

1　古墳時代

1) 住　居　址

Ｈ－１号住居址（Ｆig. 26、ＰＬ．５）

（位置）Ｅ・Ｆ－22～24G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）調査は、対角線上に西側半分の調査を実施した。調査した範囲からみれば正方形である。（覆土）住居址を覆っている土は大きく３層に分けられる。主体的には黒色土が覆う。（床面）調査した範囲で堅緻面がひろがっていた。（炉址）調査した範囲ではみつかっていないが東半分に存在するものと推定される。（柱穴）西壁に壁柱穴が１個検出された。従来の調査で壁柱穴の２本柱が検出されているので、本住居址も２本柱穴の住居址と考えられる。（遺物）土器が４点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できるものはなかった。（備考）出土遺物や住居址形態から古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

Ｈ－２号住居址（Ｆig. 26、ＰＬ．５）

（位置）Ｆ－26・27G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）西のコーナー部分を調査したに過ぎないが、正方形と考えられる。（覆土）大きく２層に分かれる。主体的には黒色土である。（床面）調査した範囲ではやや硬い床面が広がっていた。（遺物）なし。（備考）住居址の覆土から古墳時代前期ものと考えられる。

Ｈ－３号住居址（Ｆig. 26、ＰＬ．５・15）

（位置）Ｅ・Ｆ－10・11G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2を調査したに過ぎないが、２つのコーナーが検出されたことから正方形と考えられる。（覆土）詳細な観察は実施していないが、主体的には黒色土で充填される。（床面）炉址を中心に堅緻面が広がり、部分的に堅緻面が存在する。ほぼ平坦に造られている。（炉址）北西によった部分から地床炉を検出した。炉の規模は長軸82cm×短軸64m×深さ15cmである。底面には赤化した堅い面が存在していた。（柱穴）炉址の脇から柱穴１個検出された。長径41cm×短径38cm×深さ24cmである。（遺物）土器が58点出土した。いずれも古墳 時代前期のものであるが図示できたものは椀(1)の1個体である。（備考）出土遺物や住居址形態から古墳時代前期と考えられる。

Ｈ－４号住居址（Ｆig. 27、ＰＬ．５）

（位置）Ｅ・Ｆ－11～13G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2を調査したに過ぎないが、２つのコーナーから長方形と考えられる。（覆土）詳細な観察は実施していないが、主体的には黒色土で充填されるが一部にAs-Cの純層が存在していた。（床面）炉址を中心に部分的に堅緻面が広がり、ほぼ平坦に造られている。（炉址）中央部から２カ所の地床炉を検出した。Ｆ１は長軸74cm×短軸32cmであり、Ｆ２は長軸70cm×短軸38cmである。底面には赤化した堅い面が存在

していた。（遺物）土器が262点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できたものは甕（3・4）の２個体である。（備考）出土遺物や埋土にAs-Cが存在することから古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

Ｈ－５号住居址（Ｆig. 27、ＰＬ．６・７・15・16）

（位置）Ｅ・Ｆ－16～18G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2弱を調査したに過ぎないが、正方形と考えられる。（方位）Ｎ－71°－Ｅ（覆土）詳かな観察は実施していないが、主体的には黒色土で充填される。（床面）竈前面を中心に堅緻面が広がっていた。全体にわたってほぼ平坦に造られている。（竈址）北東壁のやや東よりに位置する。袖や天井部には粗粒輝石安山岩の山石を用いている。袖部は粘土を主体に構成される。竈内から甕が２個体掛けられた状態で出土している。支柱は高杯（6）を転用したもので内部に粘土が充填されていた。竈の掘り方には住居址の周溝が認められた。（炉址）中央北寄りから地床炉を検出した。大きさは長軸50cmである。竈と炉を併用した住居である。（柱穴）柱穴は１個検出されただけであるが、４本柱住居址になるものと考えられる。柱穴は長径27cm×短径23cm×深さ83cmである。（貯蔵穴）竈の右側に位置する。幅軸117cm、深さ８cmの一段下がったテラスを有し円形を呈する。大きさは長径68cm×短径59cm×深さ82.5cmである。（床下土坑）　竈の前面から長径87cm×短径87cm×深さ76.5cmの床下土坑を検出。土坑下部から焼土と粘土層が厚さ15cm堆積していた。（遺物）土器片が382点出土した。また、完形個体が９点・他７点はほぼ完形が出土した。いずれも竈周辺に集中しており南東壁から杯・甕、竈の右脇から杯・甕、竈の東から杯数個体がまとまって出土した。（備考）出土遺物から古墳時代後期鬼高Ｉ式期の所産である。

Ｈ－６号住居址（Ｆig. 27　　写　真　ＰＬ．７）

（位置）Ｅ・Ｆ－19・20G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）全体の1/2を調査したに過ぎないが３つのコーナーから正方形と考えられる。（覆土）詳細な観察は実施していないが、主体的には黒色土で充填される。覆土の一部にAs-Cの純層が存在していた。（床面）炉址を中心に部分的に堅緻面が広がり、ほぼ平坦に造られている。（炉址）中央部から地床炉を検出した。大きさは長軸53cmであり、底面には赤化した堅い面が存在していた。（遺物）土器が９点出土した。いずれも古墳時代前期のものであるが図示できたものはなかった。（備考）出土遺物や埋土にAs-Cが存在することから古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

Ｈ－７号住居址（Ｆig. 29、ＰＬ．７・８）

（位置）Ｅ・Ｆ－28～30G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）水道工事に立ち会い調査で西側のコーナーが検出されており、その後の拡張でほぼ全体の調査をすることができた。（方位）Ｎ－56°－Ｅ（覆土）４層に分けられる。最上部にAs-Bテフラの純層が堆積していた。主体的には

黒色土で充填される。（床面）竈前面を中心に堅緻面が広がっていた。全体にわたってほぼ平坦に造られている。（竈址）北東壁のやや東よりに位置する。袖や天井部には粗粒輝石安山岩の山石を用いて構築している。袖部は粘土とローム土を主体に構成される。支柱には粗粒輝石安山岩を用いている。竈の掘り方には住居址の周溝が認められた。（柱穴）柱穴は４個検出されただけである。Ｐ１が長径27cm×短径26cm×深さ50.5cm、Ｐ２が長径25cm×短径24cm×深さ49.5cm、Ｐ３が長径33cm×短径30cm×深さ40.5cm、Ｐ４が長径24cm×短径20cm×深さ55cmとなる。（貯蔵穴）竈の右側に位置する。４個が対角線上に並ぶものの北側の柱穴間に比べ南側の柱穴間がやや狭くなっている。（遺物）土器片が75点出土した。分布は竈の前面に集中して出土した。図示できたものは30・31の甕、29の小甕の３個体であった。（備考）出土遺物から古墳時代後期鬼高Ｉ式期の所産である。

Ｈ－８号住居址（Ｆig. 30、ＰＬ．８）
（位置）ＣＤ－33・34G（確認面）全体層序Ⅲ層で確認した。（形状）幅5.28ｍで調査したに過ぎない。北側にテストトレンチを入れた所、壁が検出できた。（埋土）大きく５層に分けられる。下部の３層にAs-Cの純層が存在していた。黒色土が主体をなしていた。（床面）調査した範囲では堅緻面が広がっていた。（炉址）中央部の北側に炉址を検出した。調査した範囲で長径75cm、短径49cm、中央部に円礫が２個並んで設置されていた。（柱穴）北壁に２個検出したことから４本柱の住居である可能性が高い。（周溝）西側と東側から検出されている。西側のものは途中で途切れている。（遺物）なし。（備考）埋土にAs-Cが存在することから古墳時代前期でも古い様相を帯びるものと考えられる。

２　そ　の　他

1)　地割れ

Ｘ－１号地割れ（Ｆig. 30、ＰＬ．12）
（位置）ＢＣ－35・36G（確認面）全体層序Ⅱ層で確認した。（形状）上幅4.82ｍ、下幅4.39ｍで深さ1.3ｍ落ち込んでいる。両側に深い亀裂が入っており、西側では幅55cm、東側では幅85cmである。その間は平坦に落ち込んでいる。（地割れの方向）Ｎ－10°－Ｅ（覆土）上部にAs-Bテフラの純層が確認された。このAs-Bテフラの純層は落ち込んでいない。（備考）覆土からAs-Bテフラ降下以前の大地震に伴うものであることが判明した。すでに検出されている地割れと同時期のものであることが予想されるため818年の大地震に伴う地割れの可能性が高い。

Ⅶ　成果と問題点

平成７年度（1995）の調査は、Ａ区（民家園予定地）3,000㎡とＢ区（ケーブル埋設地）400㎡の計２カ所3,400㎡の調査を行った。Ａ区では旧石器時代の文化層から旧石器135点が、縄文時代では、前期住居址４軒、竪穴状遺構２基、土坑９基を検出した。このほか縄文包含層から縄文土器2,061点、石器1,036点が出土した。Ｂ区の調査は短期間であったが、古墳時代前期の住居址６軒、後期の住居址２軒のほか、地割れ１条が検出された。

１　Ａ区の調査（民家園予定地）

1）旧石器時代

Ａ区については、かねてから旧石器時代文化層の存在を推測していた。それは、丘陵の突出した先端部で眼下の平坦地から７～８ｍと高いという、周囲に眺望のきく恵まれたロケーションであったからである。今年度（平成７年度）の調査では、試掘調査と本調査の結果、旧石器時代文化層の石器が東西２カ所の地点から135点が出土した。西のＡ地点からは、120点の石器が出土した。その内訳は、ナイフ形石器７、台形様石器３、削器５、抉入石器３、斧形石器１、局部磨製石斧２、石核や剥片・砕片などで構成される。Ａ地点の石器120点の石材内訳は、黒曜石が主体を占め、黒色頁岩や黒色安山岩、粗粒輝石安山岩、ホルンフェルス、結晶片岩、チャートが認められた。

石器の出土層位はⅦ層（ＡＴ層）下部の暗色帯であるⅧａ層に所属するものである。ＡＴ層の年代は約2.2～2.5万年前という年代が算出されている。

Ｂ地点の石器は15点を数える。器種でみるとナイフ形石器２、斧形石器１、台石４、剥片で構成される。Ｂ地点の石器石材は、黒曜石の使用がなく、黒色安山岩や黒色頁岩など在地の石材で構成される。石器の出土層位はＡ区と同様にⅦ層（ＡＴ層）下部からの暗色帯であるⅧａ層に所属するものである。

このようにＡ地点とＢ地点ともほぼ同一水準から出土しており、いずれも群馬編年Ⅰ期第１段階の石器群である。両地点から出土した斧形石器は接合はしないものの同一母岩の可能性が高いため、同時期に形成された可能性が高い。これらの石器群の調査は来年度も（平成８年度）も継続して実施されるため、来年度刊行する『内堀遺跡群Ⅸ』に２カ年あわせて掲載する予定である。

2）縄文時代

Ａ区の縄文時代の遺構・遺物は調査区の南西に延びる台地の標高129ｍ～133ｍにまとまって検出された。竪穴住居址４軒、竪穴状遺構２基、土坑９基、包含層によって構成されていた。住居址４軒は前期諸磯ａ式期のものであり、竪穴状遺構や土坑についても遺物が検出されなかったが住居址

とほぼ同じ時期と考えられた。包含層の調査では、有舌尖頭器１点をはじめ早期から後期の土器2,061点・石器1,036点が出土した。

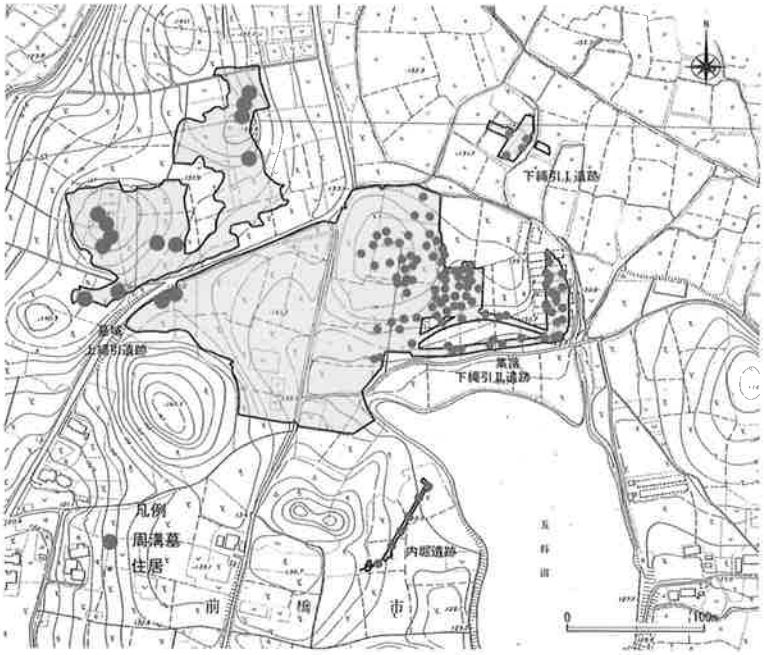
この中で京都府北白川小倉町遺跡を標識遺跡とする縄文時代前期に属する北白川下層式土器が６点出土している。北白川下層式土器は関西地方を中心に関東地方まで分布している。この型式の特徴は、薄手で文様が条痕文＋爪形文、縄文＋爪形文、縄文＋特殊突帯文などの特色ある構成があげられる。今回出土した土器は、薄手のもので橙色の器壁に乳白色の細かな刻みがなされる浮線文が特徴である。このほかに東関東系の土器である浮島式土器が１点出土している。

２　Ｂ区の調査（幹線ケーブル埋設地）

Ｂ区の調査は短期間であったが、古墳時代前期の住居址６軒、後期の住居址２軒のほか、地割れ１条が検出された。このうち地割れは、内堀遺跡群Ⅱや内堀遺跡群Ⅳで検出されている、818年（弘仁９年）の大地震に起因するものと思われる。

１）古墳時代前期

今回の調査で、古墳時代前期の遺構は、すでに調査されている下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡、上縄引遺跡と谷を挟んだ内堀遺跡に存在することが判明した。今回の内堀遺跡では６軒の住居址であったが、谷をはさんだ南側にも古墳時代前期の集落が存在することが判明した。すでに、『内堀遺跡群Ⅲ』の調査で後二子古墳の北側から前期の住居址らしいものの検出があったが、判然としなかったため、今回の調査で広く谷を挟んだ両側に集落が存在することとなった。



第１図　古墳時代前期の集落と墓域
（上縄引遺跡と下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡・内堀遺跡）

下縄引Ⅰ遺跡（『西大室遺跡群Ⅳ』）では、微高地上の狭い調査区から４軒の住居址が調査されている。下縄引Ⅱ遺跡（『内堀遺跡群Ⅱ～Ⅵ』）では100軒近い住居址が調査されており、更にその数は増加するものと考えら

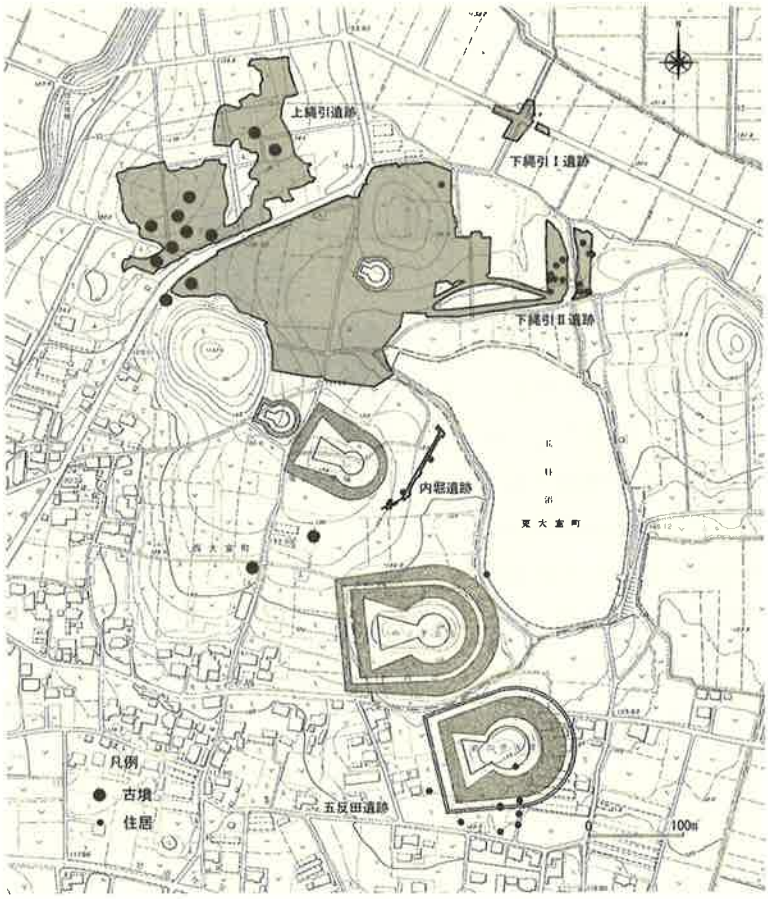
れる。このように沖積地を挟んで、下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡の集落と内堀遺跡の３集落が存在する。これらの集落に挟まれた現五料沼一帯の沖積地が生産域である水田に該当するものと思われる。このほかに、下縄引Ⅰ遺跡周辺の神沢川と桂川が形成した沖積地にも生産域が存在する可能性もある。

この谷の奥にあたる丘陵地に墓域が形成されている（『西大室遺跡群Ⅱ』・『内堀遺跡群Ⅴ』）。周溝墓14基が調査された上縄引遺跡であるが、円形10基、方形３基、前方後方形１基の合計14基の周溝墓が存在する。これらの周溝墓を形成した集落は、下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡と内堀遺跡と想定される。当初は、下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡に付随した墓域と考えたが、現五料沼一帯の両岸から、今後も集落の検出が予測されるため、これらの集落の人々が形成した墓域と考えていきたい。今後、内堀遺跡群の全体調査が完了した時点で、集落変遷や墓域変遷を詳細に分析する必要がある。これらの内堀遺跡群の集落・生産域・墓域の分析によって赤城山南麓における弥生時代終末期から古墳時代初頭への文化変遷の実態がより明確に浮き出されてくるものと思われる

２）古墳時代後期

今回の調査によって、古墳時代中期から後期の住居址が２軒が調査された。すでに『前二子古墳範囲確認調査』や『中二子古墳範囲確認調査』でも同じ時期の住居址が検出されている。２つの古墳の調査は、古墳の範囲確認調査が主目的であり、トレンチ調査であったため集落の全貌は把握していないが、その様相を推察することは可能である。

前二子古墳と中二子古墳から出土した須恵器は、須恵邑編年のＭＴ15である。このことから、両古墳は築造された時期は、６世紀初頭から前半に位置付けられる。両古墳周辺での、



第２図　古墳時代中期～後期の集落と墓域
（上縄引遺跡と下縄引Ⅰ・Ⅱ遺跡・内堀遺跡･五反田遺跡）

この時期の集落のあり方をみると、下縄引Ⅱ遺跡や内堀遺跡、前二子古墳周辺に広がる五反田遺跡から検出されている。五反田遺跡の集落は、前二子古墳と中二子古墳のトレンチ調査で検出されたものであり、集落の全貌は明らかでないが、９軒の住居址が確認された。古墳に近接するものであり、中には墳丘下や外堤下に存在するもので、ほぼ前・中二子古墳築造直前の住居といえる。中二子古墳の確認調査で見つかった住居址は、外堀に近接しするもので、現五料沼内からみつかっている。

このことから前二子古墳・中二子古墳にかけての一帯には古墳時代中期後半から後期前半（５世紀終末から６世紀前半）の大規模な集落が存在していた。しかし、大前方後円墳の造営にあたって集落形成はその後全くなされなくなる。今回の内堀遺跡での調査事例２軒も、古墳造営によって移動を余儀なくされた集落であろう。今後、大前方後円墳の築造にあたってこの地域一帯での集落変遷や社会構造を分析していく必要がある。これらの分析により古墳築造以前の集落集団と古墳造営集団の関係も見いだせるものと考えられる。大前方後円墳の造営にあたって造墓組織と地域の変遷をとられる中で、古墳の被葬者像もより明確に表出させることができるものと考えている。

参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1988　『内堀遺跡群』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1989　『内堀遺跡群Ⅱ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990　『内堀遺跡群Ⅲ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1991　『内堀遺跡群Ⅳ』
前橋市教育委員会　1993　『内堀遺跡群Ⅴ』
前橋市教育委員会　1994　『内堀遺跡群Ⅵ』
前橋市教育委員会　1995　『内堀遺跡群Ⅶ』
前橋市教育委員会　1981　『西大室遺跡群Ⅱ』
加部二生・前原　豊「内堀遺跡群下縄引遺跡」『東日本における古墳出現過程の検討』日本考古学協会新潟大会
前橋市教育委員会　1983　『西大室遺跡群Ⅳ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986　『梅木遺跡』
粕川村教育委員会　1985　『深津地区遺跡群 昭和60年度』
粕川村教育委員会　1986　『深津地区遺跡群 昭和61年度』
粕川村教育委員会　1987　『粕川村の遺跡』
粕川村教育委員会　1988　『塊頭遺跡』
粕川村教育委員会　1990　『西迎遺跡』
安中市教育委員会　1988　『古城遺跡』
長野県御代田町教育委員会　1994　『下弥堂―縄文前期初頭の集落遺跡調査―』
長野県佐久市教育委員会　1993　『立科F遺跡』
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会　1993　『環状ブロック群　予稿集』
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会　1994　『群馬の岩宿時代の変遷と特色　資料集』
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会　1994　『群馬の岩宿時代の変遷と特色　予稿集』
岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会　1995　『石器石材―北関東の原石とその流通を中心として―予稿集』

Tab. 1　　報告書抄録

ふりがな	うちぼりいせきぐんはち
書名	内 堀 遺 跡 群 Ⅷ
副書名	大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第８巻
編著者名	前原　豊・新井真典
編著機関	群馬県前橋市教育委員会管理部文化財保護課
編著機関所在地	〒371 群馬県前橋市上泉町664－４
発行年月日	1996（平成８）年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	位置	調査 期間	調査 面積	調査 原因
うちぼり 内堀遺跡群	ぐんまけん まえばしし 群馬県前橋市			北緯 36° 23′ 05″	1995/04/25 ～		
うちぼり 内堀遺跡	にしおおむろ 西大室町 2510番地ほか	10201		東経 139° 11′ 45″	1995/10/31	3400㎡	公園造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
内堀遺跡群	文化層	旧石器時代	文化層	群馬編年Ⅰ期第１段階のＡＴ層下の２群の石器135点
内堀遺跡	集落	縄文時代	住居址４・土坑９・竪穴状遺構２	縄文時代前期諸磯a式期の遺物
	包含層	縄文時代	縄文時代前期～後期の遺物	縄文土器2,061点、石器1,036点
	集落	古墳時代	住居址８	土師器・須恵器・石製品
	地割れ	平安時代	地割れ１	818年の大地震に伴う地割れ
特記事項	旧石器時代では、群馬編年Ⅰ期第１段階の黒曜石を多用する１群と地元石材の黒色安山岩等を用いる１群の２群が存在。縄文時代では前期諸磯a式期の集落、古墳時代前期や後期の集落が検出さ、れ社会構造を解明するためのデータを補強された。			

Tab. 2　A区包含層縄文土器一覧表

時期	分類	種類・型式	点数	小計	割合(%)
早期前半	第１群土器	撚糸文	2	3	0.2
早期中葉	第２群土器	沈線文	1		
早期終末～前期初頭	第３群土器	沈線文（繊維）	26	1,457	70.7
		隆帯・刺突（繊維）	16		
		貝殻背圧痕（繊維）	34		
		条痕文（繊維）	407		
		条痕縄文（繊維）	20		
		縄文（繊維）	441		
		無文（繊維）	513		
前期後半	第４群土器	竹管文（連続爪形文・円管文・浮線文）	51	300	14.5
		竹管文（平行沈線）	21		
		浮線文	116		
		縄文	100		
		北白川下層式土器	6		
		浮島式土器	6		
中期～後期	第５群土器	加曾利Ｅ・称名寺・堀之内式	10	91	4.4
		無文	81		
不　明			210	210	10.2
合　計			2,061	2,061	100

Tab. 3　A区縄文石器集計表

石材群	器種 / 石材	1 有舌尖頭器	2 石鏃	3 石錐	4 楔形石器	5 石匙	6 削器	7 打製石斧	8 磨製石斧	9 三角錐形石器	10 磨石・凹石	11 敲石	12 蜂の巣石	13 砥石	14 調整痕のある剥片	15 剥片	16 結晶片岩類	17 石製品	合計	石材群重量 g
第1群	黒曜石		1													1			2	1,549
	チャート		20	1	7	1										437			466	
	珪質頁岩									1						19			20	
	赤色珪質岩							2											2	
第2群	黒色頁岩	1	8	3		4	25	32							5	402			480	11,241
	頁岩															4			4	
	黒色安山岩		4			1	2									91			98	
	灰色安山岩							2								6			8	
	変質安山岩															3			3	
	細粒輝石安山岩					1		3								38			42	
	文象斑岩							1								1			2	
	ホルンフェルス							2	1							21	2		26	
第3群	石英閃緑岩										1								1	2,044
	ひん岩															1			1	
	輝緑岩							2								3			5	
第4群	緑雲色母片石岩英													1			41		42	1,580
	片岩																5		5	
第5群	粗粒輝石安山岩										37	9	1	2		84			133	14,818
	砂岩						2	1								14			17	
その他	角閃石安山岩										1		1						2	1,579
	変玄武岩								1							1			2	
	溶結凝灰岩															2			2	
	蛇紋岩								1										1	
	珪質凝灰岩															1			1	
	硬質泥岩							1											1	
	石英															1			1	
	石化骨															1			1	
	珪質変質岩															1			1	
	デイサイト															1			1	
	点紋頁岩															2			2	
	滑石																	1	1	
点数		1	33	4	7	7	29	44	3	1	39	9	2	3	5	1,135	46	1	1,369	32,810

Tab. 4　A区遺構別縄文石器一覧表

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	合計	重量
J-1		6	1	1		4	8	1		4	1			1	227	6		260	
J-2		2				2	3	1		3					35			46	
J-3			1			4	1								3		1	10	
J-4						1									9			10	
JT-2											2				2			4	
JD-2							1											1	
JD-6											1	1						2	
包含層	1	25	2	6	7	18	31	1	1	32	5	1	3	4	859	40		1,036	
点数	1	33	4	7	7	29	44	3	1	39	9	2	3	5	1,135	46	1	1,369	32,810

Tab. 5　縄文土器観察表

番号	出土位置	器形	①胎土②焼成③色調④残存⑤器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい橙④口縁部⑤平行沈線・連続爪形文。	295	諸磯b
2	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤半截竹管による連続爪形文。地文に縄文ＬＲ。	163	諸磯b
3	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③赤褐④胴部⑤円管文・半截竹管による連続爪形文。地文に縄文ＲＬ。	190	諸磯b
4	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③赤褐④胴部⑤円管文・平行沈線、地文に縄文ＲＬ。	177	諸磯b
5	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③赤褐④胴部⑤円管文、半截竹管による連続爪形文。沈線による格子目。地文に縄文ＲＬ。	218	諸磯b
6	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線と弧線。	73他	諸磯b
7	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	125	諸磯b
8	J－1	縄文深鉢	①繊維②良好③赤褐④胴部⑤０段多条の縄文ＬＲ。	271	黒浜
9	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③赤褐④胴部⑤撚糸文ＲＬ。	209	諸磯b
10	J－1	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤縄巻縄文０段多条のＲＬに０段多条の縄文ＲＬを右巻き。	375	黒浜
11	J－1	縄文深鉢	①繊維②良好③赤褐④胴部⑤０段多条の縄文ＲＬ。	275	黒浜
12	J－1	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	80	黒浜
13	J－1	縄文深鉢	①粗粒②良好③黄灰④胴部？⑤無文部。	200	諸磯
14	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤ナデ状の沈線。	38	諸磯
15	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	305	北白川下層
16	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	15	北白川下層
17	J－1	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部⑤浮線文。	286	諸磯b
18	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤変形貝殻爪形文。	241	浮島
19	J－1	縄文深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤変形貝殻爪形。	92	浮島
20	J－1	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤表面に貝殻条痕文。裏面はナデ。	40	条痕文系
21	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線。	－	諸磯b
22	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③明黄褐④口縁部⑤半截竹管による平行沈線。地文に縄文ＲＬ。	－	諸磯b
23	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③赤褐④口縁部⑤口縁部に突起、円管文、半截竹管による連続爪形文、地文に縄文ＲＬ。	－	諸磯b・3と同一個体
24	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③明赤褐④胴部⑤細い粘土紐に貼り付け。地文に縄文ＲＬ。	－	諸磯b
25	J－2	縄文深鉢	①繊維②良好③褐灰④胴部⑤貝殻条痕文。裏面にナデ。	－	条痕文系
26	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④胴部⑤縄文Ｌ。	－	諸磯b
27	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部⑤縄文ＲＬ。	－	諸磯
28	J－2	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	－	諸磯
29	J－2	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤０段多条の縄文ＲＬ。	－	黒浜
30	J－2	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤０段多状の縄文ＲＬ。	－	黒浜
31	J－2	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	－	黒浜
32	J－3	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線、地文に縄文ＬＲ。	－	諸磯b
33	J－3	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい赤褐④胴部⑤揚げ底に縄文ＲＬ。	－	黒浜
34	J－4	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	15	黒浜
35	J－4	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	17	黒浜
36	JT－1	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤円管文、半截竹管による波状の集合沈線。	－	諸磯
37	JT－1	縄文深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤撚糸文Ｒ。	3	諸磯
38	JT－2	縄文深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤沈線文。	7	諸磯b・6と同一
39	JT－2	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	9	条痕文系
40	JD－5	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤隆帯。内面に貝殻条痕。	－	条痕文系
41	JD－6	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤細い粘土紐を貼付し刻みが入る。	3	諸磯
42	JD－6	縄文深鉢	①繊維②良好③赤褐④胴部⑤細い粘土紐を貼付し刻みが入る。縄文ＲＬ。	2	黒浜
43	JD－9	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線、地文に縄文ＲＬ。	2	諸磯b
44	X26Y128	縄文深鉢	①細粒②良好③橙④胴部⑤撚糸文Ｌ。	－	撚糸文系
45	X34Y130	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤間隔を空けた撚糸文Ｒ。	－	撚糸文系
46	X34Y126	縄文深鉢	①細粒②良好③明赤褐④胴部⑤半截竹管による平行沈線。沈線の一部に刻みあり。	－	諸磯b
47	X33Y119	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④胴部⑤三角形の重ね沈線文。	－	沈線文系
48	X29Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤沈線による渦巻きや格子目文様。口唇部に刻み。表面に貝殻条痕。－		茅山下層

番号	出土位置	器形	①胎土②焼成③色調④残存⑤器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
49	X36Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④口縁部⑤沈線文、地文に縄文ＲＬ。口唇部にも縄文施文	―	早期末葉～前期初頭
50	X36Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③浅黄④胴部⑤沈線による格子目文。表に貝殻条痕文。	―	茅山下層・48と同一個体
51	X33Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤やや幅広な沈線で重ね文様。	―	田戸上層
52	X29Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄④胴部⑤沈線による曲線、渦巻。	―	茅山下層・48と同一個体
53	X35Y119	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤隆帯上に刻み、絡条体圧痕文。	―	早期末葉～前期初頭
54	X34Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤隆帯上に絡条体圧痕による刻み、地文に０段多条縄文ＬＲ。	―	早期末葉～前期初頭
55	X32Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤隆帯上に絡条体圧痕による刻み、円形突起、地文に０段多状縄文ＲＬ	。―	花積下層
56	X33Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤隆帯上に原体圧痕、地文に０段多条縄文ＲＬ、ＬＲ。一部赤色塗彩。	―	花積下層
57	X33Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③赤褐④胴部⑤隆帯上に絡条体圧痕、地文に０段多条縄文ＲＬ。絡条体圧痕文。	―	花積下層
58	X30Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい赤褐④胴部⑤隆帯上に円形突起に刺突。	―	花積下層
59	X33Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤隆帯上に絡条体圧痕。	―	花積下層
60	X32Y117	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤隆帯上に原体圧痕。地文に０段多条縄文ＲＬ。一部赤色塗彩。	―	花積下層・56と同一個体
61	表採	縄文深鉢	①繊維②良好③浅黄④口縁部⑤口縁部に刻み。表面に縄の先端による刺突。	―	早期末葉～前期初頭
62	X34Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤貝殻背圧痕。	―	早期末葉～前期初頭
63	X34Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤表に貝殻条痕文、貝殻背圧痕。内面に貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
64	X33Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤貝殻背圧痕。内面に貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
65	X35Y121	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤貝殻背圧痕。内面に貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
66	X35Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤貝殻背圧痕。	―	早期末葉～前期初頭
67	X30Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
68	X33Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
69	X30Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
70	X34Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④底部⑤貝殻条痕文。尖底土器。	―	早期末葉～前期初頭
71	X30Y115	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
72	X34Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤外面に貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
73	X31Y117	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④底部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
74	X30Y115	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい赤褐④底部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
75	X34Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい褐④胴部⑤内外面とも貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
76	X28Y114	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤縄文ＬＲ。内面に貝殻条痕。	―	早期末葉～前期初頭
77	X33Y118 ほか	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④口縁部⑤０段多条縄文ＲＬ、ＬＲ。	―	花積下層・79と同一個体
78	X34Y129	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④底部⑤縄文ＲＬ。	―	花積下層
79	X31Y117	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④口縁部⑤０段多条縄文ＲＬ、ＬＲで口縁部に段を有する。	―	花積下層
80	X34Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④胴部⑤０段多条縄文ＲＬの異方向施文による羽状構成。	―	花積下層
81	X30Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③褐灰④胴部⑤０段多条縄文ＲＬの異方向施文による羽状構成。	―	花積下層
82	X34Y126	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤０段多条縄文ＬＲ。	―	花積下層
83	X29Y128	縄文深鉢	①繊維②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤縄文ＲＬ。口縁部に段を有する。	―	花積下層
84	X31Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤０段多条縄文ＲＬ。	―	花積下層
85	X39Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④口縁部⑤縄文ＲＬとＬＲによる羽状構成。内面に貝殻条痕。口唇部に縄文施文。―		早期末葉～前期初頭
86	X28Y124	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤縄文ＲＬの異方向施文による羽状構成。	―	早期末葉～前期初頭・85と同一個体
87	X30Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤無文。	―	早期末葉～前期初頭
88	X34Y120	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤無文。	―	早期末葉～前期初頭
89	X30Y116	縄文深鉢	①繊維②良好③明赤褐④胴部⑤内外面とも植物繊維によるナデ。	―	早期末葉～前期初頭
90	X30Y118	縄文深鉢	①繊維②良好③橙④胴部⑤無文。	―	早期末葉～前期初頭
91	X35Y119	縄文深鉢	①繊維②良好③灰褐④口縁部⑤内面に貝殻条痕文。	―	早期末葉～前期初頭
92	X23Y121	縄文深鉢	①細粒②極良③橙④胴部⑤円管文、肋骨文。	―	諸磯a
93	X34Y126	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい赤褐④口縁部⑤押し引きによる刺突を残す平行沈線。	―	諸磯a
94	X29Y128	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④口縁部⑤突起。口唇部に刻み。幅広の連続爪形文。	―	浮島
95	X34Y126	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による連続爪形文。円筒文。	―	諸磯a

番号	出土位置	器形	①胎土②焼成③色調④残存⑤器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
96	X34Y125 ほか	縄文深鉢	①中粒②良好③明赤褐④口縁部⑤半截竹管による幅広な連続爪形文と刻み。	—	浮島
97	X34Y126	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤円管文、連続爪形文。	—	諸磯b
98	X22Y123	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線。	—	諸磯b
99	X22Y123	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線と変形爪形文。	—	浮島
100	X33Y127	縄文深鉢	①中粒②良好③橙④胴部⑤半截竹管による平行沈線、地文に縄文ＲＬ。	—	諸磯b
101	X30Y116	縄文深鉢	①細粒②極良③浅黄④口縁部⑤半截竹管による平行沈線。	—	諸磯b
102	X26Y128	縄文深鉢	①細粒②極良③にぶい橙④口縁部⑤半截竹管による平行沈線。	—	諸磯b
103	X28Y128	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部⑤半截竹管による平行沈線、口唇部に刻み。	—	諸磯b
104	X34Y126	縄文深鉢	①粗粒②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤浮線文、地文に縄文ＲＬ。	—	諸磯b
105	X34Y126 ほか	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁部⑤浮線文、地文に縄文ＲＬ。	—	諸磯b
106	X31Y125	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤綾絡文、縄文Ｌ。	—	諸磯
107	X31Y125	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤綾絡文、縄文Ｌ。	—	諸磯
108	X27Y127	縄文深鉢	①中粒②良好③明赤褐④胴部⑤縄文Ｌ。	—	諸磯
109	X23Y122	縄文深鉢	①細粒②極良③橙④胴部⑤縄文ＲＬ。	—	諸磯
110	X28Y129	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
111	X28Y129	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
112	X27Y129	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
113	X28Y120	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
114	X28Y129	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
115	X28Y129	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤胴部胎土と異胎土の白い浮線文を持つ。	—	北白川下層
116	X28Y129	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい橙④胴部⑤変形爪形文。	—	浮島
117	X33Y121	縄文深鉢	①細粒②良好③黄灰④口縁部⑤隆帯に刻み、沈線。	—	堀之内式
118	X35Y126	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤沈線、縄文ＲＬ。	—	称名寺
119	X34Y126	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい橙④胴部⑤隆帯に円形刺突。	—	堀之内式
120	X25Y121	縄文深鉢	①中粒②良好③明赤褐④胴部⑤縦位沈線区画。横走の縄文ＲＬ。	—	加曾利Ｅ3
121	X30Y121	縄文深鉢	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部⑤無文。	—	中期後半
122	X32Y117	縄文深鉢	①細粒②良好③にぶい黄橙④底部⑤無文。	—	中期後半

註）表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を

② 焼成は極良・良好・不良の３段階評価。

③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖(小山・竹原1976)によった。

④ 残存は復元個体に限って記載。大きさは現存値を(　)、復元値を［　］で示した。その他の小片については所属部位を記

Tab. 6　石器観察表

No.	出土位置	器種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調整加工の特徴・取上番号
1	J－1	石鏃	①1.8②1.45③0.4④0.6g⑤完形⑥黒色安山岩	凹基無茎式・336
2	J－1	石鏃	①2.0②1.35③0.5④0.8g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	平基無茎式・346
3	J－1	石鏃	①2.0②1.65③0.45④1.4g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	平基無茎式・2
4	J－1	石鏃	①2.2②1.8③0.5④1.4g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式・3
5	J－1	石鏃	①2.9②1.5③0.45④1.4g⑤完形⑥黒色頁岩	凹基無茎式・392
6	J－1	石鏃	①3.1②1.9③0.4④1.6g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式・1
7	J－1	楔形石器	①3.3②2.1③1.0④7.9g⑤完形⑥チャート	縦長の四角形に作られる。・326
8	J－1	削器	①4.8②4.2③0.9④20g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に礫面、裏面に主要剥離面を残す。・274
9	J－1	削器	①3.3②4.3③0.9④12.6g⑤完形⑥黒色安山岩	表面２辺に丁寧な剥離が形成される。・58
10	J－1	石錐	①6.4②5.1③1.3④28.4g⑤完形⑥黒色頁岩	大形の刃部を持ち、裏面は主要剥離面で構成・22
11	J－1	削器	①7.3②3.9③1.7④39.6g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面の右側縁に大きい剥離の刃部が形成・263
12	J－1	打製石斧	①6.8②4.2③1.7④53.4g⑤1/2⑥灰色安山岩	裏面に礫面を残し片刃形成・202
13	J－1	打製石斧	①6.6②4.3③1.7④49.8g⑤1/2⑥黒色頁岩	刃部は礫面と主要剥離面で構成される・78
14	J－1	削器	①5.8②3.7③1.2④20.8g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に礫面を残し、刃部は裏面に形成される
15	J－1	打製石斧	①7.7②5.3③1.8④75.4g⑤完形⑥黒色頁岩	やや撥形をなし、刃部は片刃となる・340
16	J－1	打製石斧	①10.3②6.0③2.9④192.0g⑤完形⑥灰色安山岩	裏面に礫面を残し、片刃を形成する・401
17	J－1	打製石斧	①8.3②6.4③2.8④172.1g⑤完形⑥黒色頁岩	刃部は表裏面とも大きな剥離で片刃構成・338
18	J－1	打製石斧	①9.8②6.3③4.8④283.1g⑤完形⑥黒色頁岩	厚手であり裏面に礫面を残す。片刃構成・211
19	J－1	打製石斧	①10.4②7.1③3.7④380g⑤完形⑥輝緑岩	刃部は数回の剥離によって形成される・300
20	J－1	磨石凹石	①7.3②7.2③3.7④283.8g⑤1/2⑥粗粒輝石安山岩	表裏面とも磨面となる・270
21	J－1	磨石	①11.8②8.4③4.8④640.0g⑤ほぼ完形⑥粗粒輝石安山岩	火熱によるハジケがみられる。表裏面とも磨っている・86
22	J－2	石鏃	①2.4②1.7③0.5④1.4g⑤先端欠損⑥黒色頁岩	凹基無茎式
23	J－2	石鏃	①2.45②1.85③0.7④2.6g⑤完形⑥チャート	平基無茎式
24	J－2	削器	①3.1②2.7③0.6④4.4g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に細かな加工が連続してみられる・205
25	J－2	削器	①6.0②4.4③1.4④38.2g⑤下端欠損⑥黒色頁岩	裏面右側縁に刃部が形成される・X29Y127
26	J－2	磨製石斧	①6.1②5.7③1.2④91.4g⑤1/3⑥蛇紋岩	定角式。刃部に使用痕が認められる・X29Y127
27	J－2	磨石	①6.5②7.7③④197.6g⑤1/2⑥粗粒輝石安山岩	熱による割れを受けている・X29Y127
28	J－2	打製石斧	①11.3②8.2③4.3④500g⑤完形⑥ホルンフェルス	厚手であり片刃で構成される
29	J－2	打製石斧	①7.2②4.8③2.6④88.3g⑤完形⑥黒色頁岩	表裏面とも丁寧な加工が入る。片刃
30	J－2	磨石	①6.4②3.4③④58.9g⑤1/4⑥粗粒輝石安山岩	表裏面とも磨面で構成。表面に敲き痕・X29Y127
31	J－2	打製石斧	①8.0②5.2③2.6④132.3g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に礫面を残す。表面に片刃の刃部が形成
32	J－3	削器	①6.5②4.3③④29.1g⑤完形⑥黒色頁岩	下端と右側縁に刃部が形成される・4
33	J－3	石錐	①3.8②2.3③0.6④4.6g⑤完形⑥黒色頁岩	半円形の刃部を持つ上端に礫面を有する
34	J－3	石製品	①1.7②1.6③④8.4g⑤完形⑥滑石製品	直方体を意識しながら円柱形に整形される・1
35	J－3	打製石斧	①14.9②7.6③3.6④570.0g⑤完形⑥輝緑岩	表裏面に大きく礫面を残して片刃が形成
36	J－4	削器	①3.5②3.2③0.8④9.6g⑤完形⑥黒色頁岩	左側縁に丁寧に加工された刃部が形成される・9
37	JT-1	敲石	①8.4②6.3③4.6④370.0g⑤完形⑥粗粒輝石安山岩	上・下端に敲き面を有する・1
38	JD-2	打製石斧	①8.6②6.4③2.6④152.0g⑤完形⑥黒色頁岩	表裏面とも剥離により形成される・1

No.	出土位置	器種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調整加工の特徴・取上番号
39	表採	土錘	①4.0②1.7③1.7④11.0g⑤完形⑥土錘	古墳時代以降のものと思われる。1点出土
40	X35-Y125	有舌尖頭器	①6.6②1.6③0.8④6.8g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	舌部下端をわずかに欠損する。両面とも丁寧な剥離
41	X29-Y116	石鏃	①1.8②1.32③0.5④0.8g⑤ほぼ完形⑥チャート	凹基無茎式。表面に礫面を残す
42	表採	石鏃	①2.0②1.3③0.5④0.9g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式
43	X31-Y117	石鏃	①2.05②1.2③0.55④0.8g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式
44	X28-Y129	石鏃	①1.85②1.75③0.5④1.6g⑤先端欠損⑥チャート	平基無茎式
45	X35-Y118	石鏃	①2.05②1.3③0.82④1.1g⑤完形⑥チャート	平基無茎式。裏面に瘤状に未剥離面を残す
46	X31-Y127	石鏃	①1.85②1.22③0.47④0.7g⑤完形⑥黒色頁岩	凹基無茎式。凹みがやや右による
47	X36-Y125	石鏃	①2.0②1.4③0.4④0.8g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式。身部は幅広となる
48	X36-Y120	石鏃	①2.25②1.2③0.42④0.7g⑤先端欠損⑥チャート	凹基無茎式。身部は細味で直線的である
49	X26-Y128	石鏃	①2.1②1.85③0.4④1.1g⑤先端欠損⑥チャート	凹基無茎式。幅広の身部を有する
50	表採	石鏃	①2.0②1.65③0.35④0.6g⑤完形⑥黒色頁岩	凹基無茎式。わたぐりの深い基部を有する
51	X30-Y115	石鏃	①1.9②1.3③0.45④0.7g⑤完形⑥チャート	凹基無茎式。平基に近い基部
52	X35-Y119	石鏃	①2.1②1.4③0.55④1.0g⑤先端欠損⑥黒色安山岩	凹基無茎式。身部は直線的に構成される
53	X31-Y115	石鏃	①2.1②1.9③0.8④2.9g⑤完形⑥チャート	円基鏃。身部は厚手である
54	X40-Y122	石鏃	①2.65②1.85③0.55④2.0g⑤基部欠損⑥チャート	凹基無茎式
55	X25-Y119	石鏃	①3.25②1.77③0.47④1.9g⑤完形⑥チャート	平基無茎式。表裏面とも丁寧な剥離で形成される
56	X29-Y117	石鏃	①3.4②2.05③0.42④1.9⑤完形⑥黒色安山岩	凹基無茎式。深いわたぐりの基部を有する
57	X34-Y118	石匙	①5.8②2.5③1.1④10.6g⑤完形⑥チャート	縦形の石匙。表面に細かな剥離が入る
58	X31-Y115	石匙	①3.3②3.8③0.8④7.0g⑤完形⑥細粒輝石安山岩	横形の石匙。表面全体と裏面周囲に丁寧な調整が入る
59	X28-Y128	石匙	①6.3②4.4③1.1④22.4g⑤完形⑥黒色頁岩	縦形の石匙。表裏面とも周辺加工がわずかにみられる
60	X29-Y115	石匙	①6.8②4.2③1.0④14.7g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	横形の石匙。熱によりハジケが著しい
61	X28-Y129	削器	①4.3②1.7③0.65④5.2g⑤完形⑥黒色頁岩	右側縁に丁寧な剥離で刃部が形成される
62	X34-Y125	石匙	①3.8②5.3③0.8④15.2g⑤先端欠損⑥黒色安山岩	横形の石匙。表裏面ともわずかな周辺加工で整形される
63	X34-Y119	石匙	①4.1②6.9③0.7④15.4g⑤ほぼ完形⑥黒色頁岩	横形の石匙。熱により表面が大きく剥落
64	X26-Y122	石匙	①6.7②5.0③0.8④26.0g⑤完形⑥黒色頁岩	横形の石匙。つまみの形成は不鮮明である
65	X28-Y129	削器	①3.2②4.5③1.1④11.0g⑤完形⑥黒色頁岩	石匙状。下端に加工が入る
66	X35-Y119	削器	①4.0②3.6③0.8④11.1g⑤完形⑥黒色頁岩	右側縁に剥離がなされる
67	表採	削器	①8.9②5.3③1.6④89.0g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に礫面を残す。裏面の両側縁に調整加工
68	X35-Y118	石錐	①6.7②3.5③0.9④18.3g⑤完形⑥黒色頁岩	上・下両端に刃部が形成される
69	X36-Y120	削器	①7.7②4.3③1.1④45.4g⑤完形⑥黒色頁岩	表面右側縁に刃部が形成される
70	X31-Y117	削器	①9.2②5.3③1.4④61.2g⑤完形⑥黒色頁岩	表面右側縁に刃部が形成される
71	X26-Y127	削器	①8.0②6.1③1.4④67.5g⑤完形⑥砂岩	裏面に大きく礫面を有し、表面右側縁に刃部が形成される
72	X33-Y120	削器	①6.3②6.2③1.25④45.5⑤完形⑥黒色頁岩	表面下端に刃部が形成される
73	X30-Y115	削器	①7.7②4.0③1.6④44.7g⑤完形⑥砂岩	下端に刃部が形成され、裏面は礫面を残す
74	X30-Y114	楔形石器	①3.15②1.75③1.05④5.1g⑤完形⑥チャート	縦長、四角形に形成される
75	X28-Y129	楔形石器	①2.8②1.9③1.1④6.1g⑤完形⑥チャート	縦長、裏面は主要剥離面で構成される
76	X31-Y115	楔形石器	①3.1②2.5③1.0④7.4g⑤完形⑥チャート	楕円形である
77	X34-Y120	楔形石器	①3.0②2.6③1.0④8.2g⑤完形⑥チャート	横長、四角形に作られる
78	X34-Y121	楔形石器	①3.1②1.8③0.9④4.6g⑤完形⑥チャート	縦長の楕円形で裏面には主要剥離面を大きく残す
79	表採	楔形石器	①3.9②2.8③1.3④15.7g⑤完形⑥チャート	縦長で台形状をなす。表裏面とも礫面を残す

No.	出土位置	器種	①長さ②幅③厚さ④重さ⑤残存⑥石材名	形状、調整加工の特徴・取上番号
80	X31-Y117	打製石斧	①6.5②4.5③1.3④51.2g⑤1/2⑥黒色頁岩	裏面に礫面を大きく残し、刃部は表面の剥離によって形成される
81	X29-Y115	打製石斧	①5.9②4.0③2.9④82.0g⑤2/3⑥砂岩	上端を欠損する。表面に剥離が集中し片刃である
82	X35-Y125	打製石斧	①8.4②4.7③1.9④90.6g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に礫面を大きく残す。片刃構成の刃部
83	X30-Y115	打製石斧	①7.9②5.0③1.8④66.8g⑤完形⑥黒色頁岩	表裏面とも剥離がなされるが、刃部は数回の剥離で形成
84	X35-Y126	打製石斧	①9.3②5.0③1.8④79.9g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に熱によるハジケが入る。刃部は片刃構成
85	X31-Y117	打製石斧	①8.2②4.7③1.5④59.2g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に大きく礫面を残し、刃部は表面から片刃で形成
86	X34-Y118	打製石斧	①7.3②4.7③1.7④63.7g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面から刃部が作出され片刃構成となる
87	X30-Y118	打製石斧	①8.4②6.2③2.5④147.7g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に大きく礫面を残し表面から急傾斜の刃部が形成される
88	X29-Y115	打製石斧	①7.2②4.2③1.8④54.4g⑤2/3⑥黒色頁岩	裏面は主要剥離面で構成される。刃部は表面から形成される
89	X30-Y118	打製石斧	①9.6②4.7③3.0④133.1g⑤1/5⑥黒色頁岩	節理により右側縁を欠損する。刃部は表面から形成される
90	X30-Y126	打製石斧	①8.0②5.0③1.4④56.1g⑤完形⑥黒色頁岩	撥形の石斧。表裏面とも丁寧な加工が施される
91	X30-Y115	打製石斧	①6.3②4.0③1.3④39.0g⑤完形⑥黒色頁岩	裏面に礫面を残す。表面の周囲に加工が入る
92	X29-Y117	打製石斧	①7.8②4.9③3.4④152.5g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に丁寧な加工が入る。刃部は片刃気味
93	X31-Y129	打製石斧	①8.3②4.9③2.1④69.8g⑤完形⑥黒色頁岩	刃部は主要剥離面と礫面によって構成される
94	X31-Y114	打製石斧	①6.8②4.8③1.5④62.7g⑤2/3⑥黒色頁岩	表裏面とも周囲からの剥離によって形成される
95	X35-Y120	三角錐形石器	①11.2②5.0③3.7④248.1g⑤完形⑥珪質頁岩	表裏面とも礫面を大きく残している。四角錘形に作られる
96	X31-Y114	打製石斧	①5.9②5.8③1.8④54.0g⑤1/2⑥黒色頁岩	上下端とも欠損している
97	X35-Y125	打製石斧	①4.9②4.1③1.1④24.0g⑤1/3⑥細粒輝石安山岩	刃部を欠損している
98	X28-Y125	打製石斧	①13.8②6.3③3.8④350g⑤完形⑥黒色頁岩	刃部は礫面と大剥離面で構成される
99	X34-Y126	打製石斧	①15.7②8.0③5.2④720g⑤完形⑥黒色頁岩	表裏面に礫面を残す。刃部は大剥離面で構成される
100	X26-Y117	打製石斧	①9.8②8.7③3.4④310g⑤1/2⑥黒色頁岩	上端を欠損する。刃部は片刃となる
101	X32-Y121	打製石斧	①17.2②4.8③3.3④253.2g⑤完形⑥黒色頁岩	表面に丁寧な剥離が入る。刃部は片刃
102	X26-Y117	打製石斧	①11.7②8.3③3.1④460g⑤完形⑥ホルンフェルス	礫面を残し、表面から片刃の刃部が形成される
103	X37-Y119	打製石斧	①6.4②5.8③2.9④114.6g⑤1/2⑥黒色頁岩	刃部と基部を欠損する
104	X35-Y118	打製石斧	①6.0②5.8③2.8④88.1g⑤1/2⑥黒色頁岩	基部を欠損。刃部は片刃である
105	X37-Y119	打製石斧	①11.6②7.9③2.5④229.5g⑤完形⑥ホルンフェルス	分銅形石斧。裏面に礫面を大きく残す
106	X33-Y124	凹石	①9.7②7.0③3.5④260.0g⑤⑥角閃岩安山岩	敲き痕のほかに筋状の使用痕を残す
107	X27-Y128	磨石	①10.2②9.9③3.6④540.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
108	X32-Y127	磨石凹石	①10.2②8.1③6.7④610.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	表面のみ凹石として使用
109	X27-Y114	凹石	①9.8②7.8③6.6④550.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	表面のみ凹石として使用
110	X28-Y129	凹石	①11.6②8.0③4.3④520.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	上端に敲き痕が認められる
111	X24-Y127	凹石	①9.6②8.4③5.2④370.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	表裏面とも凹石として使用
112	X29-Y117	磨石凹石	①8.0②7.3③3.5④300g⑤⑥粗粒輝石安山岩	表面を使用
113	表採	磨石	①11.4②9.6③3.3④490.0g⑤⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
114	X30-Y115	磨石	①12.0②10.9③2.9④570g⑤⑥粗粒輝石安山岩	両面とも使用
115	X27-Y117	敲石	①19.0②9.8③6.1④1830g⑤⑥粗粒輝石安山岩	下端に大きな敲き痕を有する

Tab. 7　古墳時代遺物観察表

番号	出土位置	器　形	大きさ 口径 器高	①胎土②焼成③色調④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
1	H-3	椀	12.3 6.4	①細粒②良好③橙④完形	外面磨き、底部付近はナデ。内面磨き。	6	
2	H-4	小甕	[8.1](6.4)	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/4	外面横ナデ、ナデ。内面横ナデ、ナデ。		
3	H-4	甕	[14.8](5.3)	①細粒②良好③橙④口縁部	外面波状文。内面磨き。	18	樽式系
4	H-4	甕	[15.3](4.4)	①細粒②良好③黄橙④口縁部	外面波状文。内面ナデ。	79ほか	
5	H-5	杯	12.2 6.1	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、暗文。	36	
6	H-5	高杯	[12.4]11.1	①細粒②良好③黄橙④2/3	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	48	
7	H-5	甕	14.2 23.1	①中粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、刷毛目後、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	21	
8	H-5	甕	14.6 27.0	①中粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外面横ナデ、刷毛目後ナデ、底部篦削り。内面ナデ、横ナデ。	47	
9	H-5	甕	[15.4](23.3)	①中粒②良好③橙④2/3	外面横ナデ、刷毛目後、ナデ、底部は篦削り。内面横ナデ、ナデ。	23	
10	H-5	杯	14.2 6.2	①細粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	25	
11	H-5	杯	12.8 5.9	①細粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	45	
12	H-5	杯	10.7 5.5	①細粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	50	
13	H-5	杯	12.3 5.3	①細粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、磨き、篦のあった跡あり。	27	
14	H-5	杯	[13.5]5.8	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	24	
15	H-5	杯	12.2 5.2	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	41	
16	H-5	甕	14.0 13.7	①中粒②良好③明黄褐④完形	外面横ナデ、刷毛目後、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	24	
17	H-5	甑	19.3 23.2	①細粒②良好③浅黄橙④完形	外面横ナデ、刷毛目の後、ナデと篦削り。内面横ナデ、ナデ。	22	
18	H-5	甕	15.2 28.8	①中粒②良好③浅黄橙④完形	外面横ナデ、刷毛目後、ナデ、一部篦削り。内面横ナデ、ナデ。	15	
19	H-5	甕	15.2(23.9)	①中粒②良好③橙④1/2	外面横ナデ、刷毛目、ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	19ほか	
20	H-5	杯	[14.4]6.5	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	26	
21	H-5	椀	12.68.7	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	17	
22	H-5	椀	11.38.0	①細粒②良好③橙④完形	外面横ナデ、篦削り。内面横方向のナデ。	49	
23	H-5	杯	[13.2]6.6	①細粒②良好③橙④3/5	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ、篦の端が当たった跡あり。	14	
24	H-5	甕	15.4 26.5	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外面横ナデ、刷毛目、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	46ほか	
25	H-5	甕	16.2(20.0)	①中粒②良好③黄橙④1/2	外面横ナデ、刷毛目の後ナデ、底部付近は篦削り。内面横ナデ、刷毛目。	18ほか	
26	H-5	甕	(9.3)6.2	①中粒②良好③橙④底部	外面篦削りの後、ナデ。内面、ナデ。	29ほか	

番号	出土位置	器　形	大きさ 口径 器高	①胎土②焼成③色調④残存	器形・製作技法の特徴	登録番号	備考
27	H-5	器台	[16.6] (6.7)	①細粒②極良③橙④口縁部	外面磨き、赤色塗彩。内面刷毛目後、ナデ、横ナデ。	3ほか	赤色塗彩
28	H-5	台付甕	11.7(15.0)	①中粒②良好③橙・黒褐④3/4	外面口縁～肩部は波状文、胴部はナデ。内ナデ。	1	
29	H-7	小甕	[11.0](5.8)	①中粒②良好③橙④口縁	外面横ナデ、篦削り。内面横ナデ、ナデ。	4ほか	
30	H-7	甕	ー(8.1)	①中粒②良好③橙④底部	外面篦削り。内面ナデ。	3ほか	
31	H-7	甕	(10.9)8.4	①中粒②良好③橙④底部	外面篦削り。内面ナデ。	7	
32	H-4	砥石	5.0×3.5×3.1	砂岩56.7ｇ上部欠損	４面使用であるが顕著な	54	
33	H-5	砥石	7.8×6.0×6.1	軽石113.1ｇ完形	４面使用。磨った面と筋	P6	
34	H-5	支柱石	23.5×15.0×18.5	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
35	H-5	左袖石	29.5×15.5×6.5	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
36	H-5	右袖石	29.5×19.5×10.5	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
37	H-5	天井石	44.5×26.5×12.0	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
38	H-7	天井石	42.0×28.0×9.0	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
39	H-7	左袖石	37.0×21.0×15.5	粗粒輝石安山岩の角礫			竈
40	H-7	右袖石	25.5×20.0×12.5	粗粒輝石安山岩の円礫			竈

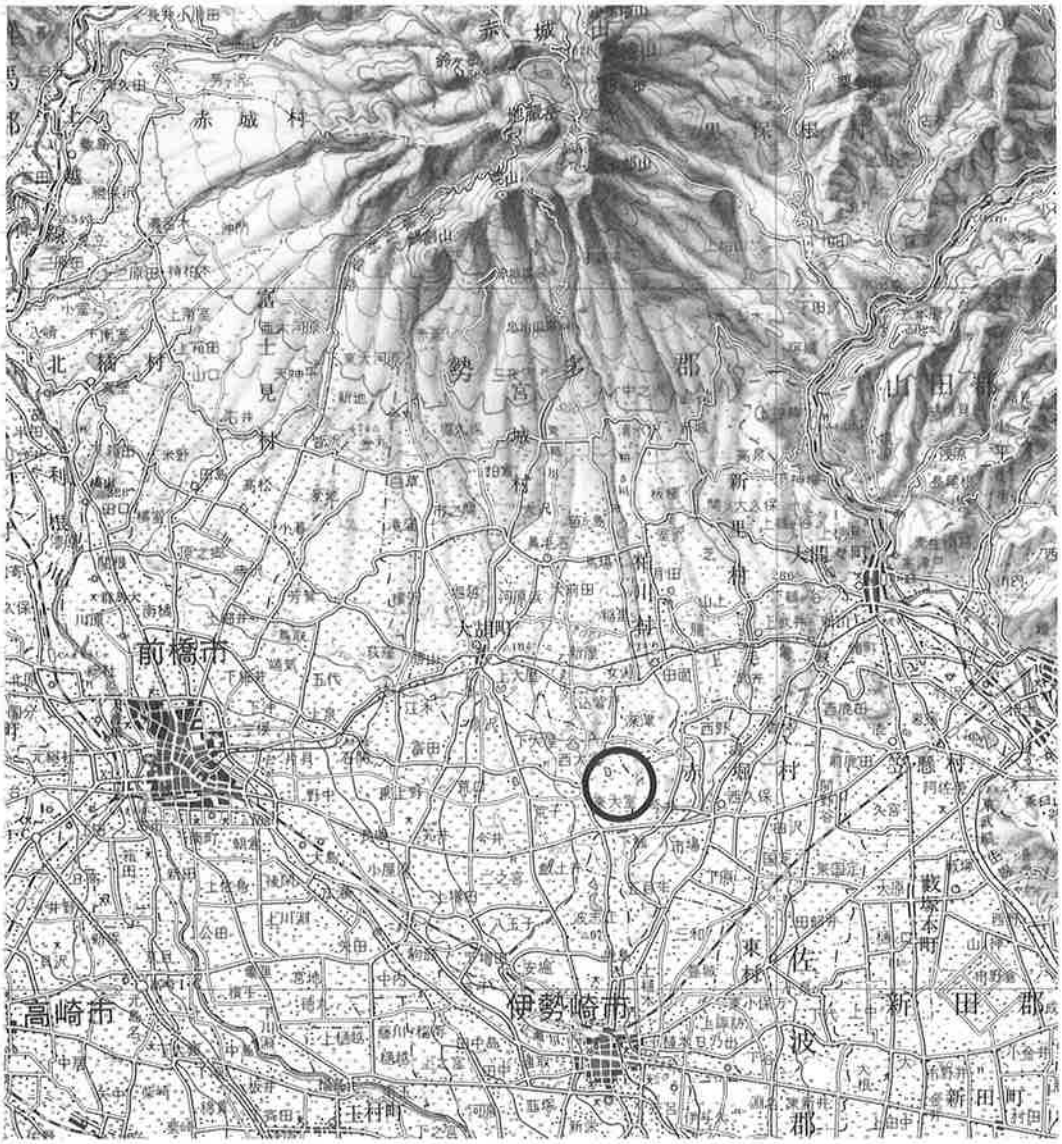
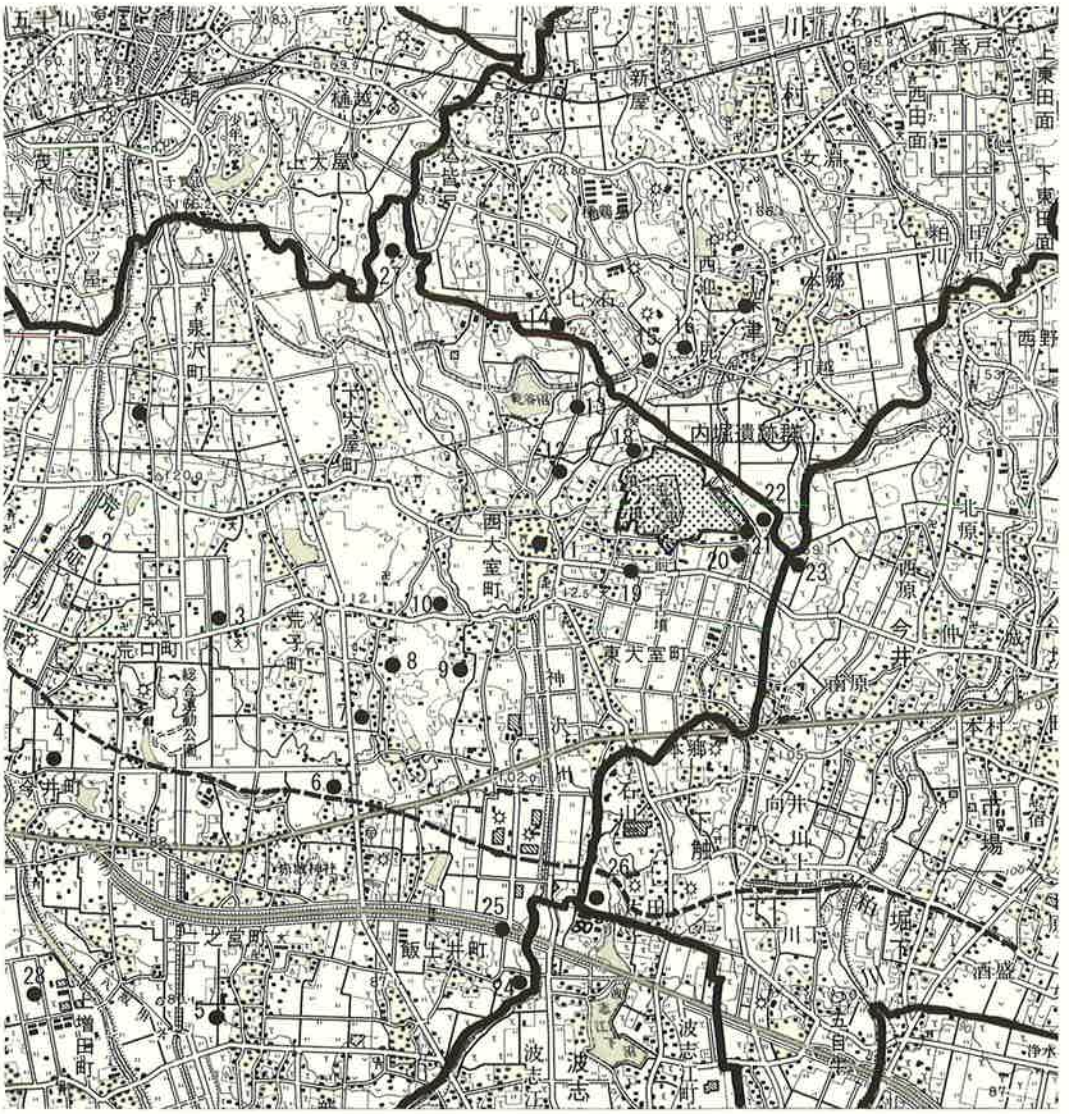


Fig. 1 内堀遺跡群の位置



1 丸山遺跡　2 荒砥諏訪西遺跡　3 柳久保遺跡群　4 荒砥北三木堂遺跡　5 荒砥島原遺跡　6 荒砥上ノ坊遺跡　7 荒砥荒子遺跡
8 舞台遺跡 1 号古墳　9 西大室丸山遺跡　10 富士山古墳　11 大室城　12 元大室城　13 北山遺跡　14 七ツ石遺跡
15 三ヶ尻西遺跡　16 西原遺跡　17 西迎遺跡　18 上縄引遺跡　19 荒砥上諏訪遺跡　20 荒砥上川久保遺跡　21 梅木遺跡
22 久保皆戸遺跡　23 赤堀茶臼山古墳　24 荒砥二之堰遺跡　25 二本松遺跡　26 下触牛伏遺跡　27 横俵遺跡群　28 中原遺跡群

Fig.　2　内堀遺跡群位置図

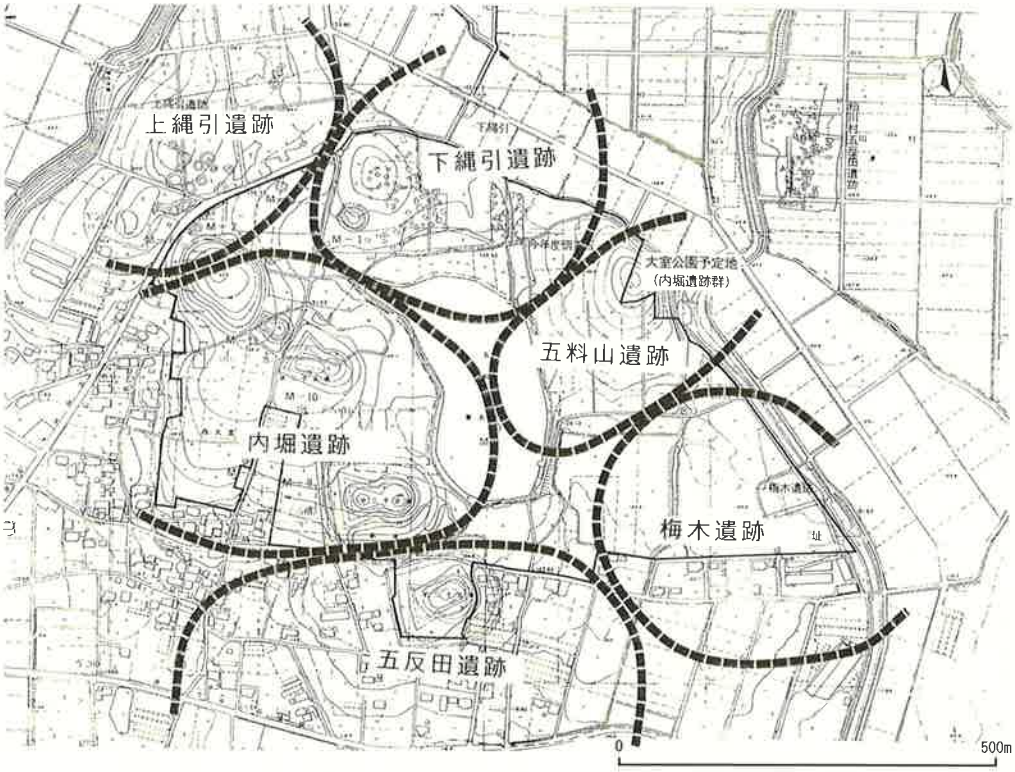


Fig. 3 内堀遺跡群の遺跡一覧図

Tab. 8 内堀遺跡群の発掘調査一覧

年次	年度	報告書名 (遺跡ｺｰﾄﾞ)	区域	調査区	遺跡名	主な遺構	面積 (㎡)	担当	国史跡調査 (遺跡ｺｰﾄﾞ)
1	昭和62 (1987)	内堀遺跡群 (62E-11)	公園全域の 試掘調査		上縄引遺跡 下縄引Ⅱ遺跡 内堀遺跡 五料山遺跡 五反田遺跡 梅木遺跡	遺跡範囲確認	200,000	桑原 園部	
2	昭和63 (1988)	内堀遺跡群Ⅱ (63E-11)	風のわたる丘		下縄引Ⅱ遺跡	住居19・古墳1	10,000	園部 加部	
3	平成元 (1989)	内堀遺跡群Ⅲ (1E－11)	風のわたる丘 北側駐車場 後二子古墳北 中二子古墳北		下縄引Ⅱ遺跡 上縄引遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡	住居15 古墳1・石槨1 住居1 溝	12,600	園部 鈴木	
4	平成2 (1990)	内堀遺跡群Ⅳ (2E-11)	風のわたる丘		下縄引Ⅱ遺跡	住居37	11,500	前原 伊藤	
5	平成3 (1991)	内堀遺跡群Ⅴ (3E-11)	北側駐車場		上縄引遺跡 内堀遺跡	周溝墓2 炭窯1	4,000	前原 伊藤	後二子古墳 (3E-11 M-10)
6	平成4 (1992)	内堀遺跡群Ⅴ (4E-11)	北側駐車場 管理用道路		上縄引遺跡 内堀遺跡 内堀遺跡	古墳2・石槨1 炭窯1 炭窯1	9,400	前原 伊藤 戸所	前二子古墳 (4E-11 M-8)
7	平成5 (1993)	内堀遺跡群Ⅵ (5E-11)	風のわたる丘		下縄引Ⅱ遺跡	住居44	3,130	前原 関口 戸所	中二子古墳(1) (5E-11 M-9)
8	平成6 (1994)	内堀遺跡群Ⅶ (6E-11)	風のわたる丘		下縄引Ⅱ遺跡	住居11	1,200	前原 戸所	中二子古墳(2) (6E-11 M-9)
9	平成7 (1995)	内堀遺跡群Ⅷ (7E-11)	民家園予定地 幹線ケーブル	A区 B区	内堀遺跡 内堀遺跡	旧石器・住居4 住居9	3,400	前原 新井	小二子古墳(1) (7E-11 M-11)

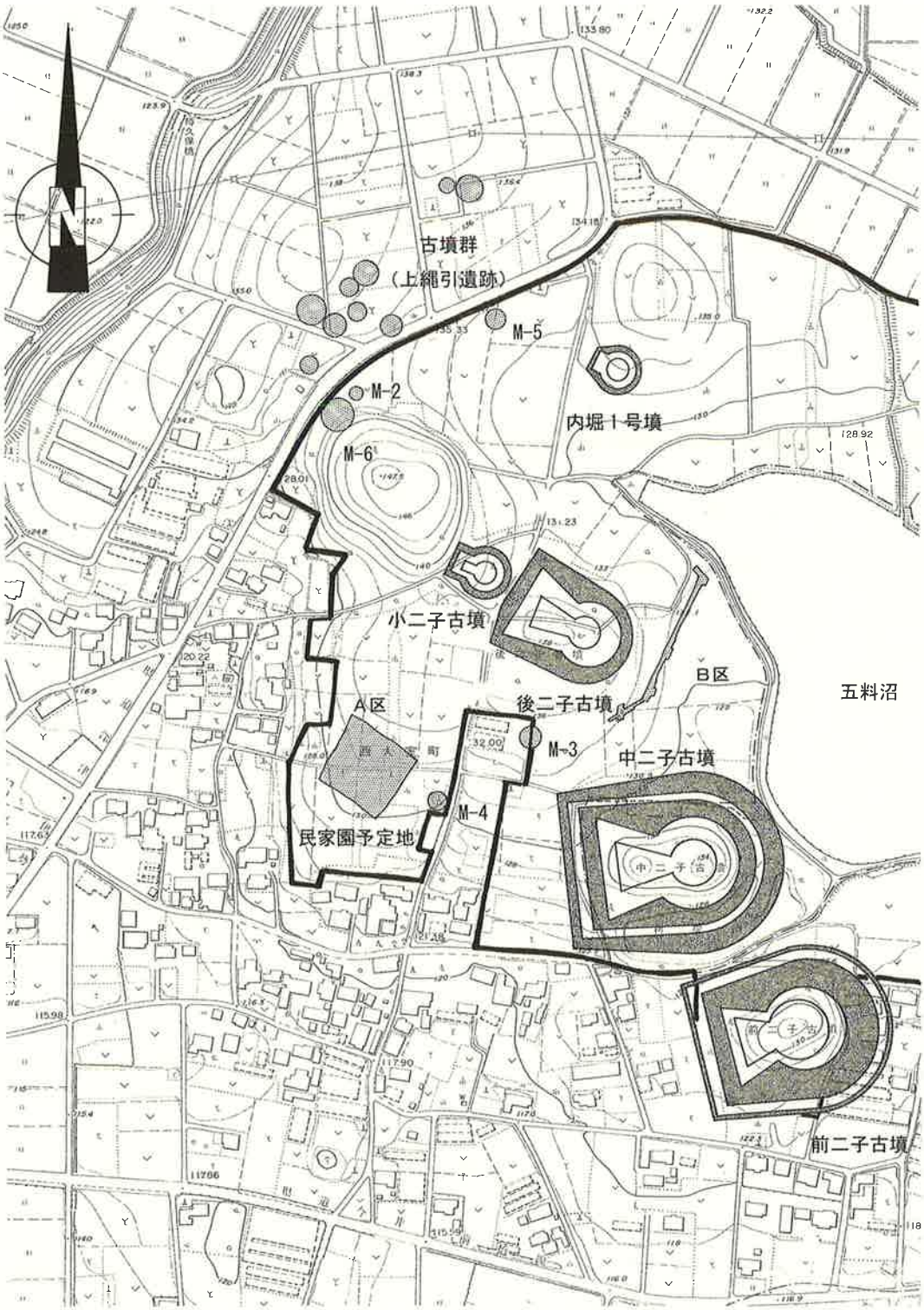


Fig. 4 内堀遺跡群周辺図（1）

Fig. 5 内堀遺跡群周辺図（2）

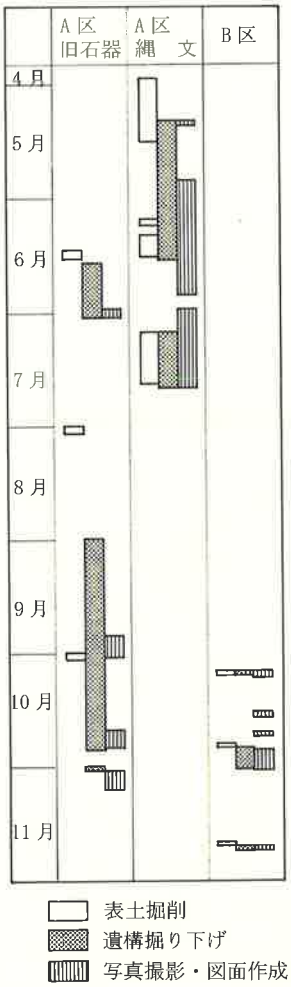


Fig.　6　平成７年度調査経過図

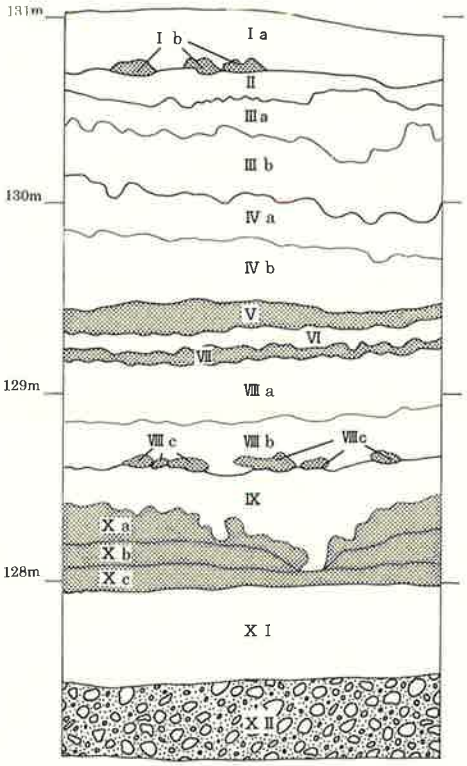


Fig.　7　内堀遺跡群標準土層図

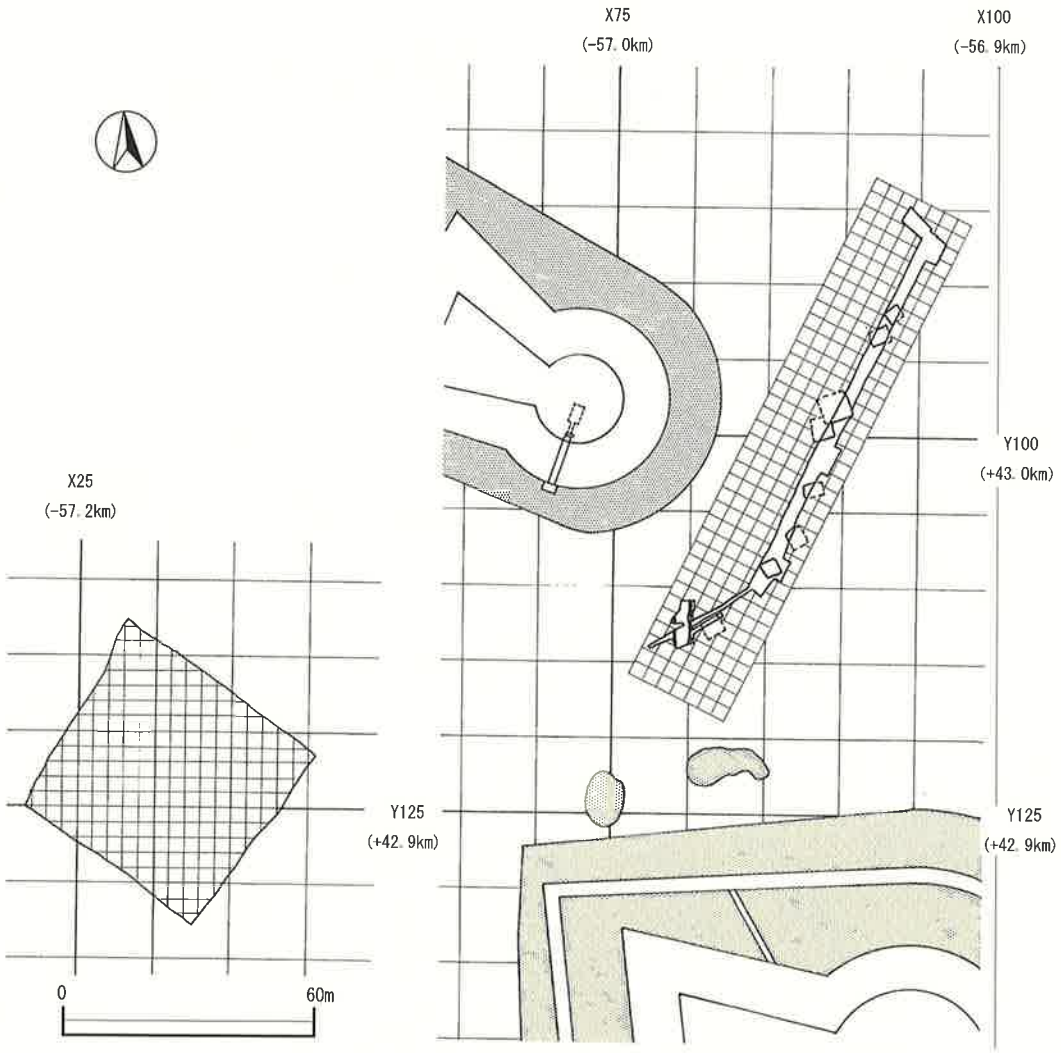


Fig. 8 平成７年度調査区設定図

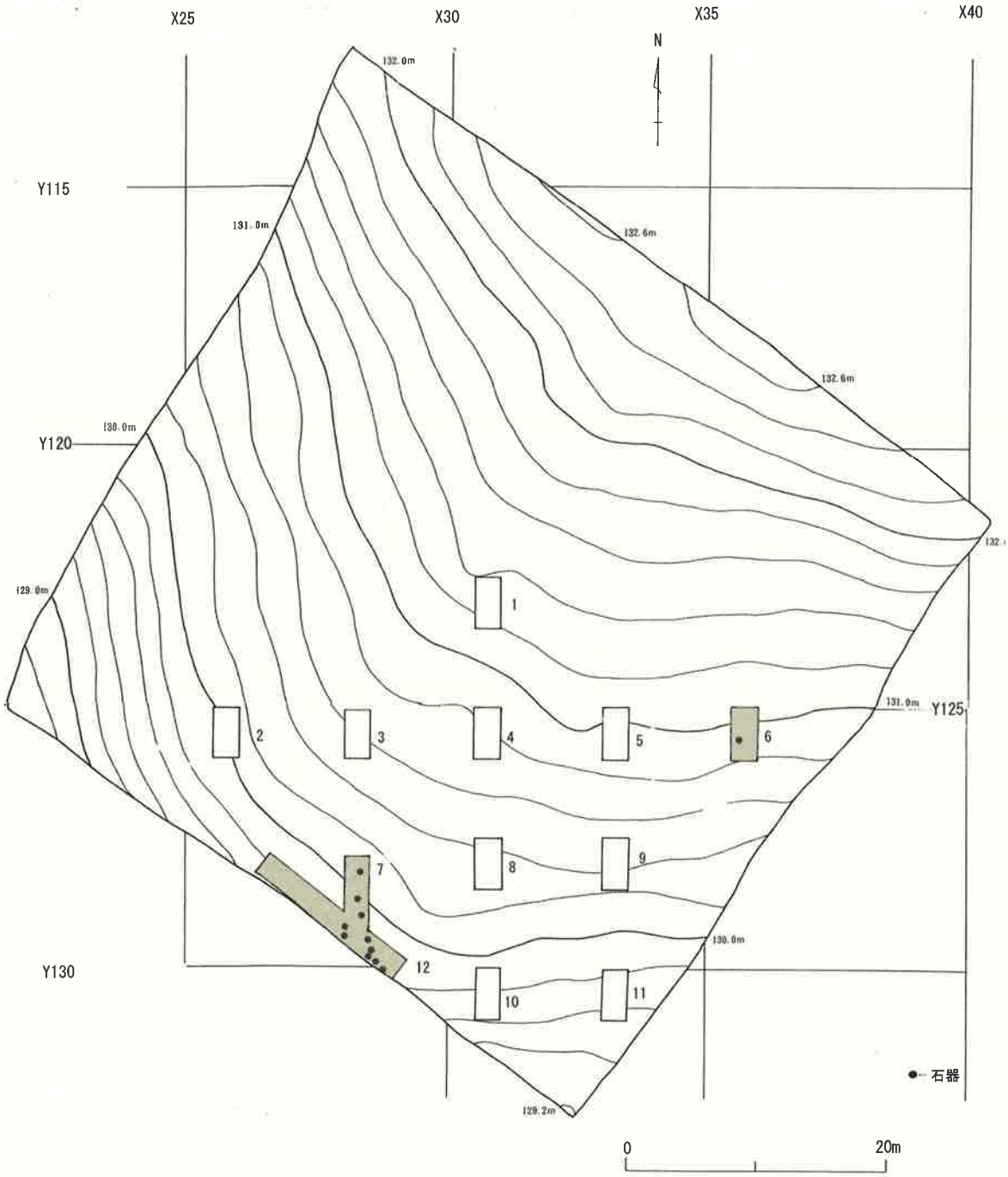


Fig. 9 A区旧石器試掘トレンチ図

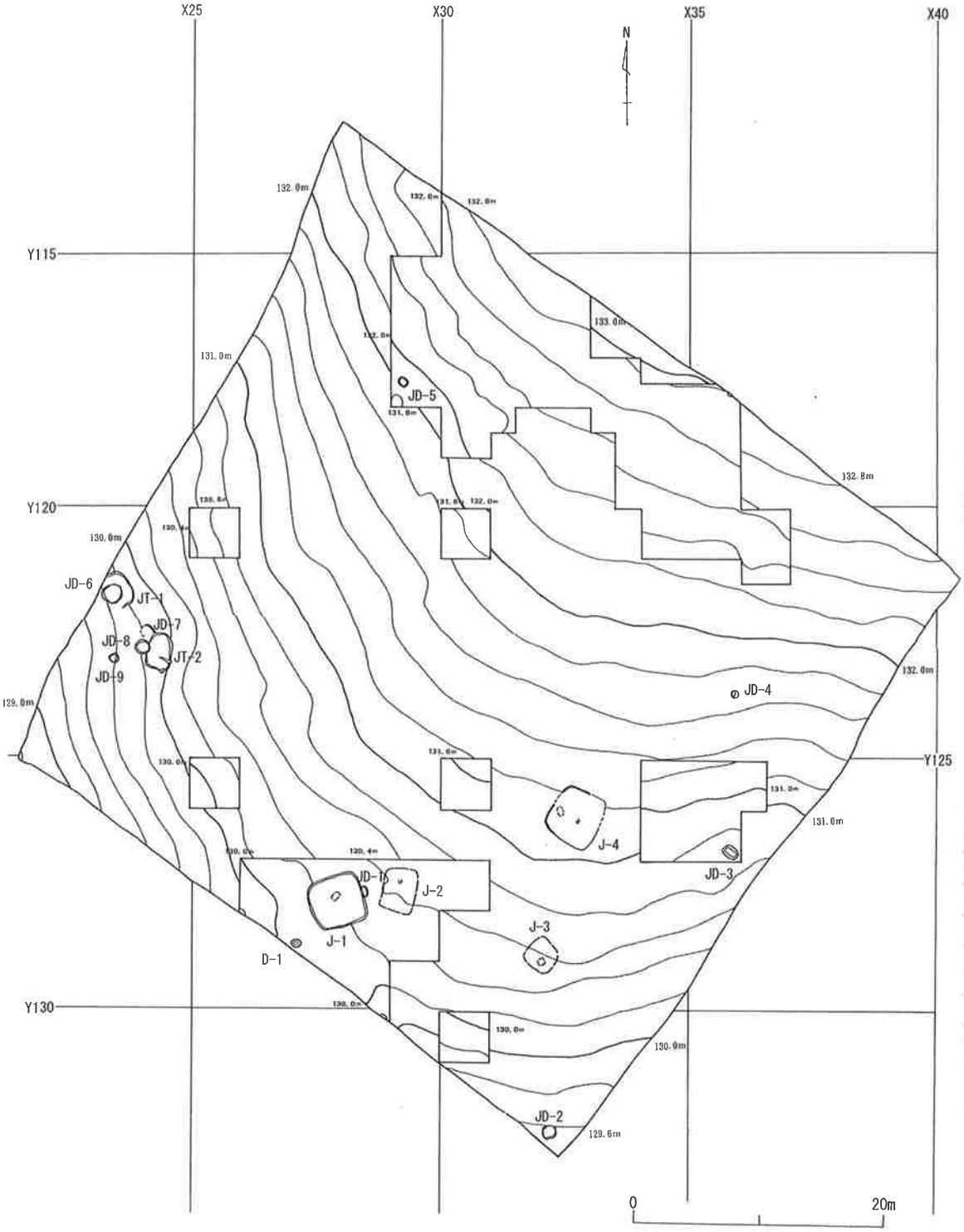
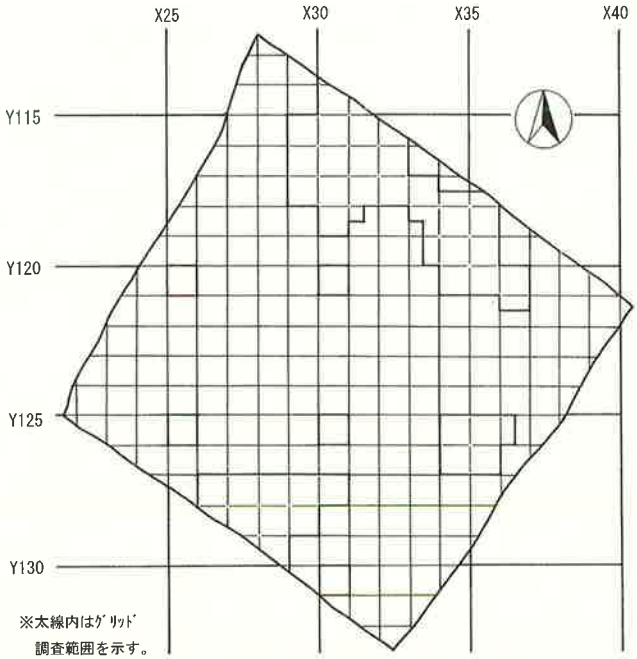
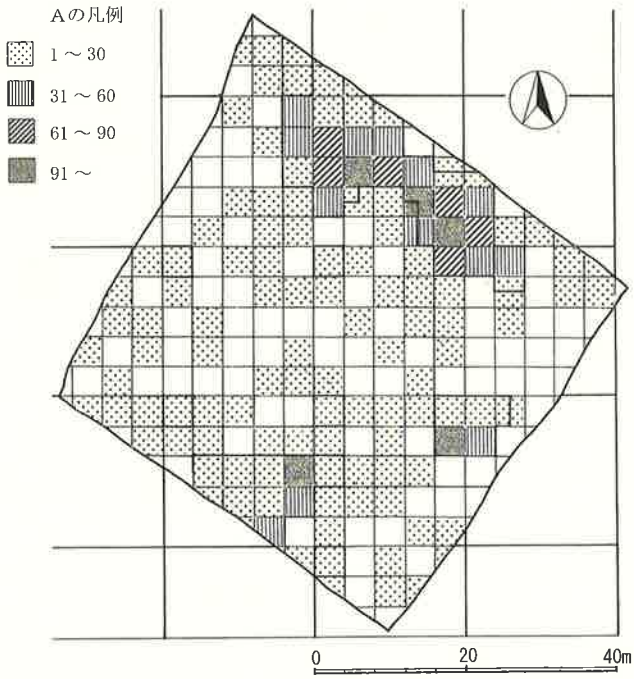


Fig. 10 A区縄文時代遺構全体図



縄文包含層グリッド図



A縄文土器全体分布図

Fig. 11 A区縄文包含層遺物分布図（1）

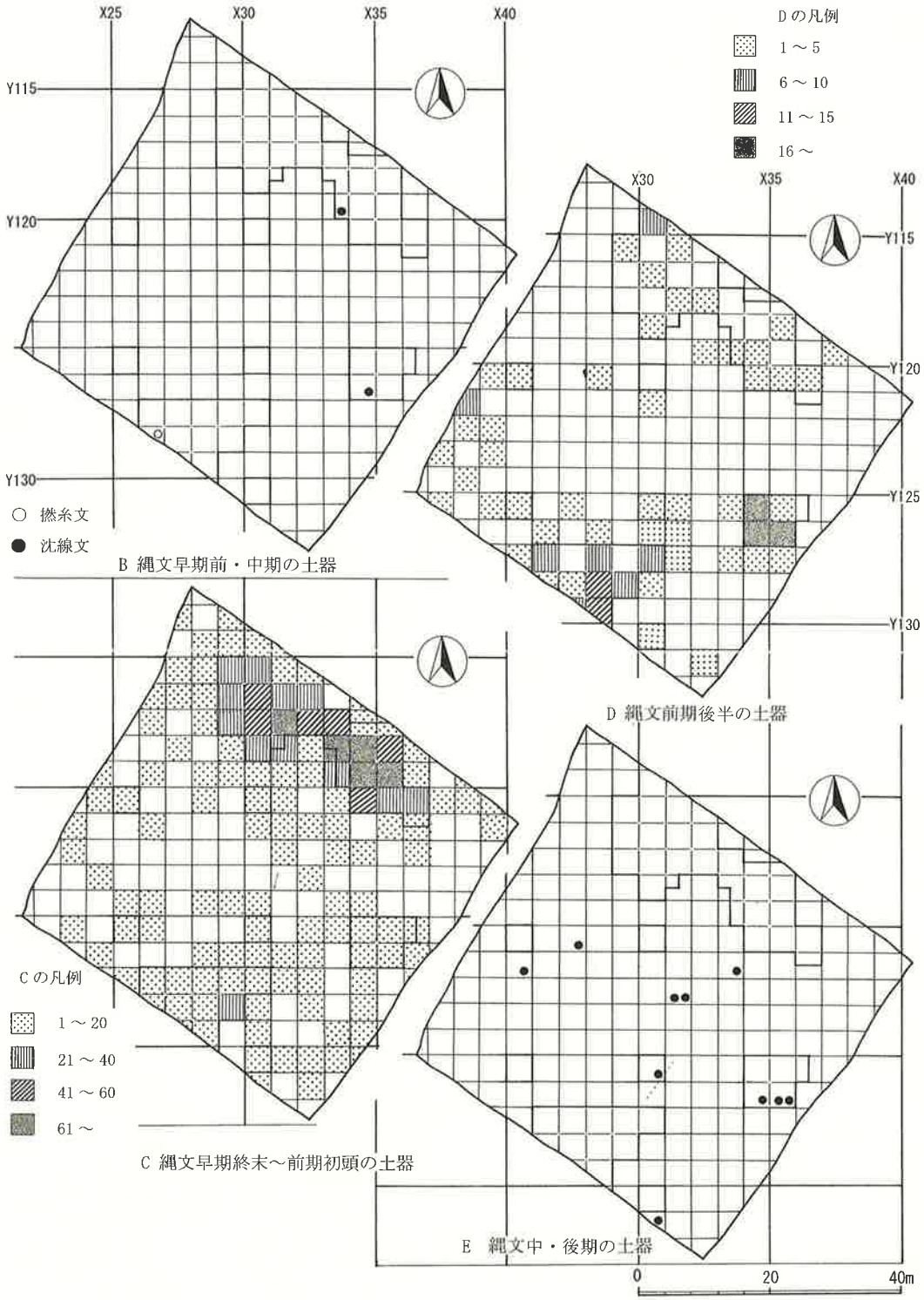


Fig. 12 A区縄文包含層遺物分布図（2）

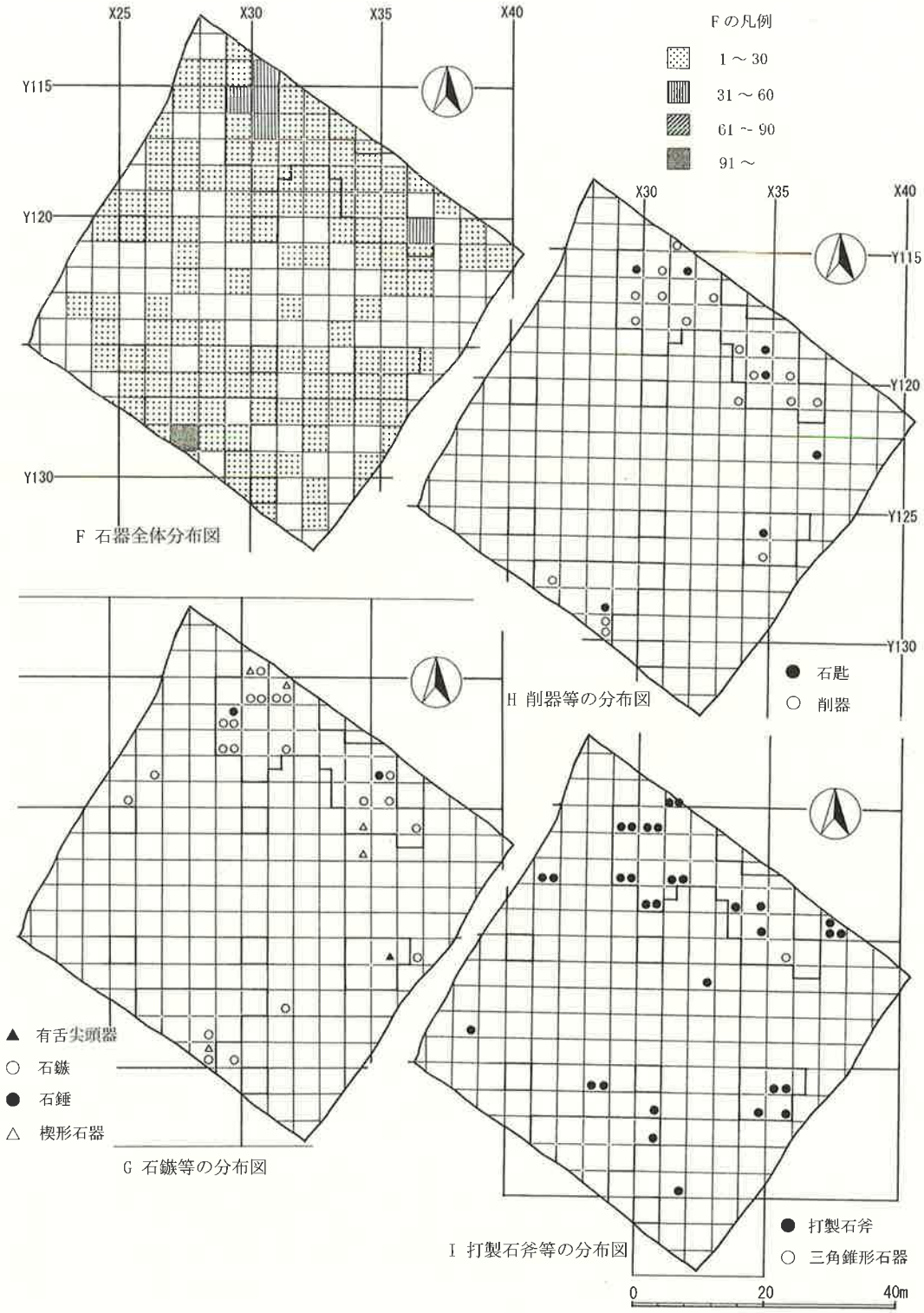


Fig. 13 A区縄文包含層遺物分布図（3）

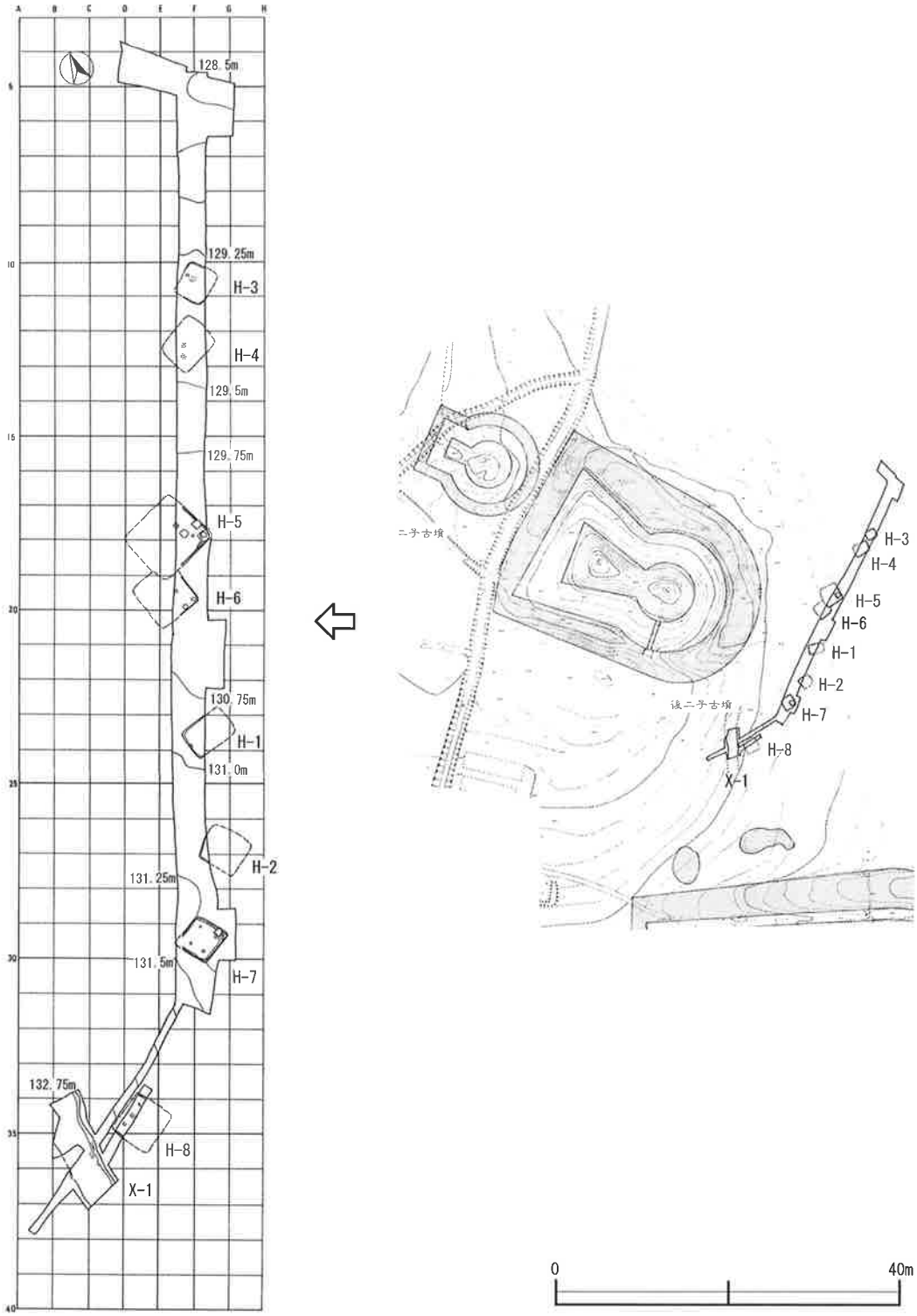


Fig. 14 B区遺構全体図

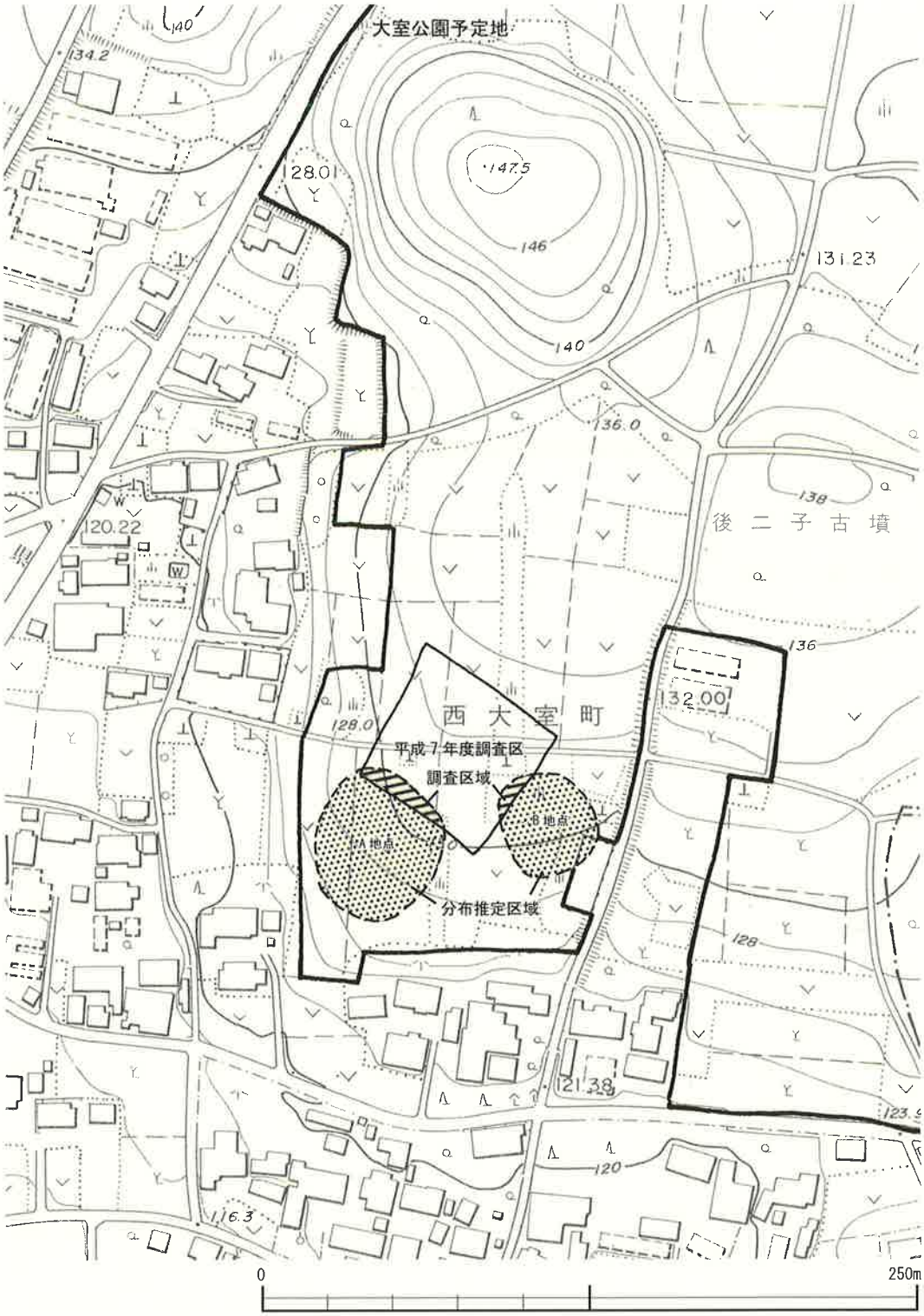


Fig. 15 A区旧石器文化層の推定範囲

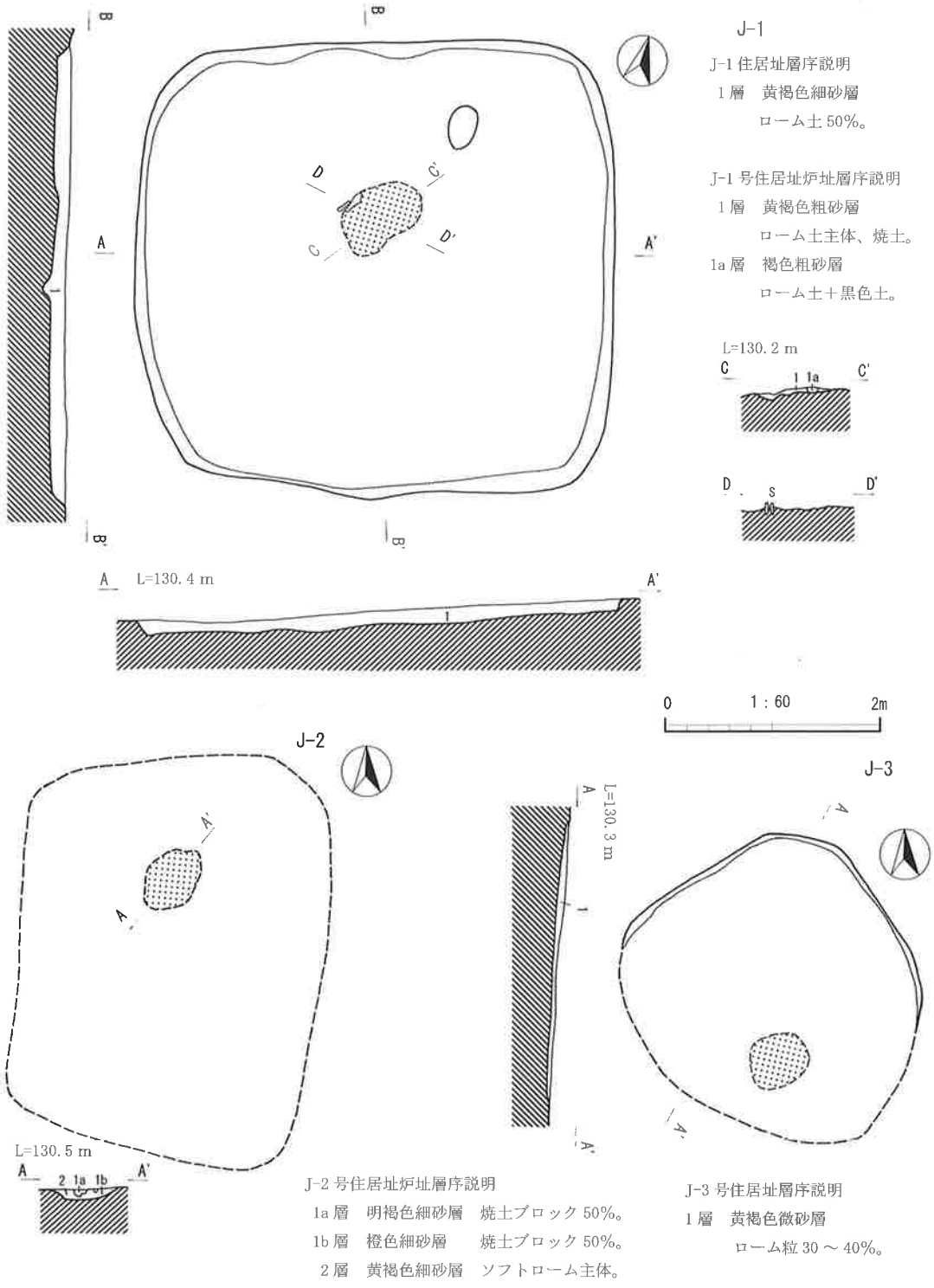
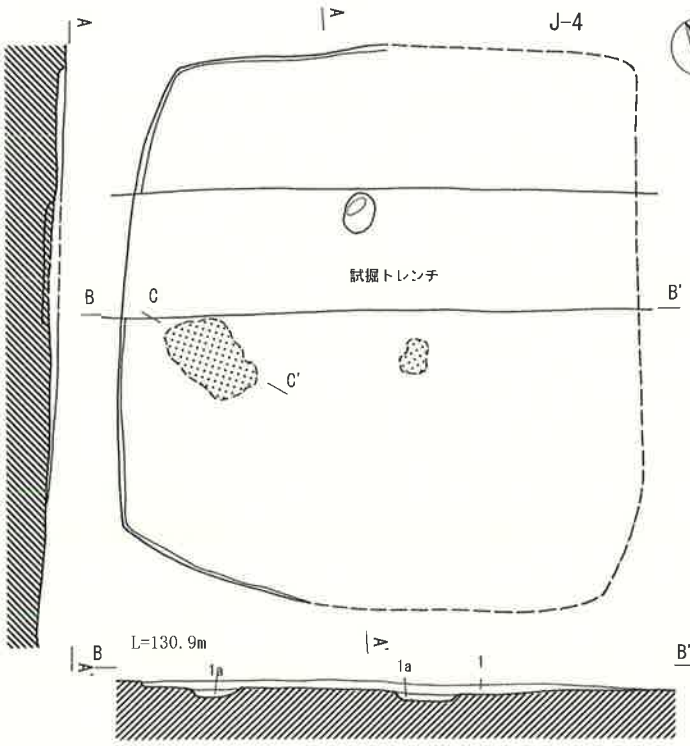


Fig.　16　A区Ｊ－１～３号住居址



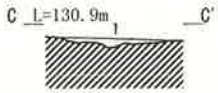
J-4 号住居址層序説明

1 層　褐色微砂層

1a 層　黄褐色微砂層

J-4 号住居址炉址層序説明

1 層　明褐色微砂層



JD-7 号縄文土坑層序説明

1 層　褐色微砂層

2 層　明黄褐色微砂層

JD-8 号縄文土坑・
JT-2 縄文竪穴状遺構層序説明

1 層　黒褐色微砂層

1a 層　明黄褐色細砂層

2a 層　暗黄褐色微砂層

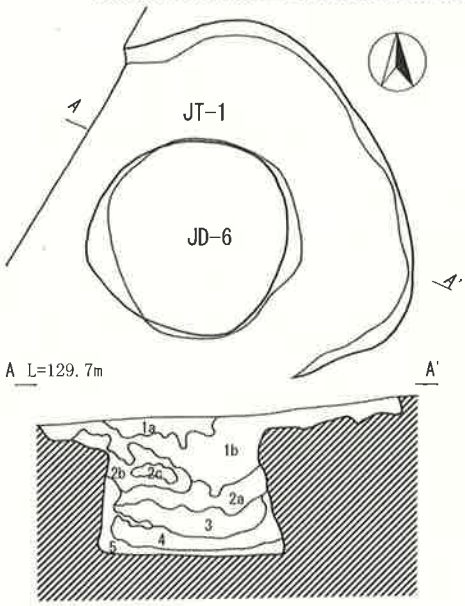
2b 層　褐色微砂層

3 層　明黄褐色微砂層

3a 層　明黄褐色微砂層

4 層　黄褐色微砂層

0　1:60　2m



JD-6 号縄文土坑・JT-1 縄文竪穴状遺構層序説明

1a 層　黄褐色細砂層　　2c 層　黄褐色微砂層

1b 層　明黄褐色細砂層　　3 層　にぶい黄褐色細砂層

2a 層　明褐色微砂層　　4 層　明黄褐色細砂層

2b 層　黄褐色微砂層　　5 層　明黄褐色細砂層

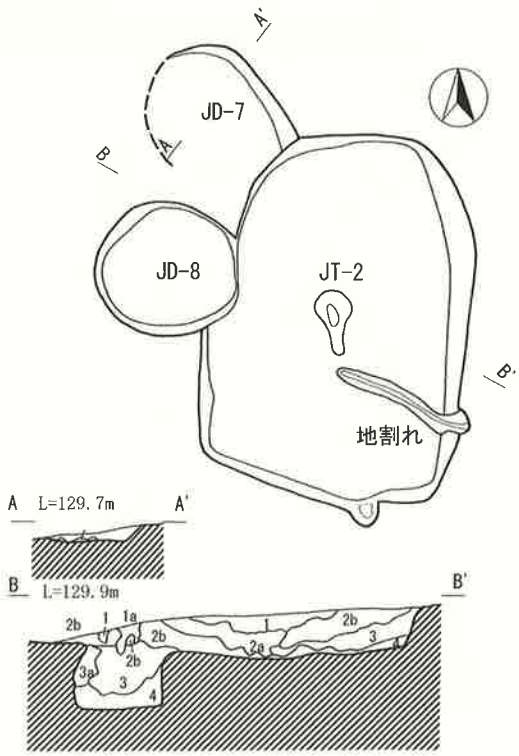
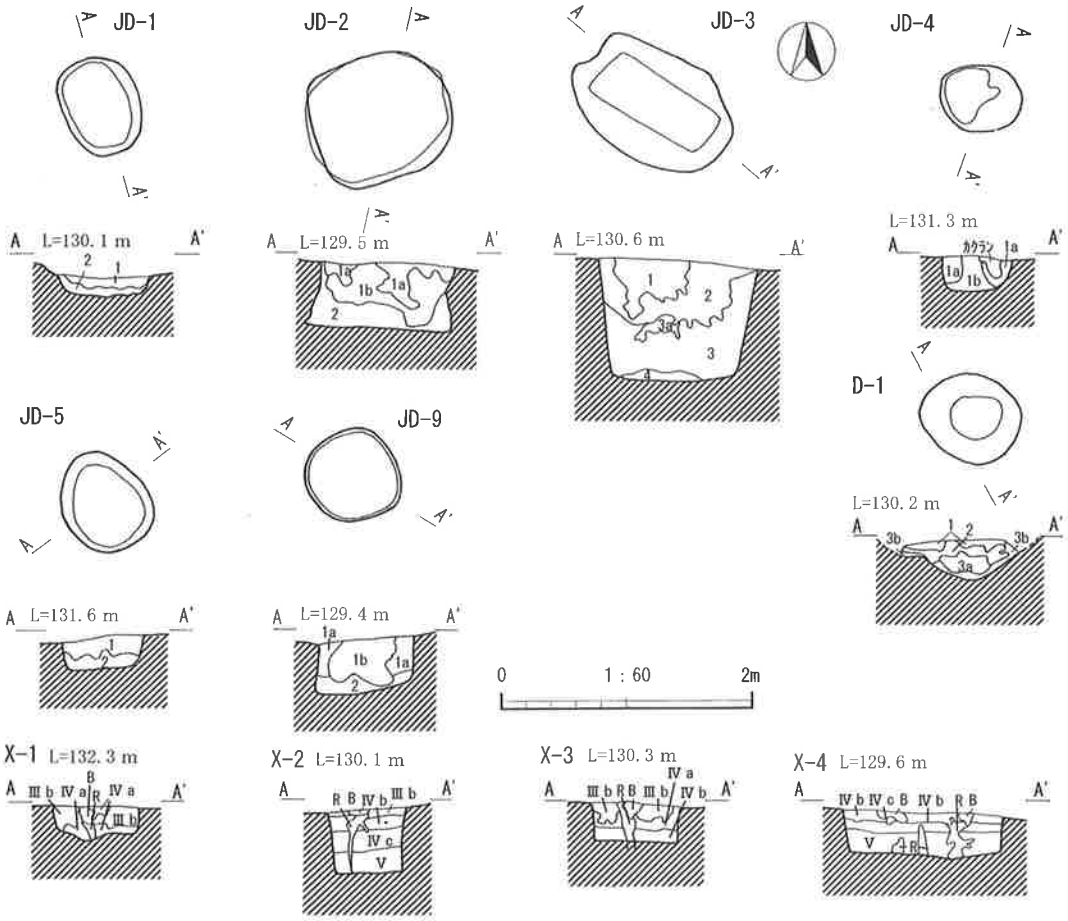


Fig.　17　A区Ｊ－４、ＪＴ－１・２、縄文土坑



JD-1 号縄文土坑層序説明

1 層　暗褐色細砂層　炭化物をかなり含む。

2 層　黄褐色細砂層

JD-2 号縄文土坑層序説明

1a 層　黄褐色微砂層　ローム土 30%～ 40%。

1b 層　明褐色微砂層　ローム土と黒色土の互層。

JD-3 号縄文土坑層序説明

1 層　黒色微砂層　ローム粒子 7 ～ 10%。

2 層　褐色微砂層　ローム粒子 15 ～ 20%。

3 層　黄褐色微砂層　ローム粒子 30 ～ 40%。

3a 層　明褐色微砂層　ローム粒子 60 ～ 70%。

4 層　黄橙色微砂層　ローム粒子 70%～ 80%。

JD-4 号縄文土坑層序説明

1a 層　黄褐色微砂層　ローム層 30%～ 40%。

1b 層　明褐色微砂層　ローム土と黒色土の互層。

JD-5 号縄文土坑層序説明

1 層　褐色多砂層　ローム粒子 15 ～ 30%

2 層　褐色微砂層　ローム粒子 20 ～ 30%

JD-9 号縄文土坑層序説明

1a 層　黄褐色細砂層　ローム粒子 20 ～ 30%。

1b 層　褐色微砂層　ローム粒子 5 ～ 10%。

2 層　明黄褐色微砂層　ローム粒子 30 ～ 40%。

D-1 号土坑層序説明

1 層　にぶい黄褐色細砂層　表土。

2 層　黒褐色細砂層　As-C を含む黒墨。

3a 層　褐色細砂層　ローム土 50 ～ 60%。

3b 層　黄褐色細砂層　ローム土主体。

X-1 ～ 4 層序説明

B 層　黒色土

R 層　ローム土

Fig.　18　A 区縄文土坑、土坑、地割れ

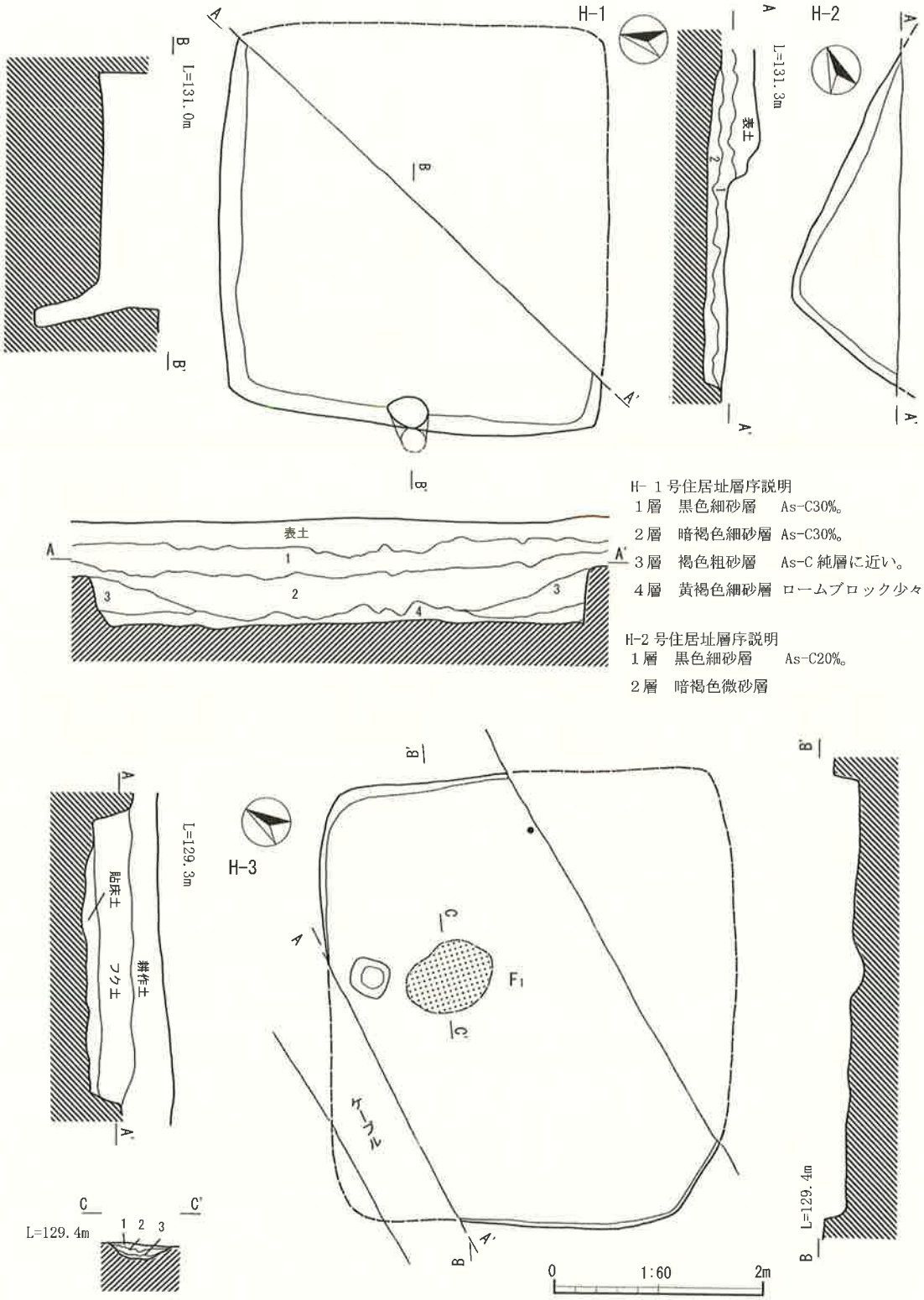


Fig.　19　B区H－1～3号住居址

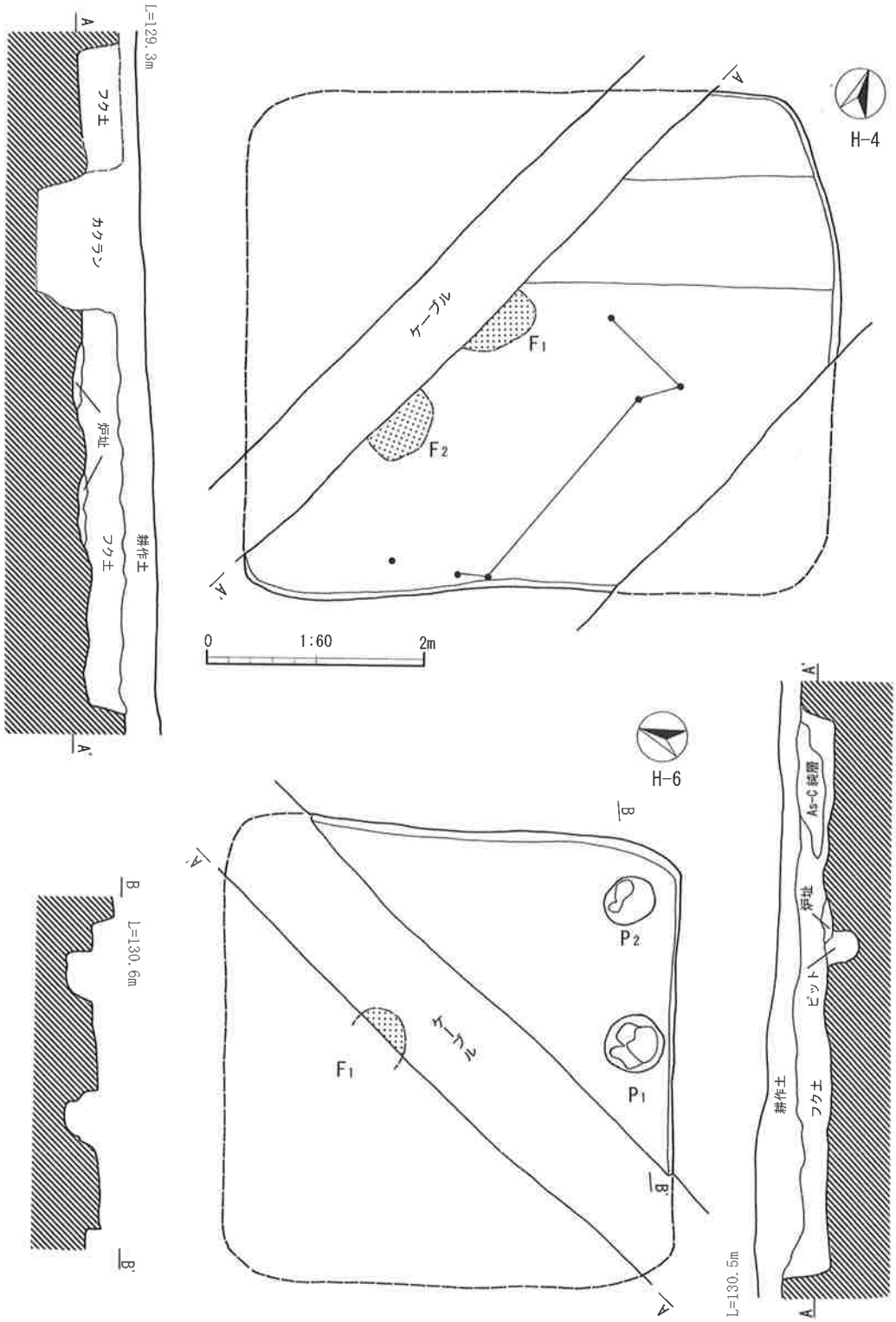


Fig. 20 B区H－4・6号住居址

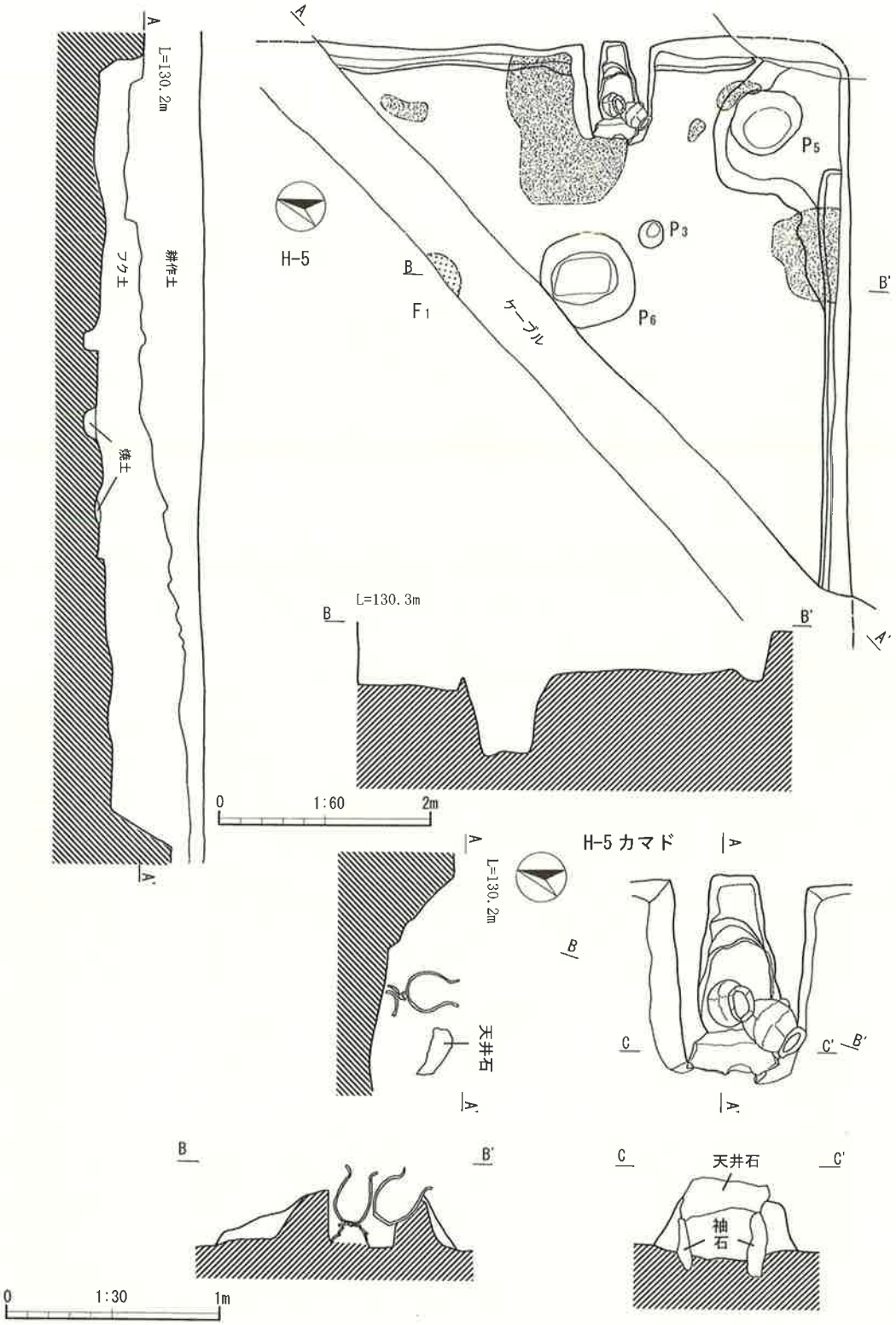
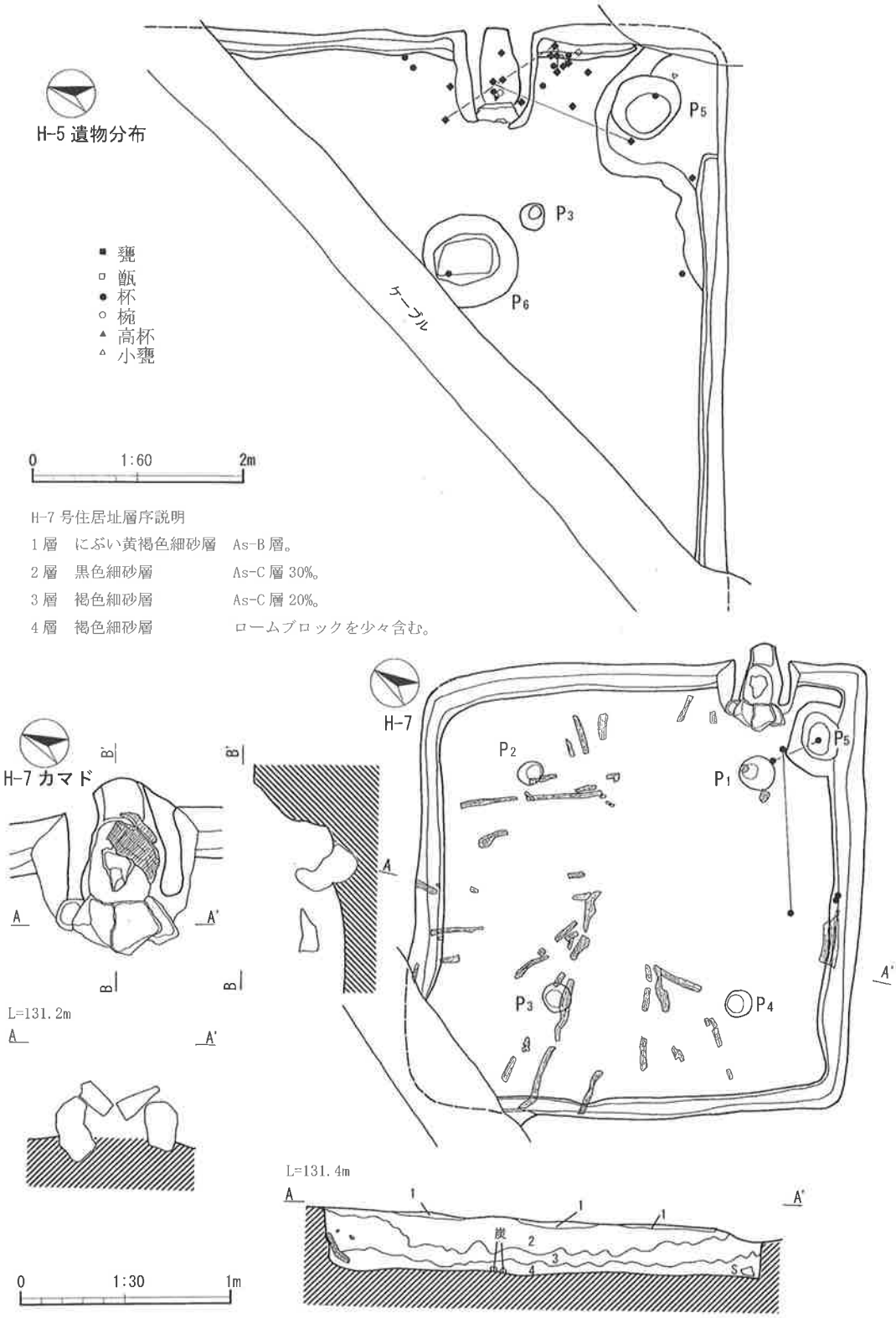


Fig. 21 B区H－5号住居址



H-7 号住居址層序説明

1 層	にぶい黄褐色細砂層	As-B 層。
2 層	黒色細砂層	As-C 層 30%。
3 層	褐色細砂層	As-C 層 20%。
4 層	褐色細砂層	ロームブロックを少々含む。

Fig. 22 B区H－5・7号住居址

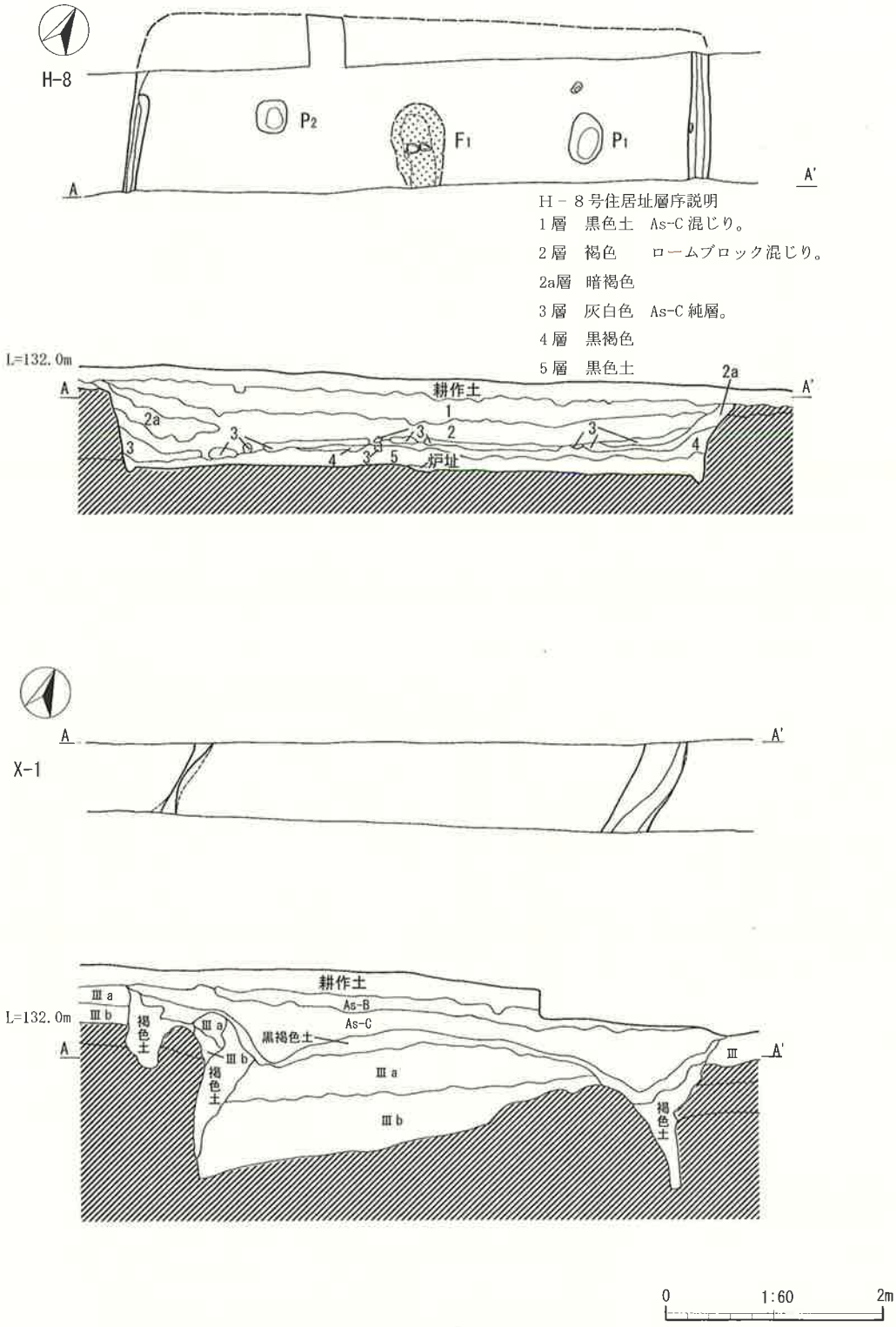


Fig.　23　Ｂ区Ｈ－８・Ｘ－１号地割れ

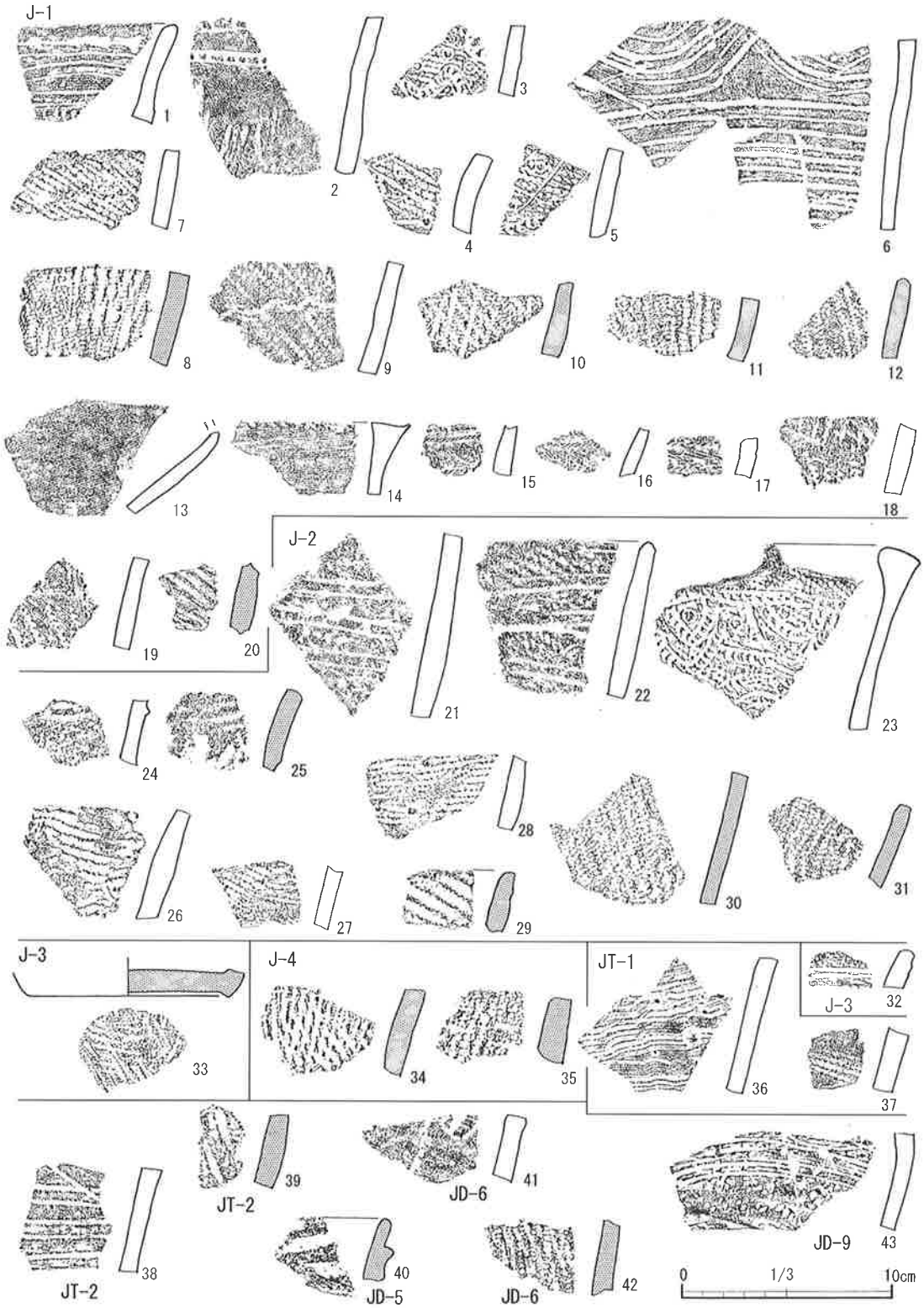


Fig. 24 A区縄文時代の土器（1）

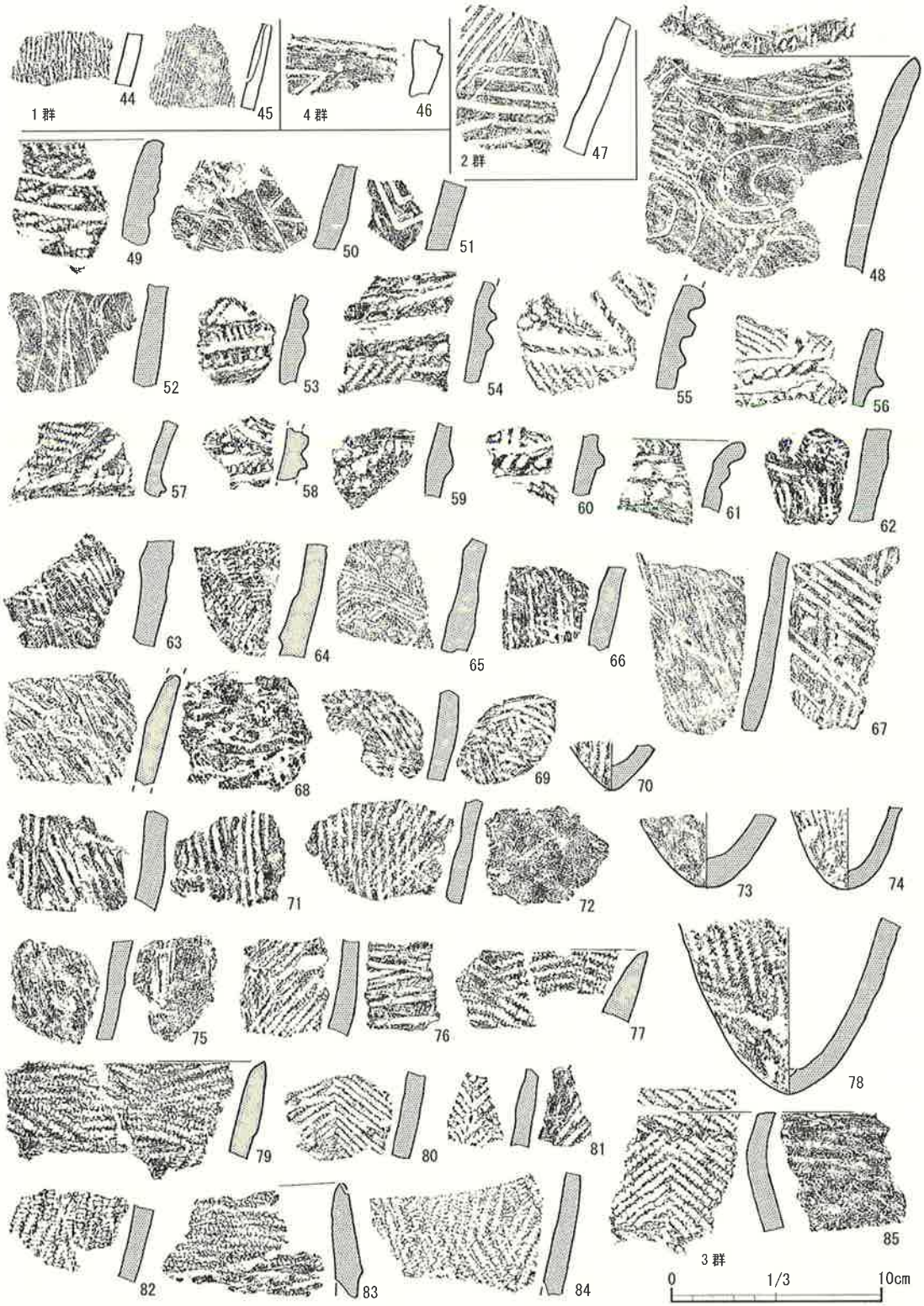


Fig. 25 A区縄文時代の土器（2）

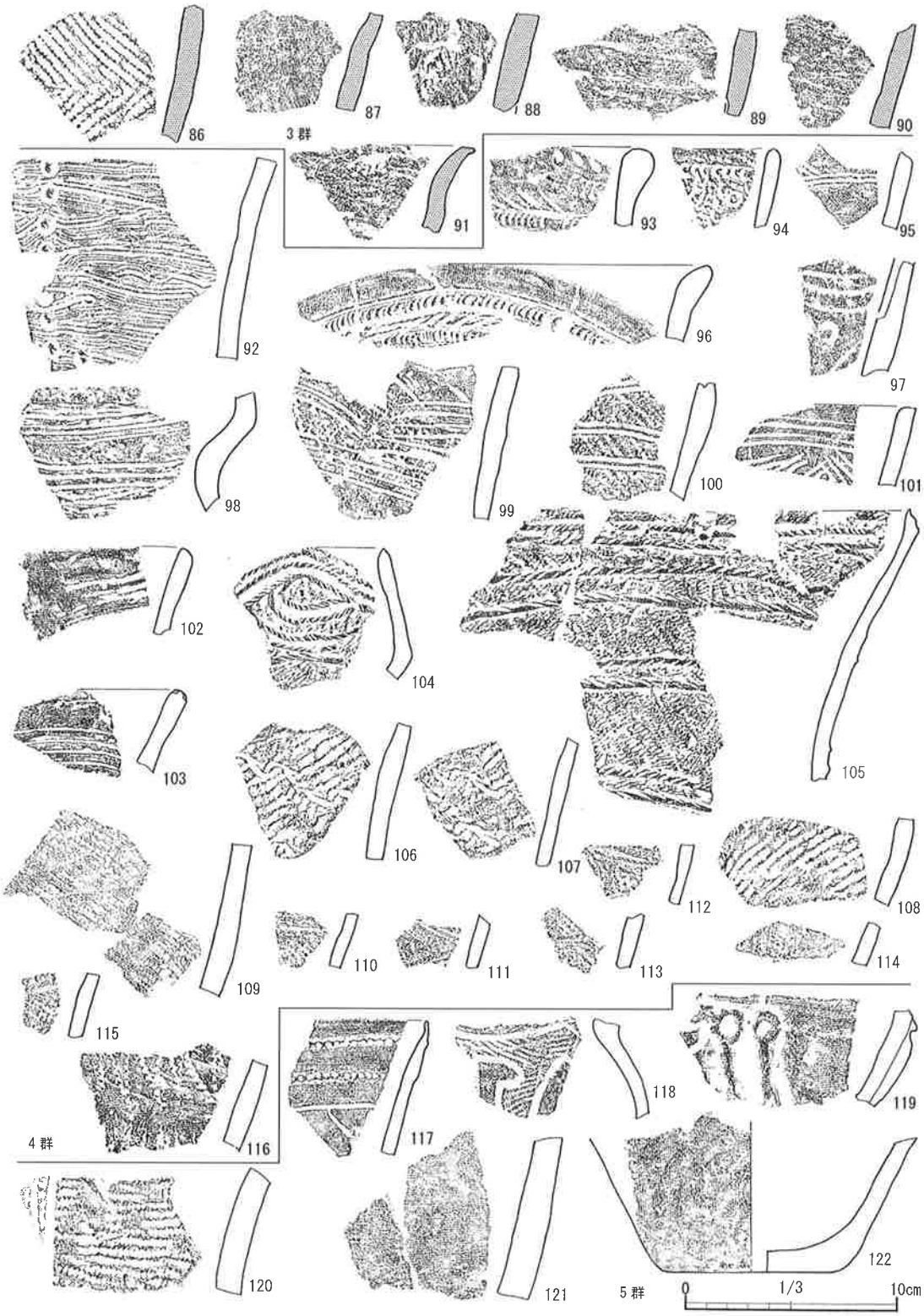


Fig. 26 A区縄文時代の土器（3）

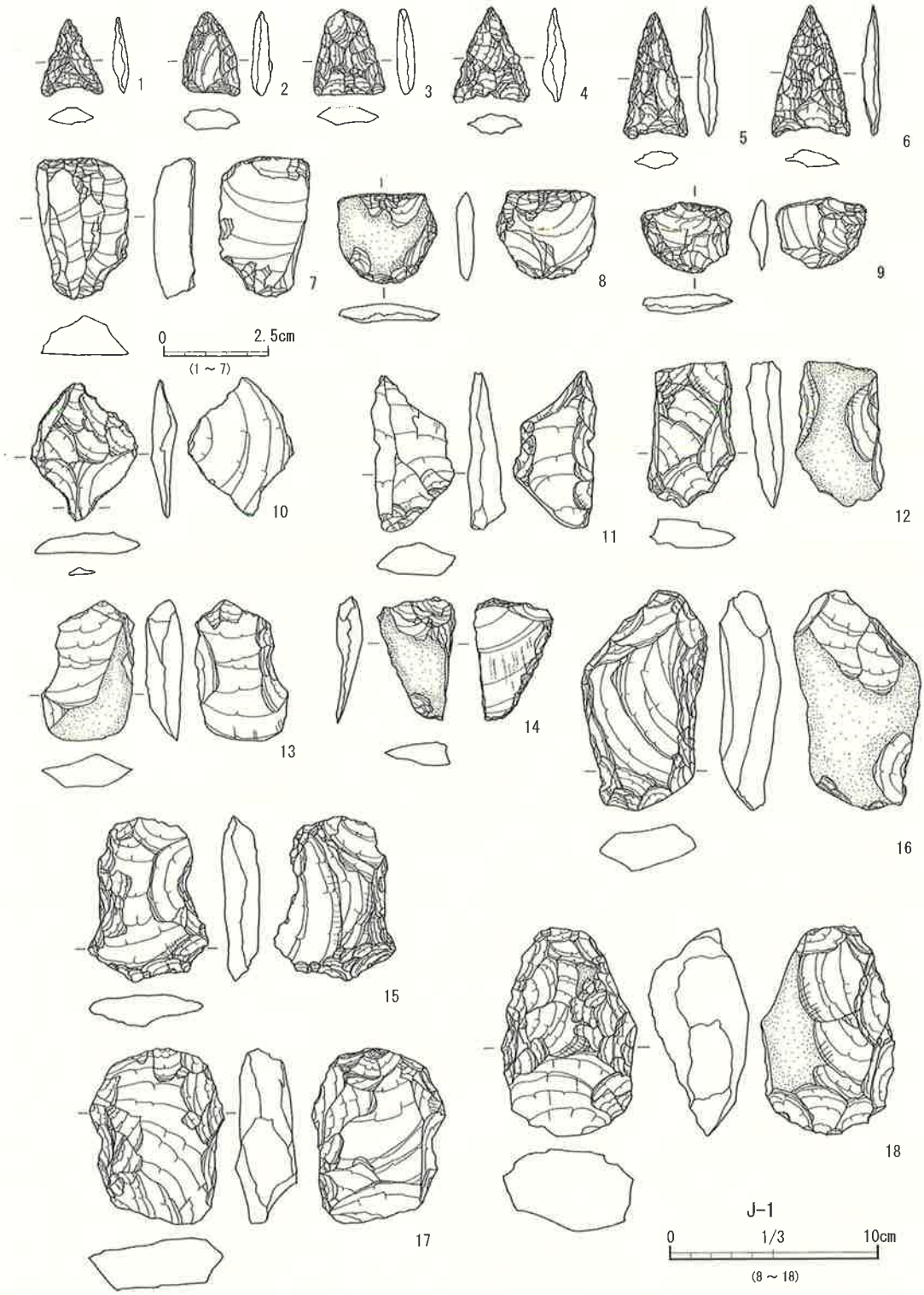


Fig. 27 A区縄文時代の石器（1）

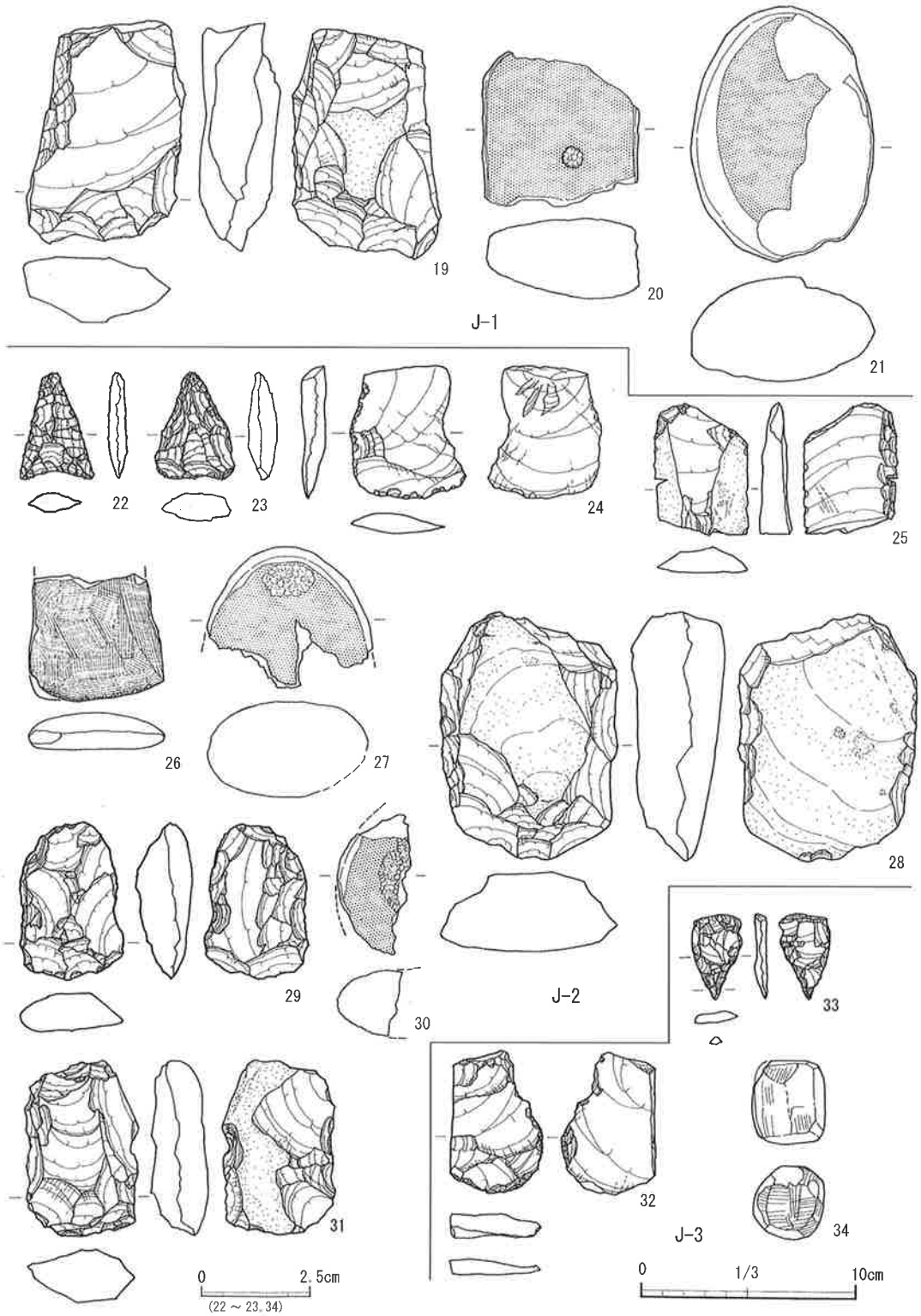


Fig. 28 A区縄文時代の石器（2）

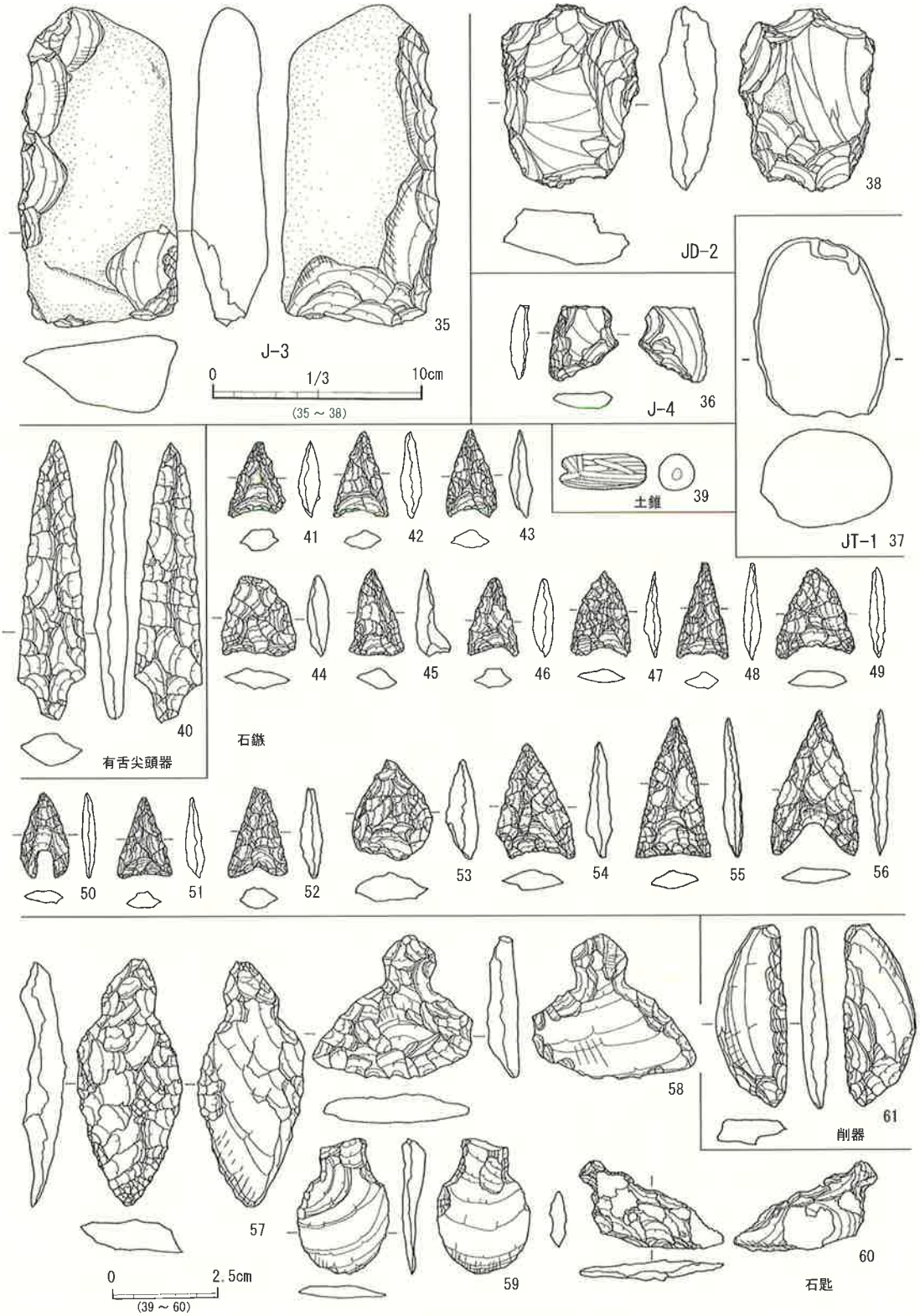


Fig. 29 A区縄文時代の石器（3）

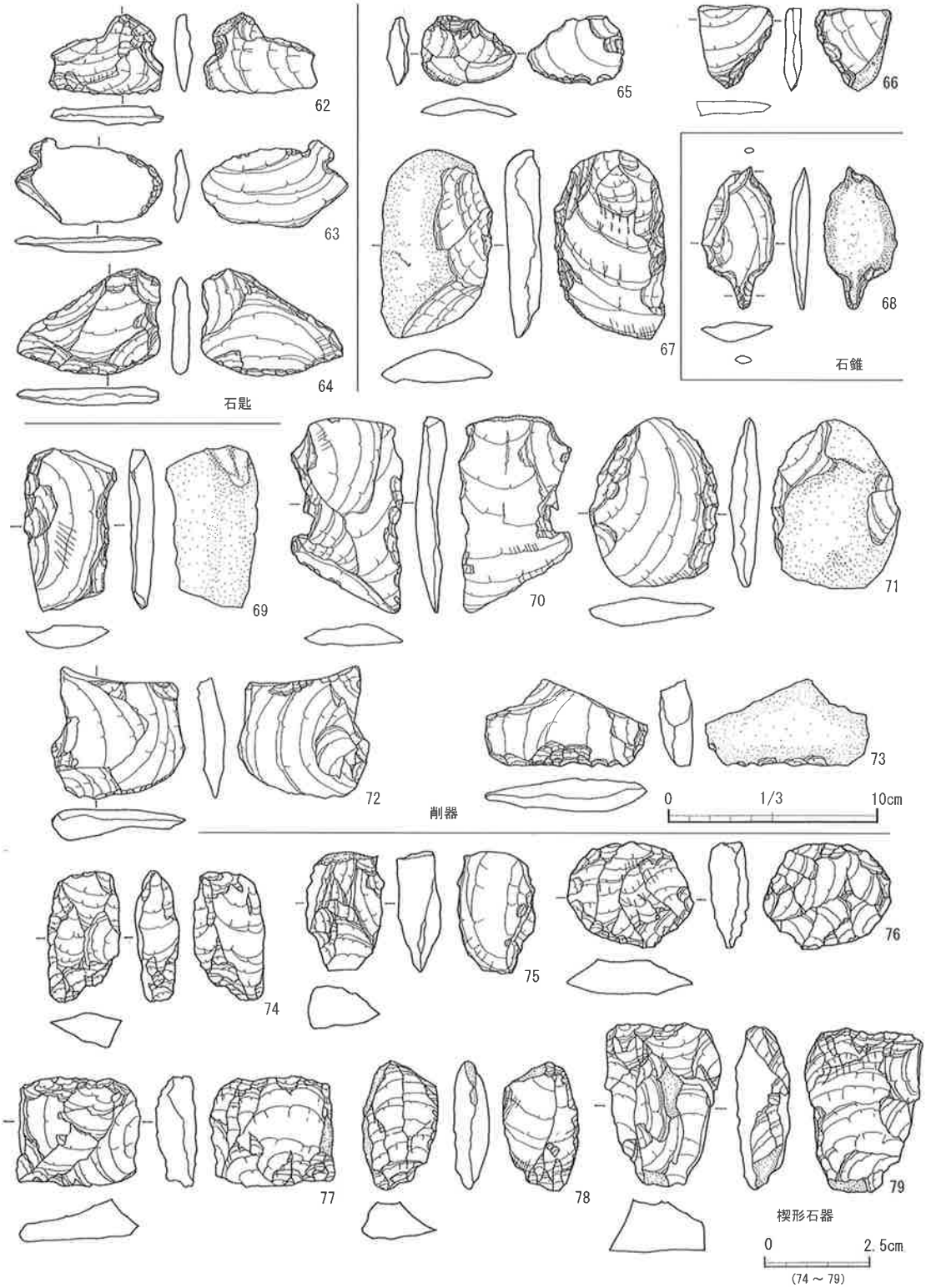


Fig. 30 A区縄文時代の石器（4）

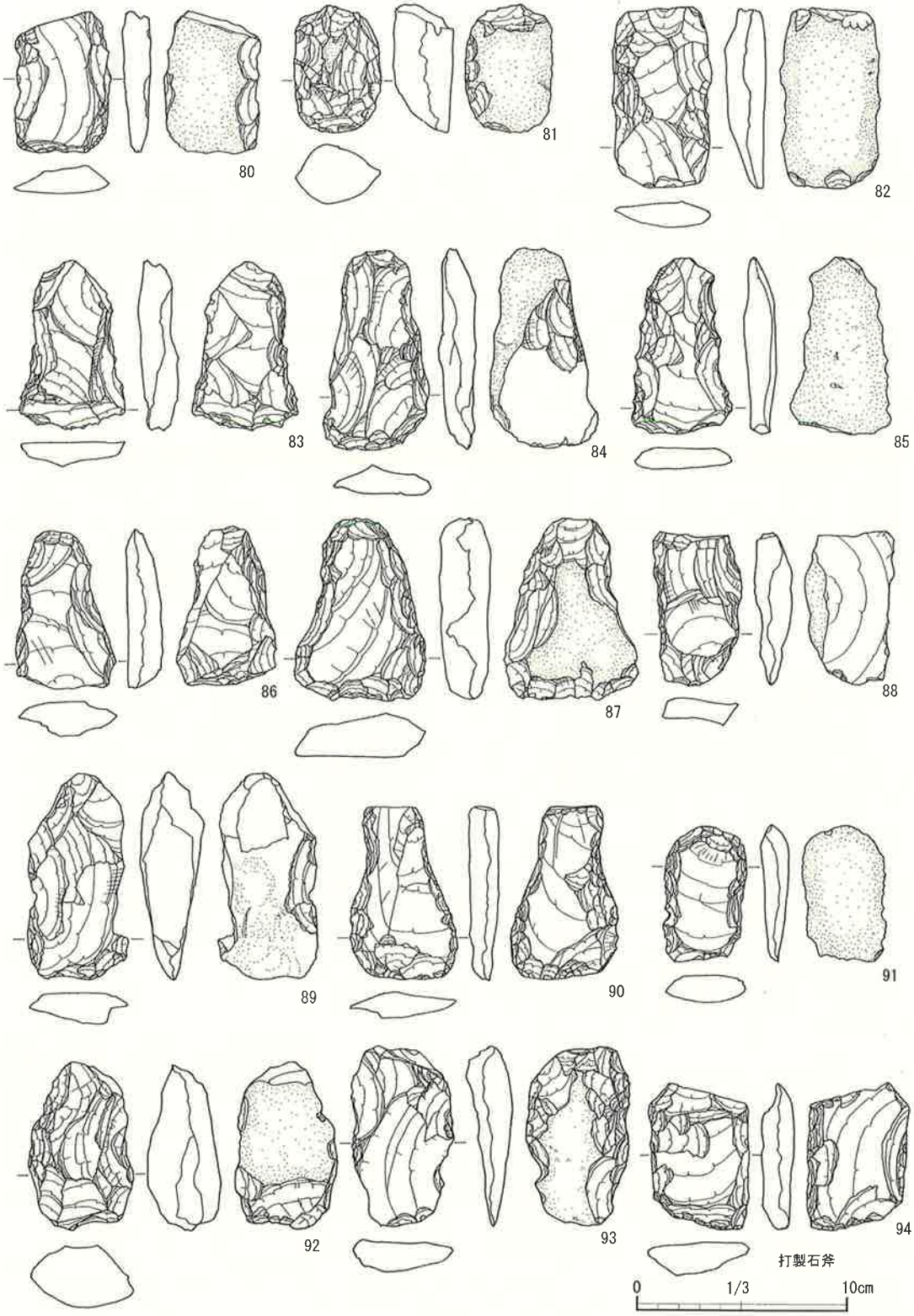


Fig. 31 A区縄文時代の石器（5）

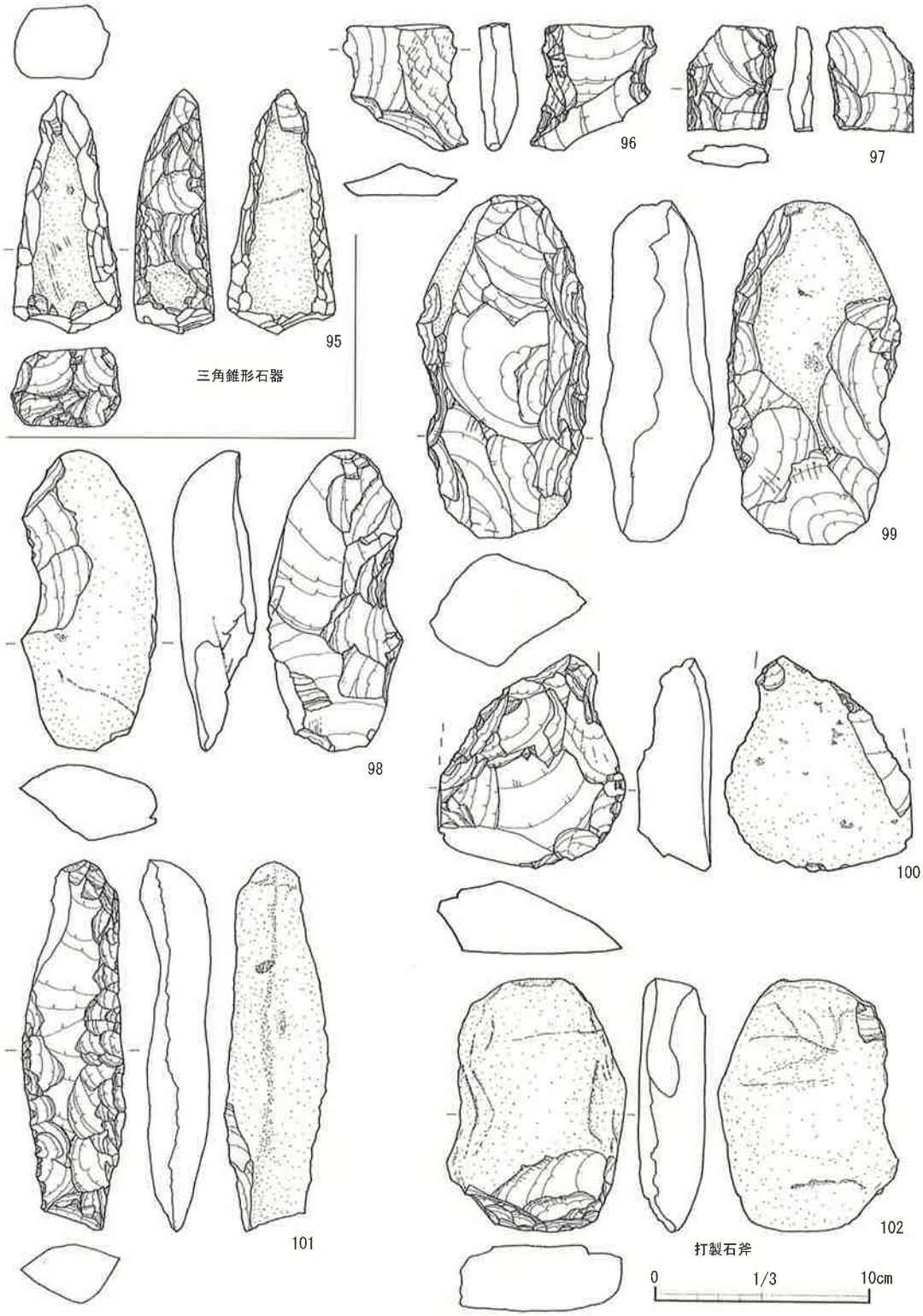


Fig. 32 A区縄文時代の石器 (6)

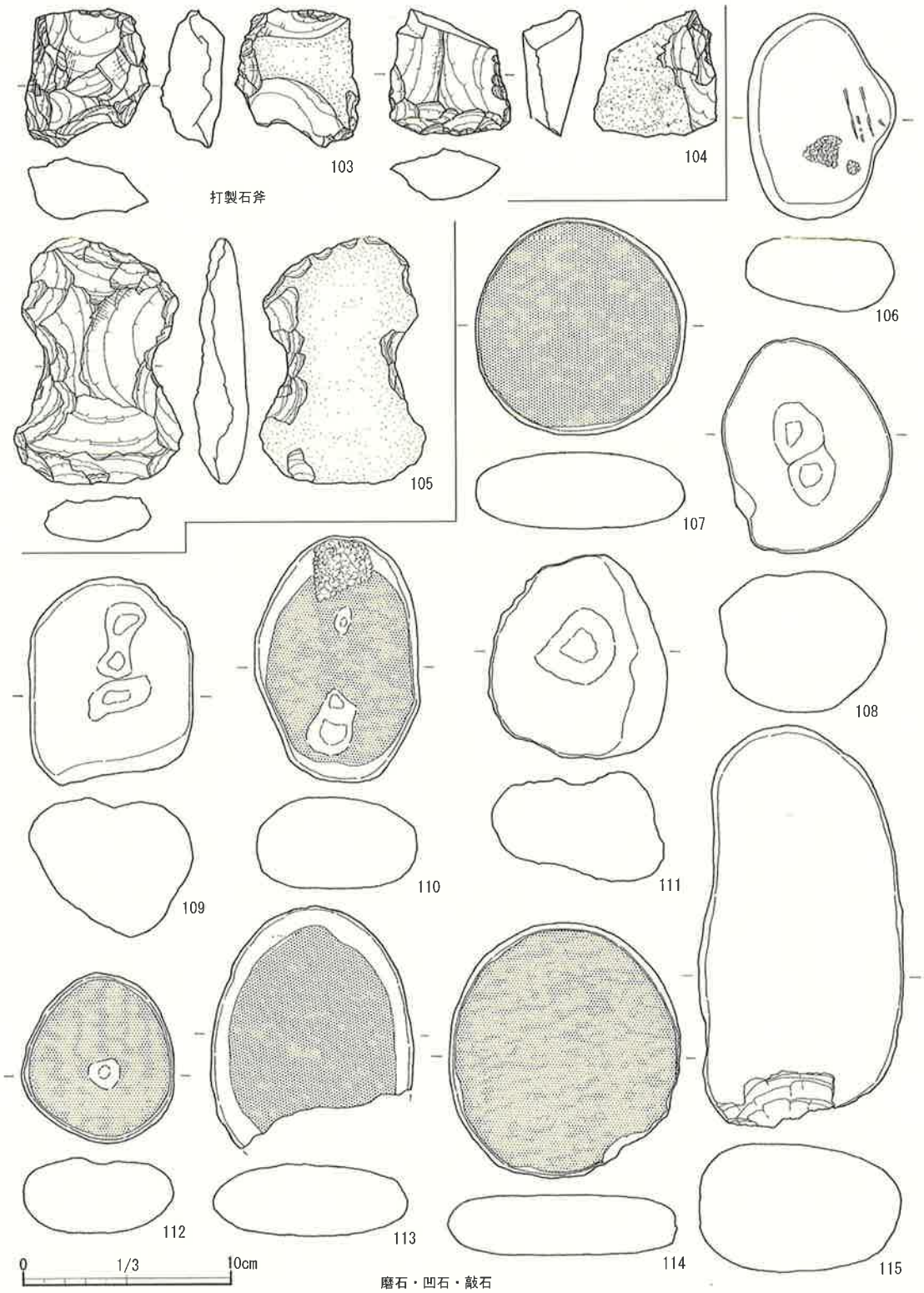


Fig. 33 A区縄文時代の石器（7）

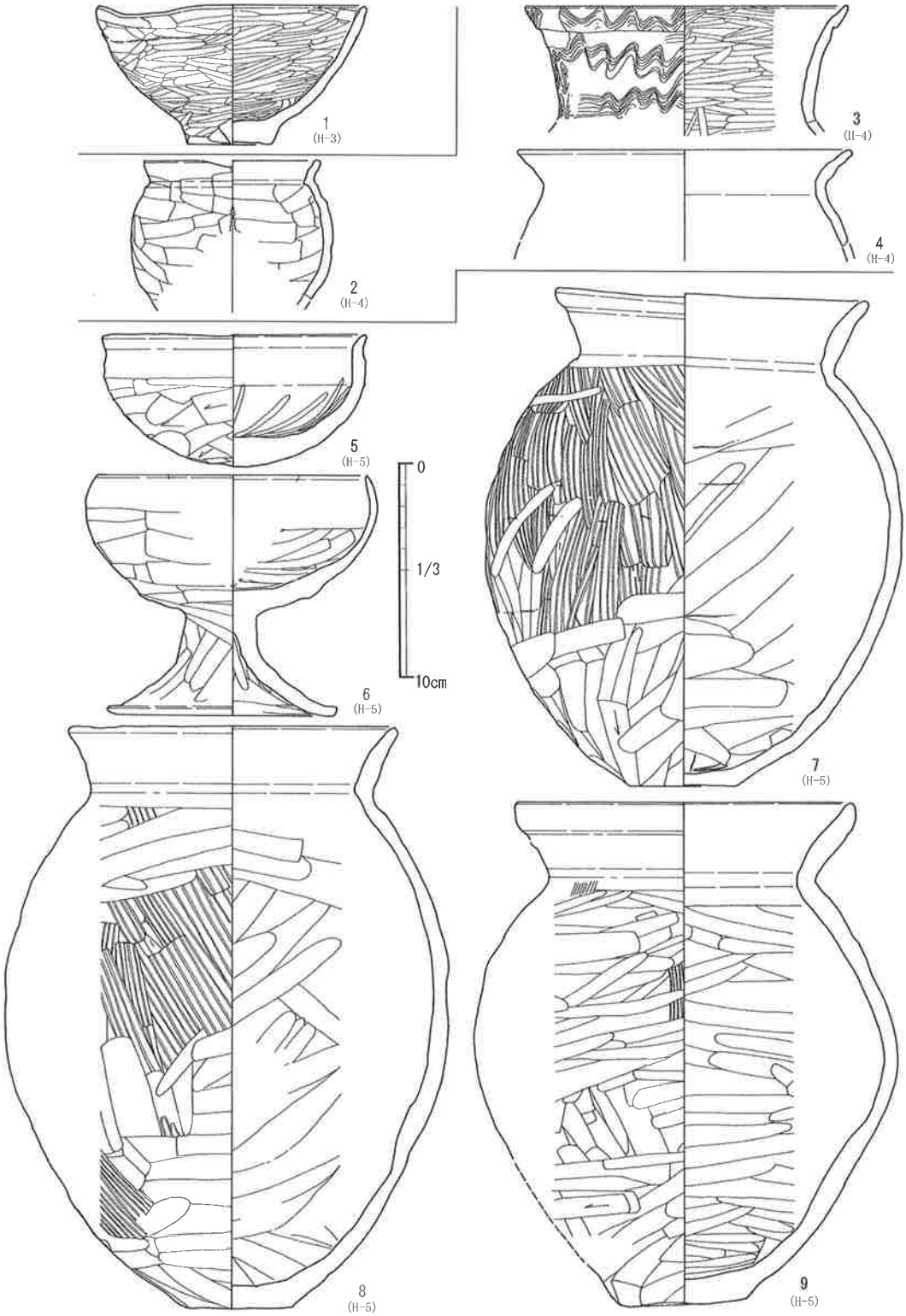


Fig. 34 B区古墳時代の土器（1）

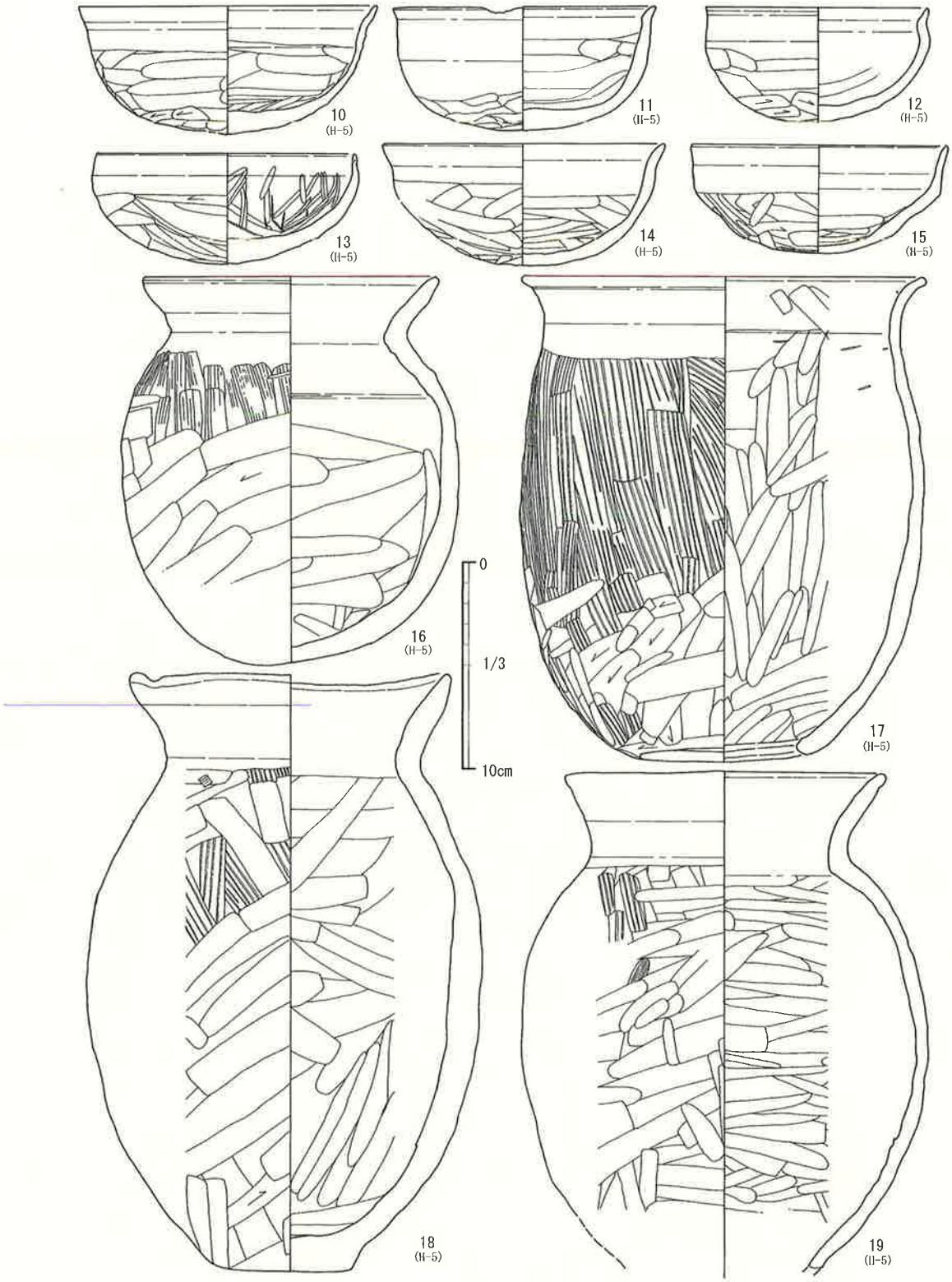


Fig. 35 B区古墳時代の土器（2）

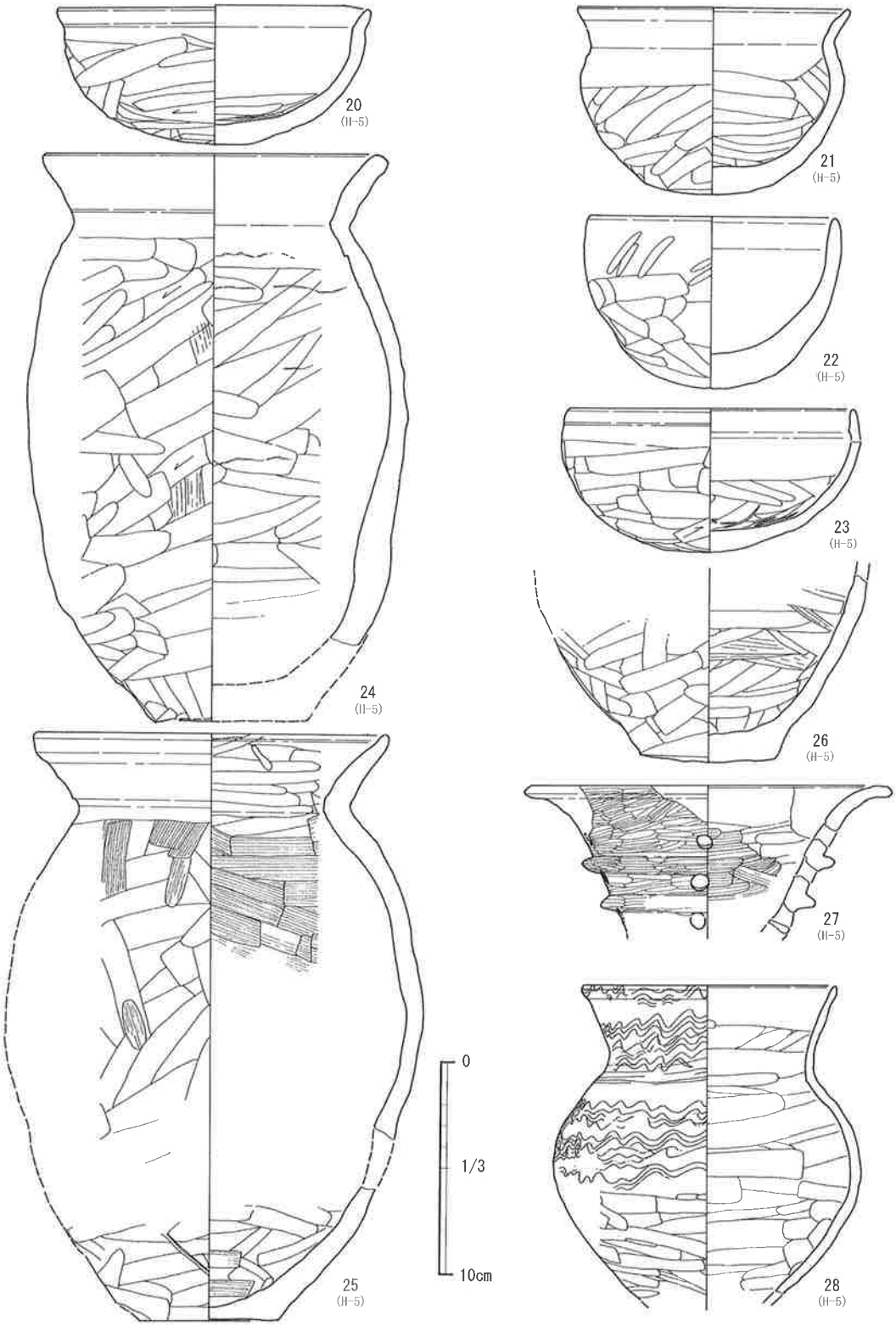


Fig. 36 B区古墳時代の土器（3）

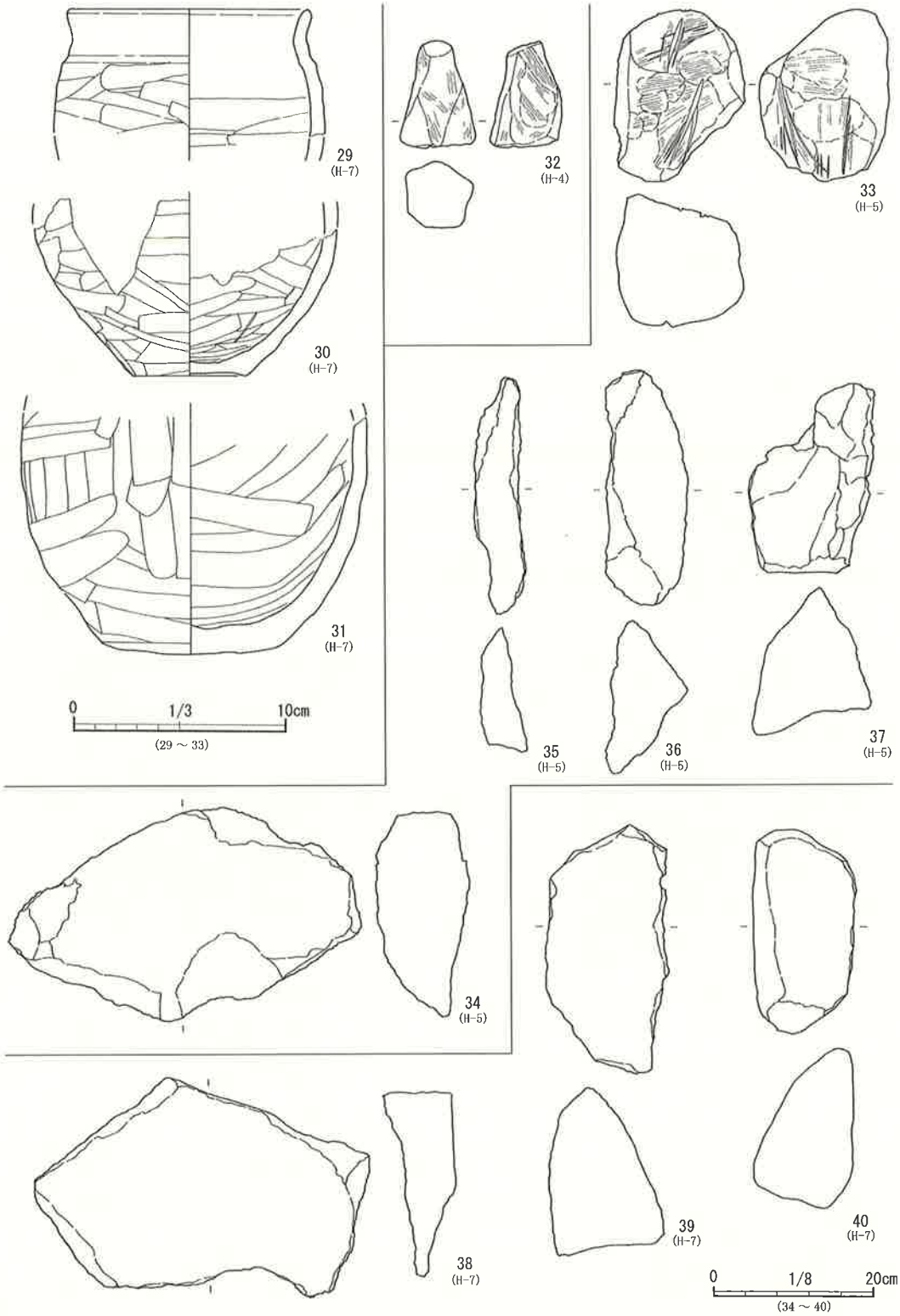


Fig. 37 B区古墳時代の遺物（4）

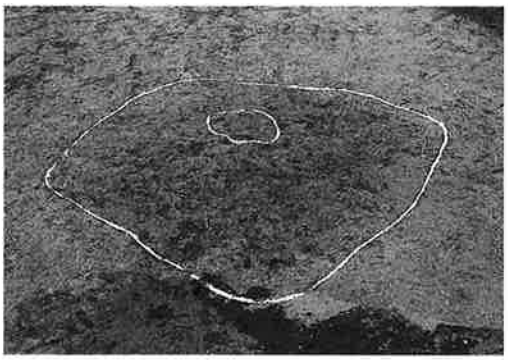
写 真 图 版

1. Ａ区縄文時代調査区全景（南西から）

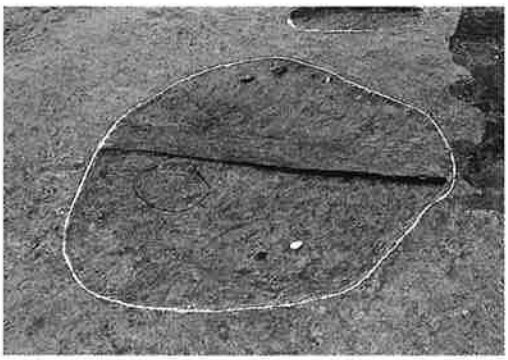
2. Ａ区Ｊ－１号住居址全景

3. Ａ区Ｊ－１号住居址の炉

4. Ａ区Ｊ－１号住居址の炉に使用された礫



5. Ａ区Ｊ－２号住居址全景



6. Ａ区Ｊ－３号住居址全景

7. Ａ区Ｊ－４号住居址検出状況

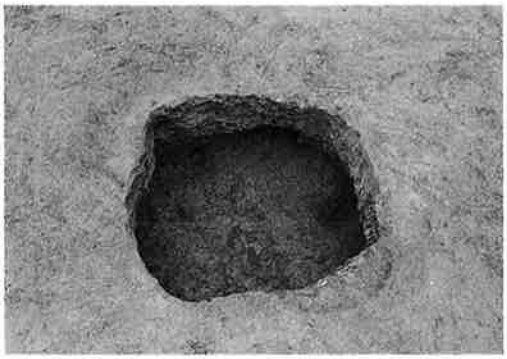
8. Ａ区Ｊ－４号住居址全景

1. Ａ区ＪＴ－１・ＪＤ－６全景（南西から）

2. Ａ区ＪＴ－２、ＪＤ－７・８全景

3. Ａ区ＪＴ－２号竪穴状遺構全景（西から）

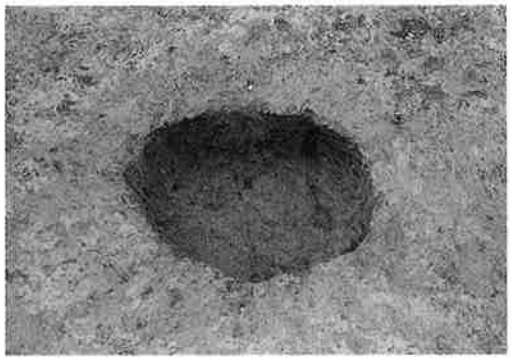
4. Ａ区ＪＤ－１号土坑全景



5. Ａ区ＪＤ－２号土坑全景

6. Ａ区ＪＤ－３号土坑全景

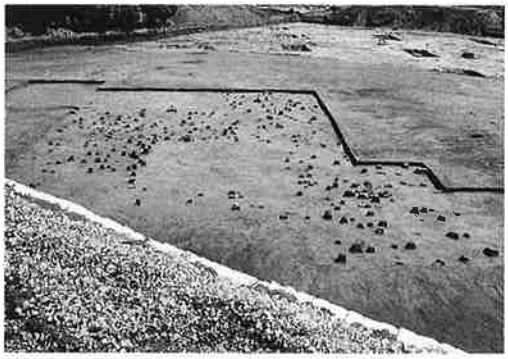
7. Ａ区ＪＤ－４号土坑全景



8. Ａ区ＪＤ－５号土坑全景

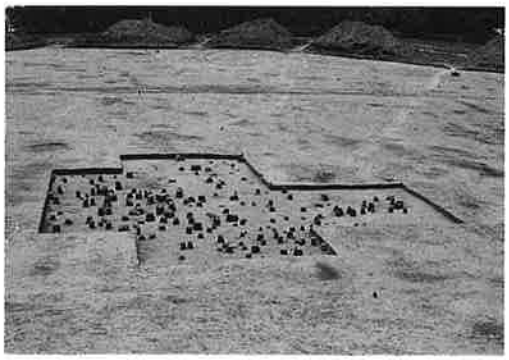
1. A区JD－8号土坑全景

2. A区D－1号土坑全景



3. A区縄文時代包含層

4. A区縄文時代包含層



5. A区縄文時代包含層

6. A区縄文時代包含層

7. A区縄文時代包含層調査風景

8. A区縄文時代包含層の遺物出土状態

1. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

2. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

3. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

4. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

5. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

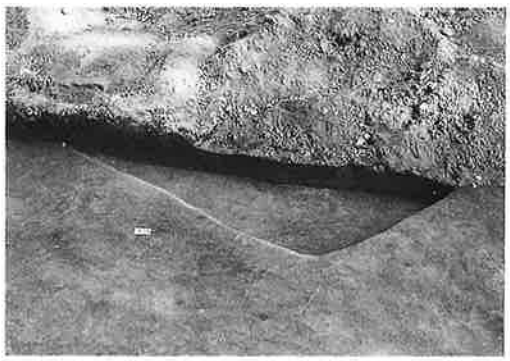
6. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

7. Ａ区縄文時代包含層の遺物出土状態

8. Ａ区縄文時代包含層・打製石斧の出土状態

1.　Ｂ区と後二子古墳、公園工事の区域

2.　Ｂ区Ｈ－１号住居址全景



3.　Ｂ区Ｈ－２号住居址全景

4.　Ｂ区Ｈ－３号住居址全景

5.　Ｂ区Ｈ－４号住居址全景

1. Ｂ区Ｈ－５号住居址全景

2. Ｂ区Ｈ－５号住居址の土器出土状態

3. Ｂ区Ｈ－５号住居址竈の土器

4. Ｂ区Ｈ－５号住居址竈の南から出土した土器

5. Ｂ区Ｈ－５号住居址竈の北から出土した土器

6. Ｂ区Ｈ－５号住居址土器出土状態

7. Ｂ区Ｈ－５号住居址土器出土状態

8. Ｂ区Ｈ－５号住居址土器出土状態

1. B区H－5号住居址竈にかけられた土器

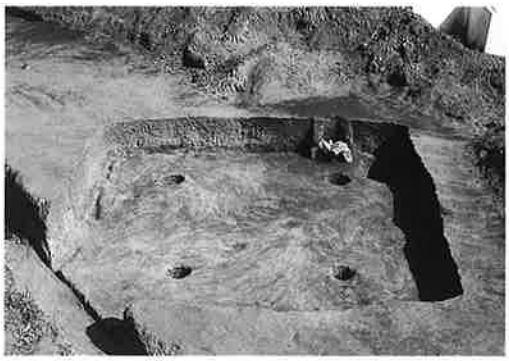
2. B区H－5号住居址竈にかけられた土器

3. B区H－5号住居址竈と支柱

4. B区H－5号住居址竈と支柱

5. B区H－5号住居址竈全景

6. B区H－6号住居址全景



7. B区H－7号住居址全景

8. B区H－7号住居址炭化材の出土状態

1. Ｂ区Ｈ－７号住居址竈全景

2. Ｂ区Ｈ－８号住居址と浅間Ｃ軽石堆積状態

3. Ｂ区Ｈ－８号住居址全景

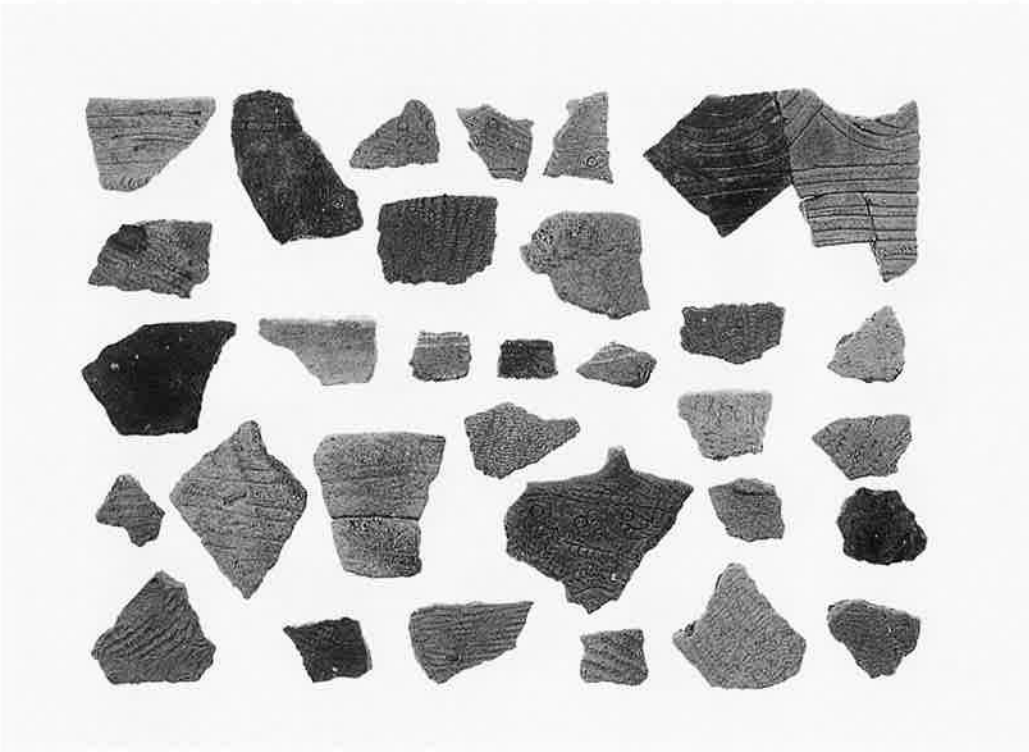
4. Ｂ区Ｈ－８号住居址の炉址

5. Ｂ区Ｘ－１号地割れ全景

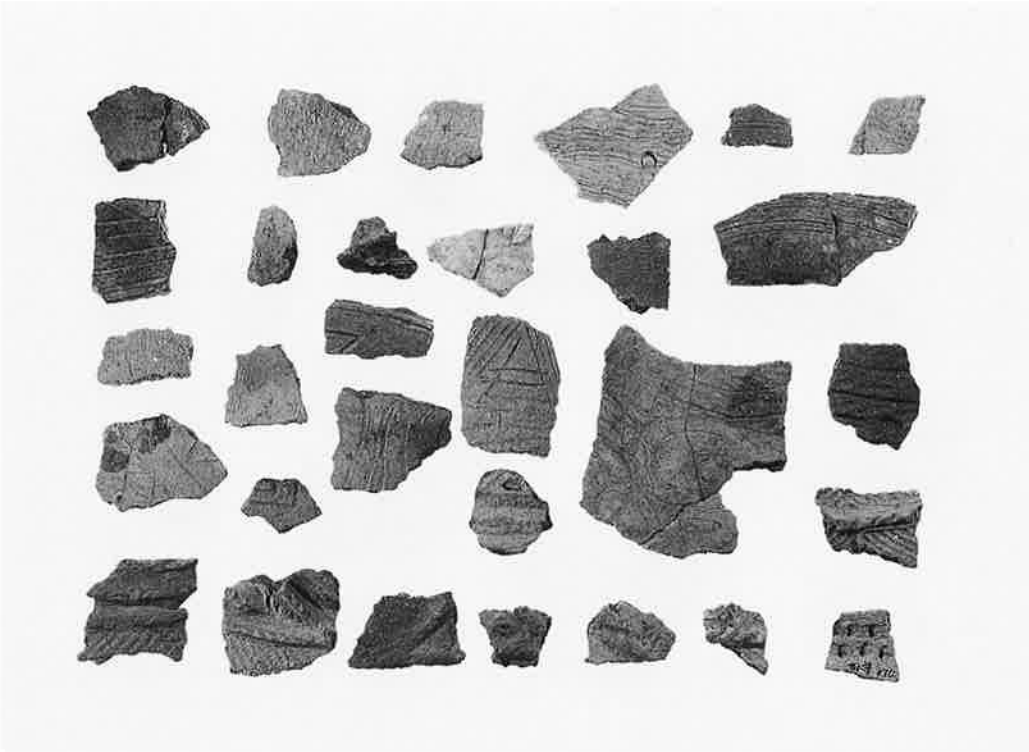
6. Ｂ区Ｘ－１号地割れの大きさ

7. Ｂ区の土層断面の土坑（東から）

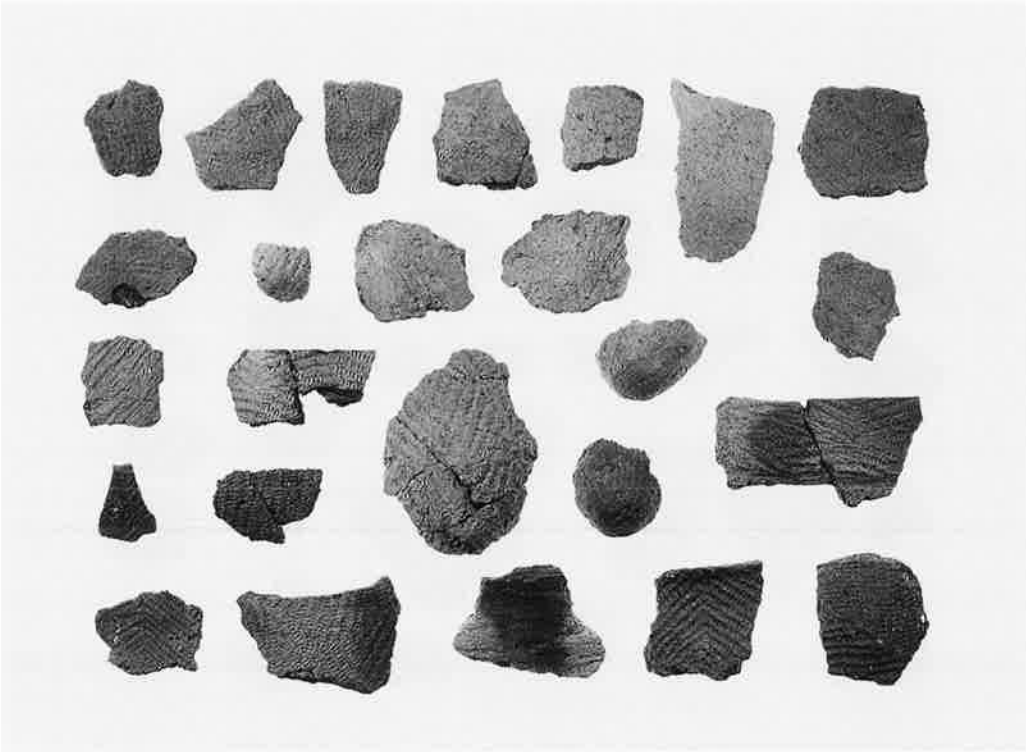
8. 調査を終えて



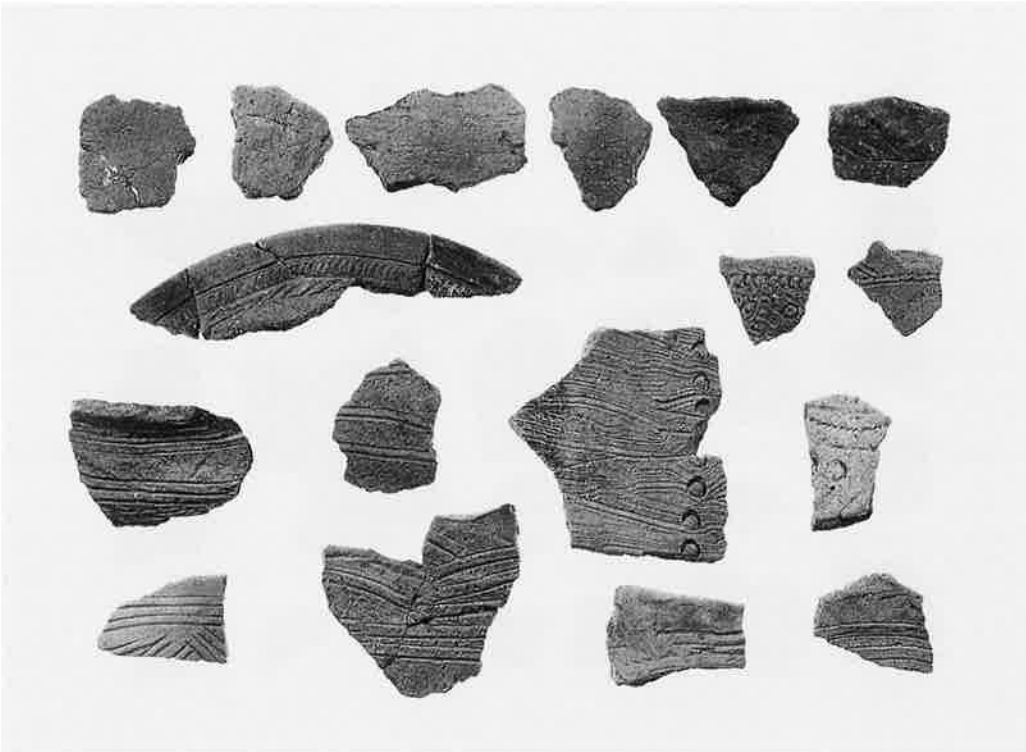
1. Ａ区Ｊ－１～４号住居址の土器



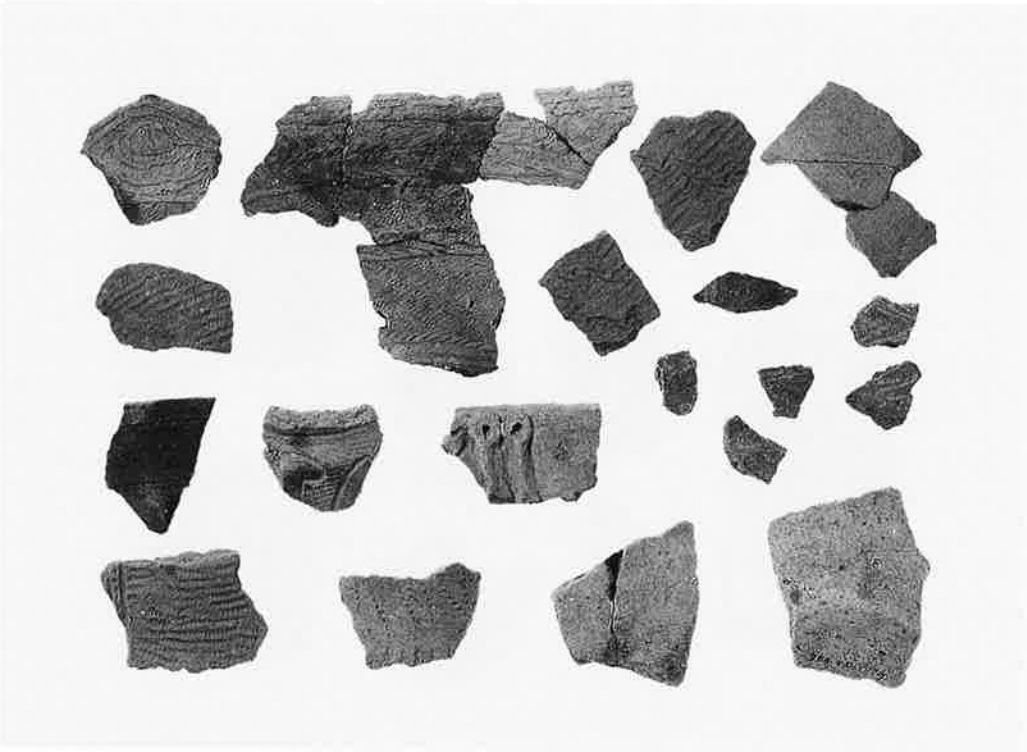
2. Ａ区ＪＴ－１・２、ＪＤ－５・６・９と縄文包含層の土器（早期～前期）



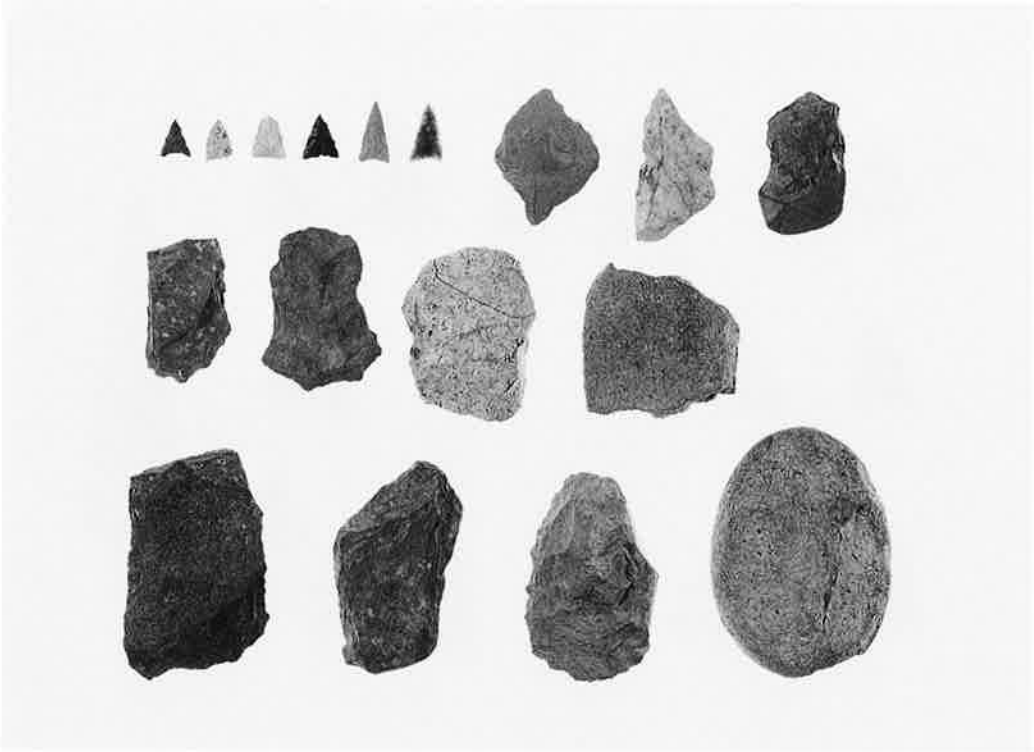
1.　Ａ区縄文包含層の土器（前期）



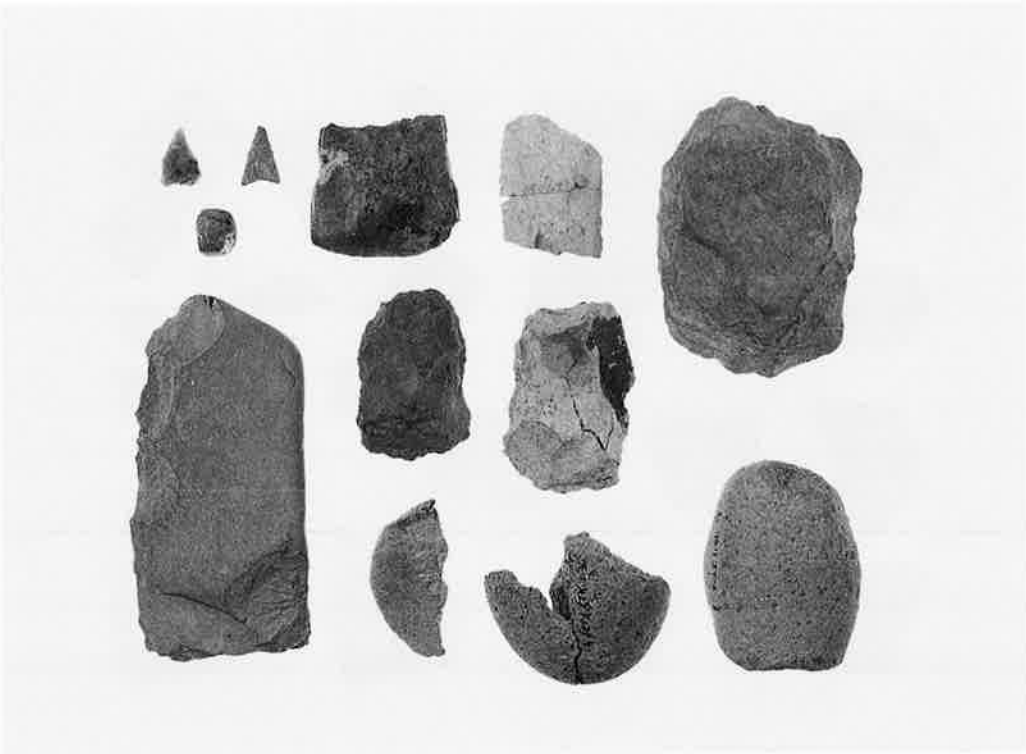
2.　Ａ区縄文包含層の土器（前期）



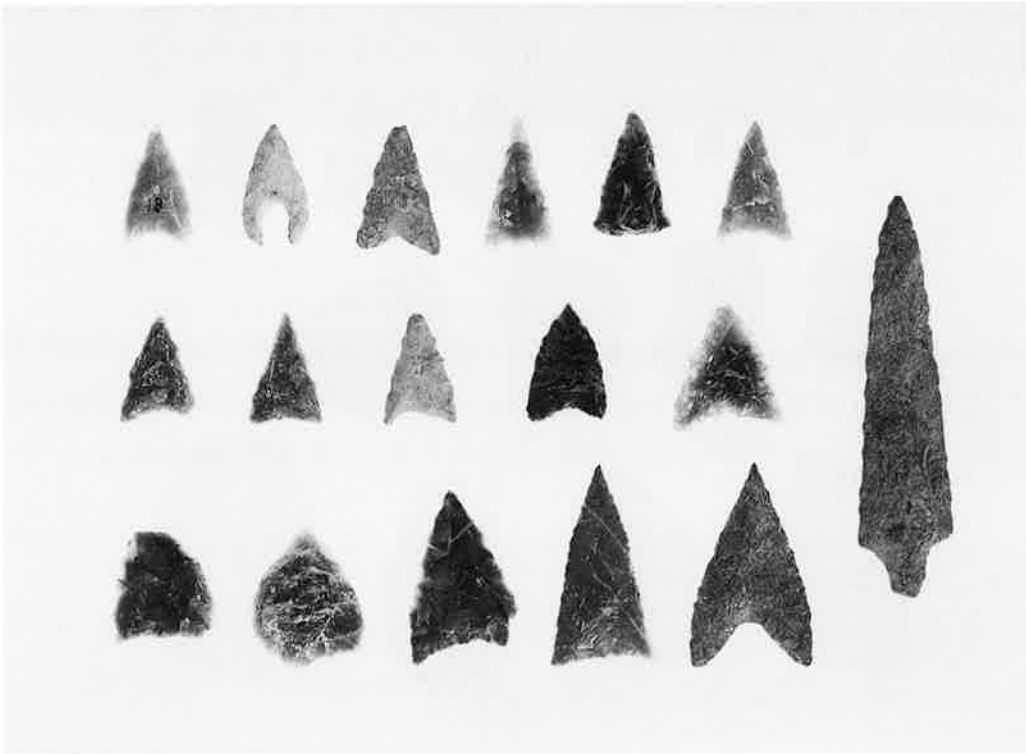
1. A区縄文包含層の土器（前期～後期）



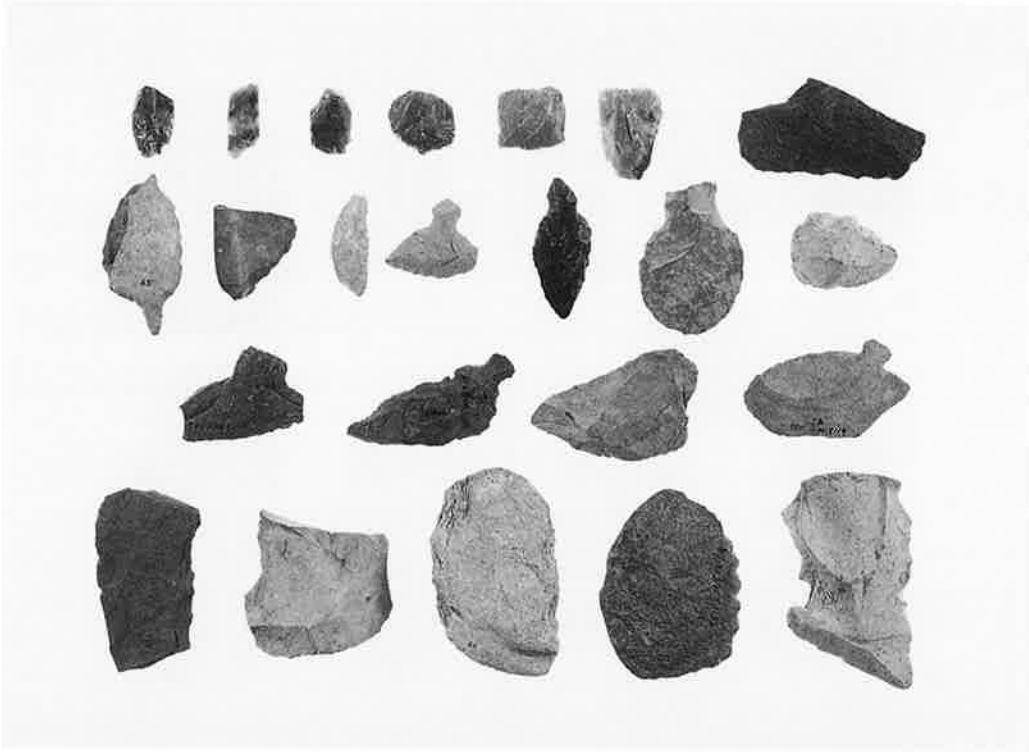
2. A区J－1号住居址の石器



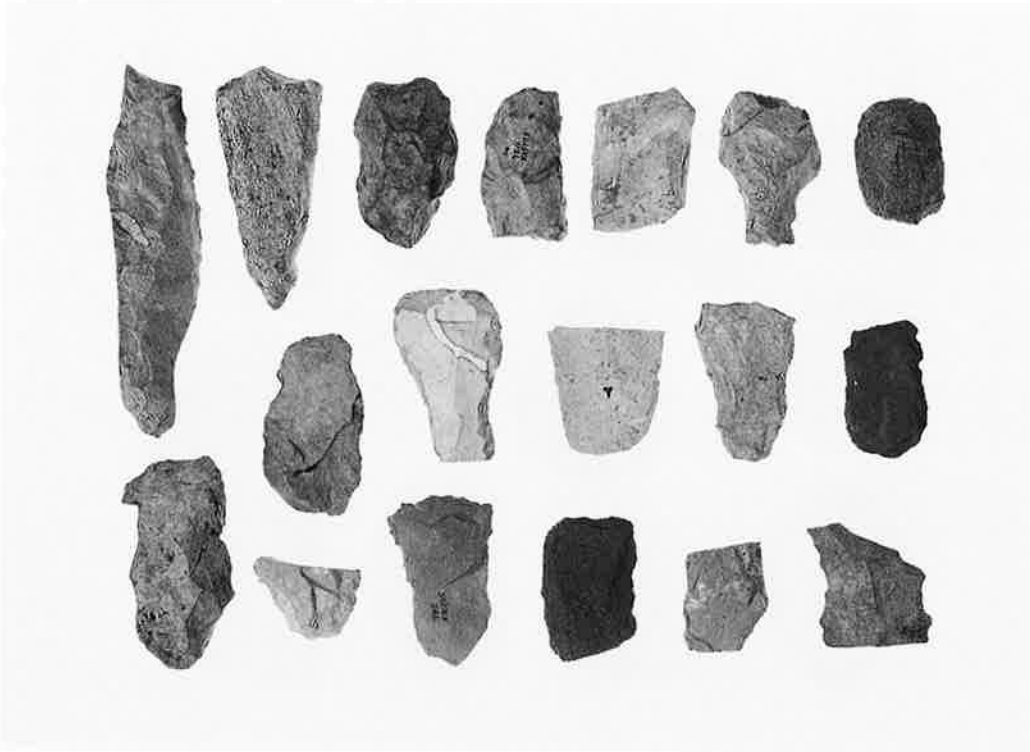
1. Ａ区Ｊ－２～４、ＪＴ－２、ＪＤ－２の石器



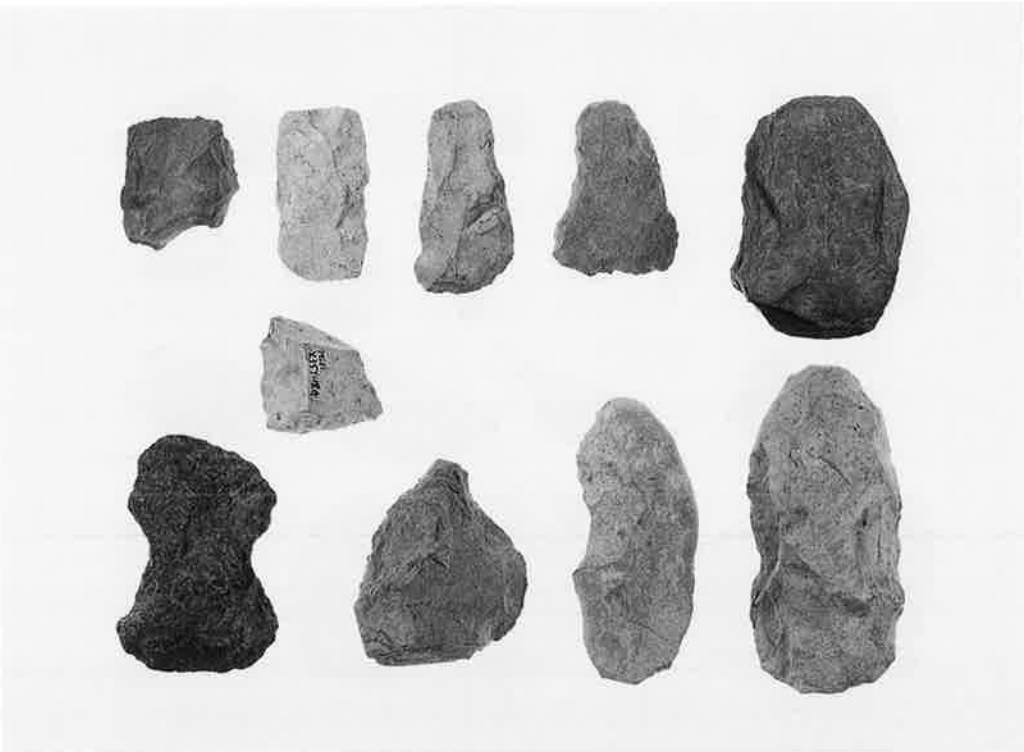
2. Ａ区縄文包含層の石器（有舌尖頭器・石鏃）



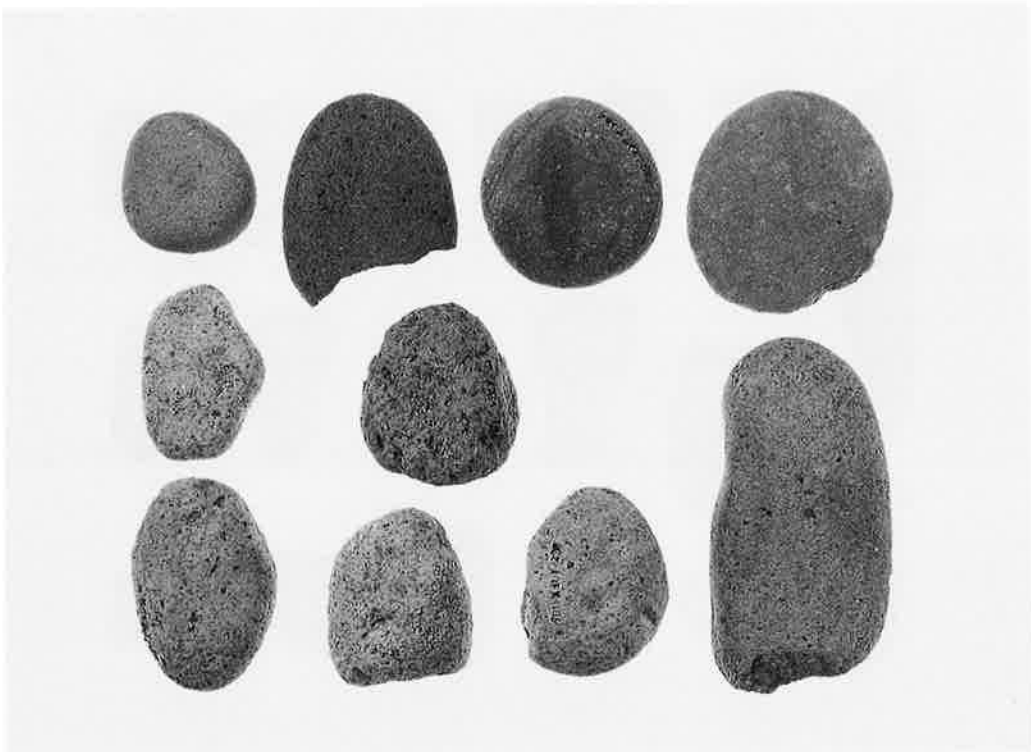
1. A区縄文包含層の石器(楔形石器・石錐・石匙・削器)



2. A区縄文包含層の石器（打製石斧）



1. Ａ区縄文包含層の石器（打製石斧）



2. Ａ区縄文包含層の石器（磨石、凹石、敲石）

1
(H－3)

15
(H－5)

19
(H－5)

3
(H－5)

2
(H－5)

6
(H－5)

12
(H－5)

17
(H－5)

21
(H－5)

14
(H－5)

18
(H－5)

16
(H－5)

8
(H－5)

24
(H－5)

7
(H－5)

B区古墳時代の土器（1）

Ｂ区古墳時代の土器（２）

上空から見たＢ区全景（上方が後二子古墳の杜）

調 査 要 項

遺 跡 名 称	内堀遺跡群内堀遺跡（うちぼりいせき）
遺 跡 記 号	7E11
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町2539番地ほか
調 査 期 間	発掘調査　1995（平成7）年4月25日～1995（平成7）年10月31日
調 査 面 積	3,400㎡
開 発 面 積	369,000㎡
調 査 原 因	公園造成
調査主体者	前橋市教育委員会　教育長　岡本信正
調査担当者	前原　豊　　新井真典
調査参加者	石井春江　伊藤孝子　岡野幾代　神沢方子　木村源次郎　木村はる 久保もり子　佐藤佳子　高橋やすの　高畑八栄子　竹内るり子　角田正次郎 冨岡和子　内藤貴美子　内藤　孝　萩原和子　牧野せつよ　峰岸あや子 吉田真理子　小保方豊五郎
調 査 協 力	上野克巳　加部二生　小島純一　細野高伯　山下歳信 群馬県教育委員会文化財保護課　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 粕川村教育委員会・公園緑地部公園緑地課・たつみ写真スタジオ 丹生サーヴェイ・井上測量(株)・イズミトレス
事　務　局	課長　本山　卓・文化財専門員　阿久津宗二 埋蔵文化財係　係長　駒倉秀一　主査　園部守央　主任　井野誠一 前原　豊　斎藤仁志　狩野吉弘　戸所慎策　新井真典 坂口好孝　主事　大山知久　吉田聖二　佐藤則和 文化財保護係　係長　宮下　寛　主査　井野修二　江原　清　唐澤保之 主任　真塩欣一　主事　林　信也

内　堀　遺　跡　群　Ⅷ

印　　刷　1996（平成8）年３月25日
発　　行　1996（平成8）年３月31日

編集発行　前橋市教育委員会
群馬県前橋市上泉町664－4
TEL　0272－31－9531